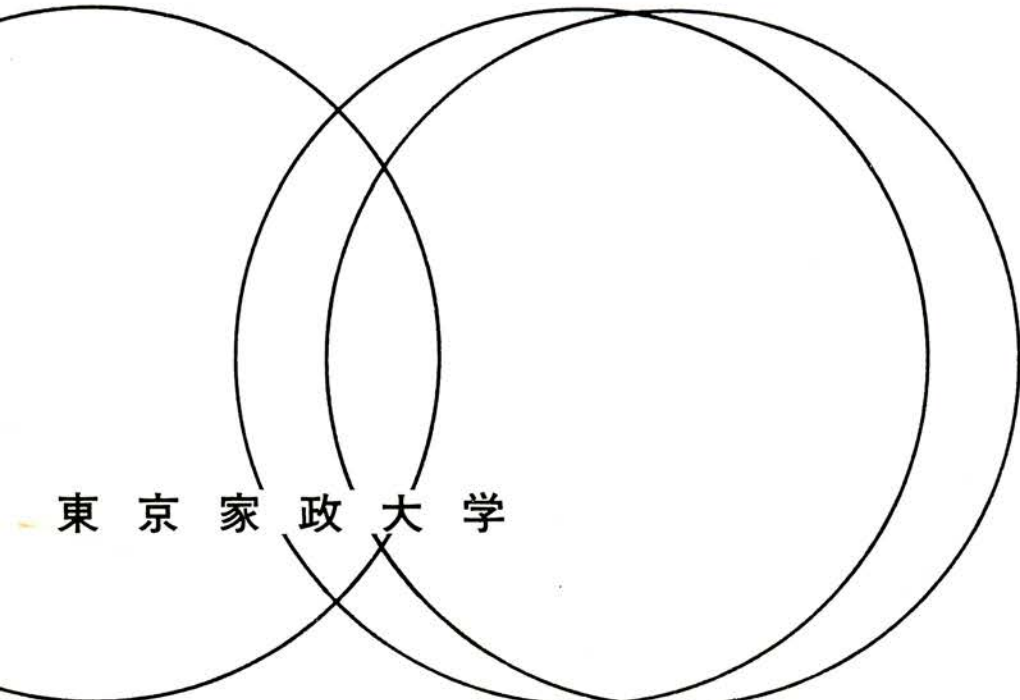


日本応用心理学会第35回大会発表論文抄録

1968 / 10



東京家政大学

諸 費 支 払 票

(注意) ※印の処は予め記入おき下さい。

大会会費受領書

正 会 員 800 円

臨時会員 1000 円

学 生 500 円

大会会費納入書

正 会 員 800 円

臨時会員 1000 円

学 生 500 円

論文抄録費受領書

1 冊 500 円 () 冊※

論文抄録費支払書

1 冊 500 円 () 冊※

懇親会費受領書

1000 円

懇親会費支払書

1000 円

総 計 受 領 書

ご氏名 様※

合計 円※

上記の大会諸費正に受領いたしました

日本応用心理学会
第35回大会準備委員長

金 平 文 二

総 計 支 払 書

合 計 円※

ご氏名 ※

施設名 ※
機関名

現住所 ※

票 斗 支 費 冊

中華民國二十六年四月二十日

省人補費會赴大

省補交費會赴大

1008 補費

1008 補費

1001 民衆教育

1001 民衆教育

1002 補費

1002 補費

省補交費會赴大

省補交費會赴大

1002 補費

1002 補費

省補交費會赴大

省補交費會赴大

1001

1001

省補交費會赴大

省補交費會赴大

1002 補費

1002 補費

1001 民衆教育

1001 民衆教育

1002 補費

1002 補費

1001 民衆教育

1001 民衆教育

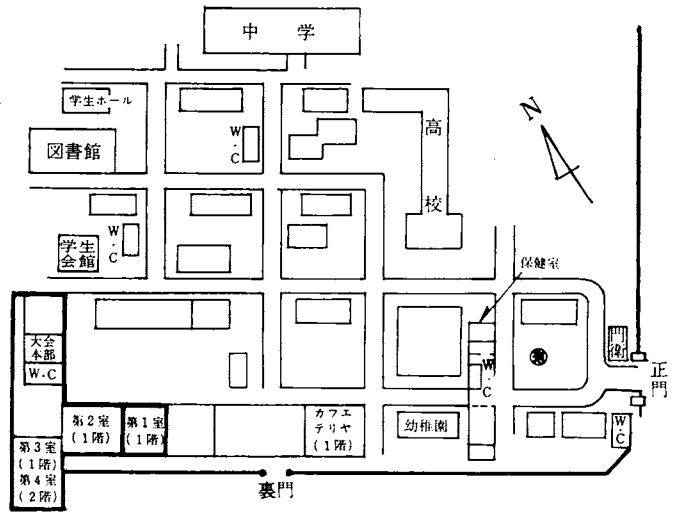
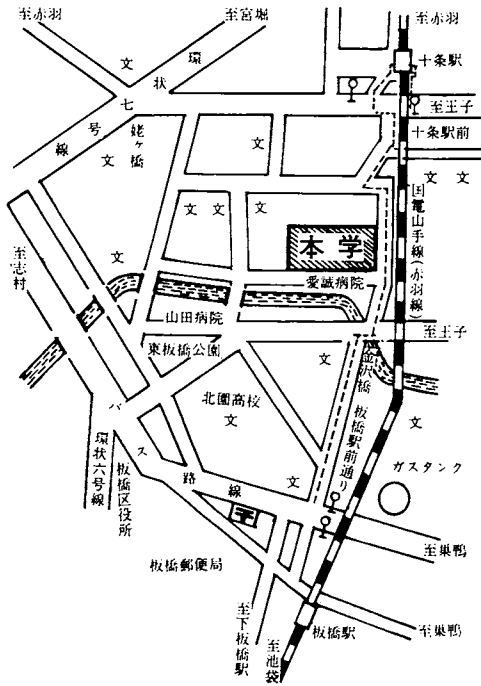
日 本 応 用 心 理 学 会

第35回大会発表論文抄録

1968年10月

東 京 家 政 大 学

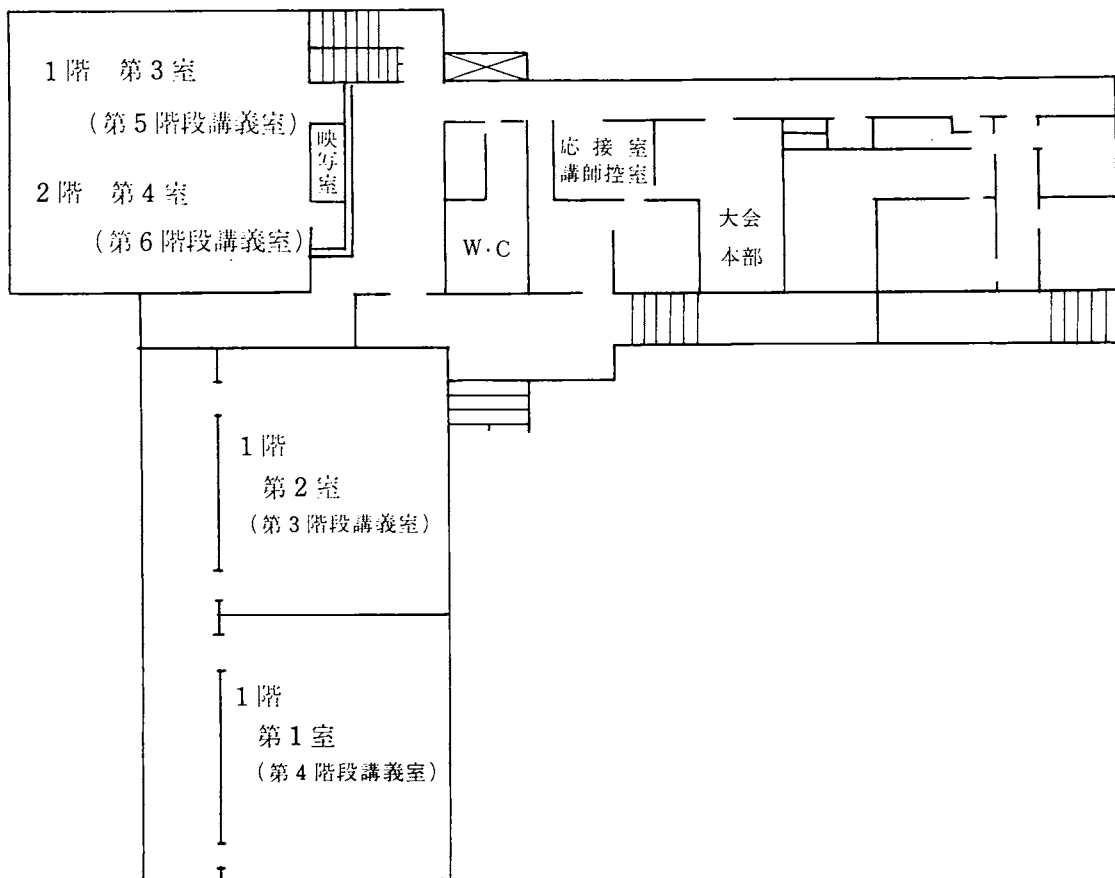
会場への道順 と学内地図



会場	第1会場	東京家政大学	第4階段講義室
	第2会場	同大学	第3階段講義室
	第3会場	同大学	第5階段講義室
	第4会場	同大学	第6階段講義室

駅→会場	国電十条駅下車 徒歩 8分
	都電板橋駅前下車 徒歩 7分
	国電板橋駅下車 スクールバス 3分

大会会場見取図



大会日程表

			第 1 室	第 2 室	第 3 室	第 4 室
第一日(十月九日水)	午前	9.00 } 12.00	教 発 社 育 達 会	産 業 職 業 指 導	検 査	臨 床
	午後	1.15 } 4.30	シ ン ポ ジ ア ム 課題：家族関係に関する研究の現状と将来			
		5.00 } 7.00	懇 親 会			
第二日(十月十日木)	午前	9.00 } 12.00		教 育 発 達	発 達 人 格	犯 人 交 問 工 罪 学 通
	午後	1.15 } 4.30	講 演 演題：心理技術者の資格認定に関する諸問題			

○ 参会者へのご案内

- I. 受付：10月9日、10日とも受付は午前8時30分より行ないます。
1. 大会会費：正会員 800円
臨時会員 1,000円
学生会員 500円
 2. 懇親会：会費 1,000円、第1日（10月9日）午後5時より7時まで、第2本館カフェテリアで行ないます。
 3. 諸費支払：上記諸費は発表論文集綴込みの諸費支払票に必要事項をご記入のうえ、受付でお支払いください。
- II. 会場：研究発表は第1室（第~~3~~⁴階段講義室）第2室（第~~4~~³階段講義室）第3室（第5階段講義室）第4室（第6階段講義室）の4会場にわかれています。
シンポジウム・講演・総会は第3室（第5階段講義室）で行ないます。
- III. 大会本部：第4本館1階図書室に設けてあります。
- IV. 休憩室：第4本館3階の第1、第2児童実験演習室に設けてあります。
- V. 展示室：図書は第4本館第3児童実験演習室、機械器具は絵画製作室で行ないます。
- VI. 係員：緑色のリボンをつけています。
- VII. 会員章：大会費を納入された方にさしあげます。会期中は必ずつけてください。（正会員—桃色のリボン、臨時会員—白色のリボン）
- VIII. 発表者のご注意：(1)研究発表は各室ごとに座長の指示により進められます。
(2)発表時間は15分、うち質問時間3分
(3)合図は発表開始後9分に1鈴
発表開始後12分に2鈴（口頭発表終了、質問開始）
発表開始後15分に3鈴（質問終了、演者交替）とします。
(4)発表者交替の折、つぎの発表者は、次回発表者席について用意してください。
(5)発表資料（プリント、スライド、テープレコーダー）は各室の準備係に、発表開始前なるべくはやめにお渡しください。（室名、発表番号、氏名を記入のこと）

なお、こちらで準備できるテープレコーダーのスピードは、
9.5cm/ s です。

- IX. そ の 他：(1)荷物預所は、第4本館3階の脳波測定室で行ないます。
- (2)諸連絡掲示は随時、会場アナウンス、伝言板、其の他でいたしますのでご注意ください。
- (3)急病の場合は案内係にお申し出ください。保健室にご案内いたします。
- (4)お弁当(200円ぐらい)の準備をします。はやめに購入ください。
- (5)電話ご利用の方は構内の公衆電話をご利用ください。
- (6)案内所は受付に設けてありますから種々のお問合せにご利用ください。

研 究 発 表

10月9日（水）午前

第1室 教育・発達・社会

座 長 児 玉 省、永 沢 幸 七

- | | | | | | | | |
|--------|----|---|---|-----------------------------|----------------------------|-----------------------|----------------------------|
| 9. 00 | 1 | 家庭環境と性格形成（その1） | 東京家政学院大学
" | ○永
伊 | 沢
藤 | 幸
順 | 七
子 |
| 9. 15 | 2 | 家庭環境と性格形成（その2）
—言葉を中心にして— | 東京家政学院大学
" | ○鈴
永 | 木
沢 | 弘
幸 | 子
七 |
| 9. 30 | 3 | 現代家庭のしつけの実態 | 埼玉県庁 | 梶 | 田 | 利 | 治 |
| 9. 45 | 4 | P-O-X事態の認知的バランスに関する研究
熊本大学 | 熊本大学 | 藤 | 野 | 藤 | 俊 |
| 10. 00 | 5 | 教職における不適応の類型（その原因と事例）
東京都八王子市立由井中学校 | 東京都八王子市立由井中学校 | 岡 | 田 | 春 | 生 |
| 10. 15 | 6 | 成人精神薄弱者の社会的生活力に関する研究第3報
—在宅保護と施設収容による比較—
国立精神衛生研究所 | 国立精神衛生研究所 | 桜 | 井 | 芳 | 郎 |
| 10. 30 | 7 | 幼児・児童の問題行動の分析（4）—1
東京成徳短期大学
"
"
"
大阪教育大学
山口女子短期大学 | 東京成徳短期大学
"
"
"
大阪教育大学
山口女子短期大学 | ○児
森
中
立
小
松 | 玉
上
田
川
林
本 | 史
カ
和
芳
依 | 省
朗
子
子
郎
子 |
| 10. 45 | 8 | 幼児・児童の問題行動の分析（4）—2
東京成徳短期大学
"
"
"
大阪教育大学
山口女子短期大学 | 東京成徳短期大学
"
"
"
大阪教育大学
山口女子短期大学 | ○森
児
中
立
小
松 | 上
玉
田
川
林
本 | 史
カ
和
芳
依 | 朗
省
子
子
郎
子 |
| 11. 00 | 9 | 幼児の積極性に関する一考察
東京家政大学 | 東京家政大学 | 大 | 滝 | ミ | ド
リ |
| 11. 15 | 10 | 保育問題に関する調査報告（1）
東京家政大学
"
"
"
" | 東京家政大学
"
"
"
" | ○大
山
堀
金
島 | 場
下
内
平
田 | 幸
俊
康
文
俊 | 夫
郎
人
二
秀 |

10月9日（水）午前 第2室 産業・職業指導

座 長 伊 藤 祐 時、 板 倉 善 高

- | | | | | | | | |
|--------|---|-------------------------------|---------------------|------|-----|-----|-----|
| 9. 00 | 1 | キーパンチャー意識調査の結果について | 東京家政大学
人 事 院 | ○金 菅 | 平 原 | 文 | 三 馨 |
| 9. 15 | 2 | 電算機女子オペレーターに対する意見調査 | 星美学園短期大学 | 馬 | 場 | 昌 | 雄 |
| 9. 30 | 3 | 歯磨清涼感の対比較判断における時間順位誤差 | サンスター歯磨株式会社
日本大学 | ○梅 浅 | 沢 井 | 伸 正 | 嘉 昭 |
| 9. 45 | 4 | 某食品製造会社における部門別適性に関する研究 | 日本リクルートセンター | 大 | 沢 | 武 | 志 |
| 10. 00 | 5 | 公害が作業性格に与える影響
—作業性格検査37— | 適性研究所 | 板 | 倉 | 善 | 高 |
| 10. 15 | 6 | 現代学生層における意識構造についての研究 | 立教大学 | 斧 | 田 | 大 公 | 望 |
| 10. 30 | 7 | 青年期における職業観の発達
—質的変容（2）— | 近畿大学 | 広 | 井 | | 甫 |
| 10. 45 | 8 | 実験的作業性格検査法によるパーソナリティと職業適性の診断 | 北海道池田高等学校 | 木 | 幡 | | 豊 |
| 11. 00 | 9 | 職業満足の因子分析的研究
—女子従業員を対象として— | 関西学院大学
" | ○角 武 | 田 | 隆 正 | 司 信 |

10月9日（水）午前 第3室 検 査

座 長 石 井 克 己、 横 瀬 善 正

- | | | | | | | | |
|-------|---|----------------|--------|---|---|---|---|
| 9. 00 | 1 | 学力向上要因診断検査の妥当性 | 東京教育大学 | 松 | 原 | 達 | 哉 |
|-------|---|----------------|--------|---|---|---|---|

- | | | | | | | | |
|--------|---|---------------------------|----------|----|---|---|---|
| 9. 15 | 2 | 幼児性格行動診断検査の試み（その3） | 九州工業大学 | 藤 | 原 | 元 | 一 |
| 9. 30 | 3 | 感覚性誘発電位と反応時間の関係について | 日本女子体育大学 | ○岩 | 崎 | 好 | 子 |
| | | " | " | 杉 | 本 | 功 | 介 |
| 9. 45 | 4 | 精神テンポに関する基礎的研究第35報告（発表取消） | 大森第6中学校 | ○望 | 月 | | 稔 |
| | | 早稲田大学 | " | 三 | 島 | 二 | 郎 |
| | | " | " | 浅 | 井 | 邦 | 二 |
| 10. 00 | 5 | 二重抹消検査の研究Ⅶ | 茨城大学 | ○菊 | 池 | 哲 | 彦 |
| | | " | " | 白 | 幡 | 悦 | 子 |
| | | 東北大学 | " | 北 | 村 | 晴 | 朗 |
| 10. 15 | 6 | Graves のデザイン判断テストの試行（1） | 名古屋大学 | ○横 | 瀬 | 善 | 正 |
| | | " | " | 内 | 山 | 道 | 明 |
| | | " | " | 鈴 | 木 | 正 | 弥 |
| | | " | " | 辻 | 敬 | 一 | 郎 |
| | | " | " | 後 | 藤 | 倬 | 男 |
| 10. 30 | 7 | Graves のデザイン判断テストの作成（2） | 名古屋大学 | ○後 | 藤 | 倬 | 男 |
| | | " | " | 横 | 瀬 | 善 | 正 |
| | | " | " | 内 | 山 | 道 | 明 |
| | | " | " | 鈴 | 木 | 正 | 弥 |
| | | " | " | 辻 | 敬 | 一 | 郎 |
| 10. 45 | 8 | 人間の生き方に関する心理学的研究（7） | 九州大学 | ○石 | 井 | 克 | 己 |
| | | 駒沢大学 | " | 秋 | 重 | 義 | 治 |
| | | 九州大学 | " | 中 | 溝 | 幸 | 夫 |

10月9日（水）午前 第4室 臨 床

座 長 長谷川 孫一郎、内 海 滉

- | | | | | | | | |
|-------|---|-----------------------------|--------|----|---|---|---|
| 9. 00 | 1 | 航空機騒音下の子供達（3）
—第三年度研究報告— | 日本女子大学 | ○熊 | 本 | 道 | 子 |
| | | " | " | 児 | 玉 | 昌 | 省 |
| | | " | " | 柳 | | 和 | 江 |
| | | " | " | 大 | 門 | 和 | 子 |
| | | " | " | 宮 | 本 | 加 | 子 |
| | | " | " | 竹 | 内 | 靖 | 代 |
| | | " | " | 木 | 下 | | 子 |

9. 15 2 航空機騒音下の子供たちⅣ
—第三年度研究報告—

日本女子大学	○柳		昌	江
"	児	玉		省
"	熊	本	道	子
"	大	門	和	子
"	宮	本	和	子
"	竹	内	加	代
"	木	下	靖	子

9. 30 3 皮膚科学領域に於ける心理学的試み
—各種皮膚疾患患者のパーソナリティーに就いて—

千葉大学	○内	海		混
"	青	木	孝	悦

9. 45 4 慢性精神分裂病者に対する心理劇の適用

九州大学	○吉	賀	良	子
太宰府病院	迎		孝	久

10. 00 5 内閉性の変調とその治療について
—心情質変調治療の研究第XⅦ報—

印幡少年院	長	谷	川	孫	一郎
-------	---	---	---	---	----

10. 15 6 アクション・カウンセリングに関する研究

日本児童臨床研究所	○武	藤	安	子
"	高	橋	満	子

10. 30 7 小集団活動の研究
—集団における個の姿容—

お茶の水女子大学	岩	村	佳	代	子
----------	---	---	---	---	---

10. 45 8 家族関係の診断・治療
—役割技法に関する一研究—

東京家政学院	黒	田	淑	子
--------	---	---	---	---

10月10日（木）午前
第2室 教育・発達

座 長 玉 岡 忍、 森 重 敏

9. 00 1 写字と黙読による学習効果の比較（その2）
—Teaching Machineの基礎的研究—

白梅学園短期大学	○橋	本	七	重
"	大	脇	園	子

9. 15 2 精薄児および境界線児の睡眠学習

一宮学園 千葉大学	○内	山	元	夫
	小	出		進

9. 30 3 児童における心身のエネルギーについて
東京都国分寺市立第一小学校 竹 原 昭 典
9. 45 4 児童の音楽性の発達に対する診断（その一）
—学校放送「日本のふし」小学五年生ラジオ聴取による音楽美の理解感得力—
福岡県大莞小学校 徳 永 茂 郎
10. 00 5 造形と音楽との関係（Ⅰ）
—形象による音楽的想像—
共立女子大学 玉 岡 忍
10. 15 6 スライドで映写された数字と文字の読みやすさ（2）
信州大学 柴 田 徹
10. 30 7 保育絵本における語彙構造の分析（第2報）
—名詞を中心として—
東京家政大学 加 藤 綾 子
10. 45 8 特殊児童の教育評価に関する一研究（その八）
目黒区立向原小学校 岩 本 英 男
11. 00 9 優秀児の特質に関する基礎研究（第22報告）
—幼稚園児の第2次追跡結果を中心として（その3）—
東京家政大学 ○後 藤 嘉 余 子
岡山大学 森 重 敏
柿ノ木坂幼稚園 佐 藤 初 重

10月10日（木）午前 第3室 発達・人格

座 長 秋 重 義 治、大 谷 宗 司

9. 00 1 調息調心に関する心理学的研究（77）
—呼吸作用と情動との関係に関する心理学的研究（14）—
駒沢大学 松 本 博 基
9. 15 2 調息調心に関する心理学的研究（78）
—人格の変容に及ぼす調息の効果に関する心理学的研究—
駒沢大学 中 村 尚 司

9. 30 3 調息調心に関する心理学的研究 (79)
—坐禅における脳波の除波化の変化に関する心理学的研究 (1)—
駒沢大学 香 渡 大 玄
9. 45 4 調息調心に関する心理学的研究 (80)
—禅カウンセリングと実存分析に関する比較心理学的研究 (1)—
駒沢大学 武 井 広 平
10. 00 5 睡眠時の呼吸に関する研究
九州大学 中 溝 幸 夫
10. 15 6 ESP テストに与える実験条件に関する知識の影響
防衛大学校 大 谷 宗 司
10. 30 7 ESP と生理周期との関係 (II)
日本体育大学 ○長 田 一 臣
防衛大学校 大 谷 宗 司
10. 45 8 幼児の運動学習における個人差 (I)
東京学芸大学 福 島 脩 美
11. 00 9 課題と構えの形成との関係について
(1) 幼児に於ける色・形反応と構えとの関係
九州大学 川 島 啓 子
11. 15 10 大きさの恒常性の発達的研究 (IX)
—日常空間と写真面の比較—
東京家政大学 島 田 俊 秀

10月10日 (木) 午前

第4室 交通・犯罪・人間工学

座 長 山 根 薫、佐 伯 茂 雄

9. 00 1 自動車運転者としての自覚的特徴
立正女子大学 山 根 薫
9. 15 2 安全運転管理者制度の問題点
新潟大学 長 塚 康 弘
9. 30 3 阪大式C-F テストについて (2)
大阪大学 ○大 森 正 昭
" 鶴 田 正 一

9. 45 4 長時間注意状況に関する心理生理的研究

九州大学 山 岡 哲 雄

10. 00 5 少年犯罪の地理的分布

—東京都区部における少年犯罪の地理的分布—

警 視 庁 佐 伯 茂 雄

10. 15 6 家庭と犯罪との関係

警 視 庁 三 原 憲 三

10. 30 7 犯罪性精神病質者の心理的分析

神奈川県立栄養短期大学 ○関 力
早稲田大学 伊 藤 安 二

シンポジウム

10月9日(水) 午後 1. 15～4. 30

課 題：家族関係に関する研究の現状と将来

司 会
演 者

東京家政大学 山 下 俊 キ 郎
大妻女子大学 山 本 克
東京都立大学 辻 正 三
東京家庭裁判所 森 田 宗 彦
お茶の水女子大学 湯 沢 雍 彦

講 演

10月10日(木) 午後 1. 15～4. 30

演題：心理技術者の資格認定に関する諸問題

演 者 日本女子大学名誉教授 児 玉 省

家庭環境と性格形成(その1)

○永沢 幸七
(東京家政学院大学)

目的: 家庭を中心とした生活環境が性格形成の
上へ如何なる影響を及ぼすかを検討する。

方法: (1) 自由記述法。調査期日、昭和41
年11月、調査対象、都内私立某女子短期大学
1年146名、2年43名。調査期日、昭和42年
11月、調査対象、都内都立某高校3年女子50
名。「自己の性格に及ぼした家庭環境について」と
いうテーマで作文を書いたものを、現在まで彼
々が家庭を中心とした環境の如何なる要因によ
り、影響をうけ、性格が形成されたかを調査
した。(2) 質問調査法。自由記述法による作文の
中から性格に及ぼした影響の要因を考へられるもの
を見出した。a. 4. 3. 2. 1. 0. 4-は非常に強く影響を
うけている。0-は全く影響をうけていない。なお、
その項目が自分存在している場合(例之は「兄」
という項目で、兄を持たない人)不在項目として扱
わり、番号上は×印を付けさせた。c. 回答は、各
自が各項目のあてはまると思ふべき段階上は○印
をつけさせた。d. 参考に家族構成も書きさせた。
(3) 事例研究法。自由記述法による作文の中か
ら性格に及ぼした影響として代表的なものを抜粋
し、例文として参考資料とした。

結果: (1) スコア。(2) プロファイル (3) 事例研究。

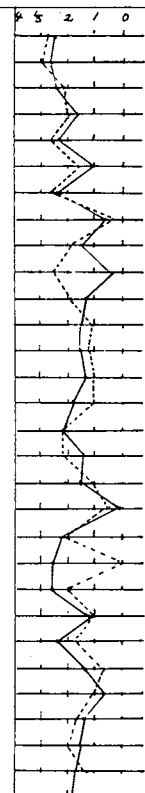
(1) スコア・プロフィールによる考察

父の性格形成に及ぼす影響に対し、少くから「影響
をうけている」のは男子93.8% 女子96.4%にも及ぶ。
母に対しては男子96.9% 女子においては98.2%で
父よりも、より影響をうけている。プロフィールの平均
値からみても50項目中第2位を占めている。兄・姉
の場合は、姉をもつ人は男子40%、女子36.4%。プロ
ファイルからわかるように男子の場合、姉より兄が
の、X1で女子の場合、兄より姉からの影響をうけ
るのが大である。家族関係において父母について兄
姉のつながりは密接である。おじ・おば、リヒこの項
目も、X1ほど影響は大きくない。おじ・おばについては
男子50.8%、女子63.6%にもなる。おばについては男子53.8
%、女子49.1%、リヒについては男子49.2%、女子45.5%。
友達、50項目中第3位に影響をうけていると表わ
されている。男女の差は認められるが注目

伊藤 順子
(東京家政学院大学)

すべきことは女子に同じくは全く影響をうけていな
い。男子においては15%と極少を示して
いる。特に男子は女子より早く友達への関係をも
つ。女子は父母との関係に強い結合を示し、家庭に
なごりとする社会的背景から男子より一歩遅れ
た他人との交友をもつ。長男・長女、末子、一人子、
この項目については兄・姉・弟・妹の項目でもわ
かるように、兄弟の如何なる地位に存在しているか
で両親の取り扱いが影響があり、それが性格に大
きく影響してくると思われる。両親の共働き。男子
より女子の方が影響をうけるというところがある。
これは日常生活、よく家事を担う母親の代理とい
うことも女子にさせることとなり男女の差を示す原因

項目	男子	女子
1. 父	2.43	2.59
2. 母	2.68	2.89
3. 兄	2.02	2.19
4. 姉	1.77	2.0
5. 友達	2.42	2.65
19. 一人子	1.0	1.5
20. 自己	2.35	2.52
21. 学校	0.53	0.93
24. 男女共学	1.96	1.72
25. 男子校	1.67	2.67
34. 両親の共働き	1.19	2
32. 家が商売	1.36	1.14
33. 父の職業	1.4	1.06
34. 母の職業	1.33	1
35. パート作	1.8	1
36. 親の再婚(再婚)	2.07	2.04
36. 親の再婚(再婚)	1.98	2.19
37. 親の再婚(再婚)	1.59	1.29
40. 不承継(不承)	0	0.33
41. 別居生活(別居)	2.17	3
42. 別居生活(別居)	2.17	0
44. 別居生活(別居)	2.13	2
45. 役員(役員)	1.1	1.16
46. 選挙(選挙)	2.21	1.79
47. 病者(病者)	1.33	0.82
48. 病者(病者)	0.92	1.04
49. 病者(病者)	1.22	1.35
50. 病者(病者)	1.49	2.03
22. 遺傳	1.76	1.30



家が商売、殆ど
親が商売で、特
に手傳いされる人
全然タッチしな
い人などより
性格上異なっ
てくるが人の依
りや金銭上早く
からなれるとい
う異性格に影響
を及ぼす原因と
なる。男女共学
男子校、女子校。
男女共学の項目
では男女の差は
認めた。男子校、女子校
になると男女の
差が目立つ。男
子はプロフィール
67に男子女子
2.67と2段階の
差がある。

考察: 中でも影響を及ぼしているのは両親との別居
生活(女子)。プロフィールの影響。中には友達の影響。ま
た自分自身が自己の性格形成を主張するものが多い。女子校
での生活がうける影響も比較的大きく。

現代家庭のしつけの実態

梶 田 利 治
(埼玉県庁)

目的：現代の家庭におけるしつけの実態を「叱り方」および「親子対話」の視座から明らかにしようとするものである。

方法：「叱り方」については大宮市M中学校の2年生の男女189人について質問紙法により調査した。

「親子対話」については、所沢市T中学校1年生の男女286人について質問紙法により調査した。

結果：Ⅰ「叱り方」の実態

(1) 幼児期における体罰の実態——「あなたは小学校入学以前に父又は母にたたかれたことがありますか」——「たたかれたことがある」とする者は次のとおりである。

幼児期の体罰経験

	農業	商店	つとめ人	その他
男子	47.1	40.0	32.2	43.7
女子	—	50.0	34.5	35.7

以上のことから幼児期における体罰は、概して農家、商店等、親たちが自己の業務に多忙である職業において多く用いる傾向があった。

(2) 小学生期における体罰

	農業	商店	つとめ人	その他
父	男 58.8	60.0	67.0	56.3
	女 45.5	30.0	51.7	42.9
母	男 35.3	40.0	54.2	37.5
	女 36.4	30.0	51.7	57.1

以上のことから一般に「つとめ人」家庭で体罰が多く、「農業」「商店」家庭では比較的少ない。性別では女子に比して男子に対して厳しい傾向がうかがえる。

(3) 子どもからみた体罰の評価

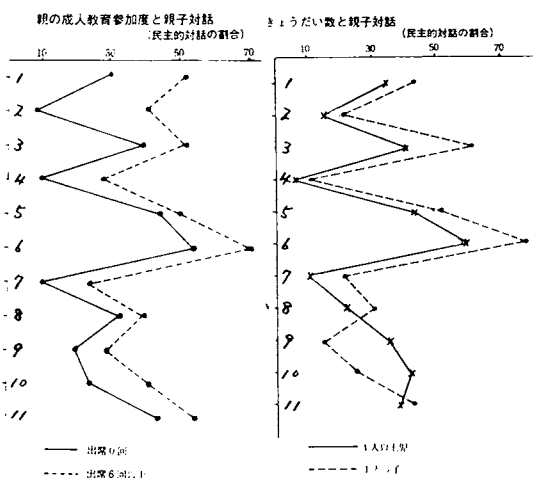
「たたかれたことを、いま思い出してどう感じていますか」の問に①無答35.4%。②「自分の心の薬になった」26.7%。③「どちらでもない」18.0%。④「その他」12.2%。⑤「しゃくにさわっている」2.9%である。このことは、親子の間がしっくりいっている限り、別に何とも感じていないというものが「無答」や「どちらでもない」にあらわれているものと思われる。要は自然のうちに必要があるときのみ行なわれた性格のもので、とくにそこに問題としてとりあげたことは少ないように思われる。

「自分が親になったら子どもをしつけるうえでどう

するか」——と聞いてみると「絶対にたたかない」は7.4%。「幼児期はたたくが小学生期は絶対にたたかない」13.2%。「やむを得ないときは小学生期でもたたく」72.0%。「必要あればいつでもたたく」6.0%である。これからみると子どもたちは、かなり厳しいしつけを認識しているようである。

Ⅱ「親子対話」の実態

「親子対話」という視座からしつけの実態を明らかにするために、次の11場面について、親がどんな反応を示すかをみてみた。①よくない友だちとつきあっているとき ②勉強以外のことに熱中しているとき ③おそく家へ帰ったとき ④失敗してしよんぼりしているとき ⑤子どもから批判されたとき ⑥ものさねだられたとき ⑦悪い成績をとったとき ⑧危険なところ(海や山)へ行こうとしたとき ⑨親に注意されてふくれっつらをしているとき ⑩子どもがへりくつをいったとき ⑪子どもがいたずらをしたとき。



(左の番号は、本文中の設問番号を示す)

以上の場面に対して、A.放任型 B.対話型 C.保護型 D.専制型に分けて反応してみた。これも家庭の類型別についてみると次のとおり。①きょうだい数と親子対話の関係は上右図の如く4人以上のきょうだいをもつ子は1人につきくらべて親との対話が少ない。②職業と親子対話の関係にも有意差があった。③親の成人教育参加度との相関は上図のとおりで差が認められた。(連絡先) 浦和市高砂——埼玉県庁青少年室内

P-O-X 事態の認知的バランスに関する研究

藤野 藤 俊
(熊本大学 教育学部)

目的：認知的バランス理論によれば、 $P-O-X$ 事態において要素間の関係は $(+X-)$ の符号で示すとき、 $P \rightarrow O$ 関係が $(+)$ の場合は $P \rightarrow X$ と $O \rightarrow X$ の関係が同符号、 $P \rightarrow O$ 関係が $(-)$ の場合は $P \rightarrow X$ と $O \rightarrow X$ の関係が異符号であるとき、ともにバランスの状態にあるといわれる。またアンバランスの状態は不快な緊張感をもたらし、そこにバランスへの力が作用することになるという。本研究は単に $(+X-)$ の関係符号だけでなく、その強度をも変化させることにより、 P が $O \rightarrow X$ 関係を如何に推測的に判断するか、さらにその判断の結果形成された認知的事態に対して P が如何に快-不快の感情的評価を行なうか、この点を検討しようと試みた。

方法: (1) 被驗者 大学生 176 名

(2) 材料 呈示した刺激事態は図1に例示。Pは被験者、()はPが一定の好嫌的態度を有する人物(以下Oで示す)、IはPにとって重要な賛否の論点となる事柄(前記Xに該当)。P→OとP→Iの關係に(十)(+)(-)(-)の4種の符号を設けたのでその組合せにより全部で16個の刺激事態が構成された。P→O關係の(十)(+)はPに面識のある人のなかで最も好きな人、(+)はやや好きな人、(-)はやや嫌いな人、(-)は最も嫌いな人。またP→I關係の(十)は絶対賛成、(+)はやや賛成、(-)はやや反対、(-)は絶対反対を意味する。

(3) 手続 ①被験者に16個の刺激事態を提供し、Pの立場に立たせ、まず $P \rightarrow O$ 関係の前記の4符号に該当する人物を同性のなかから1人づつ選定させ、そのイニシャルを()のなかに記入させた。②次に $P \rightarrow I$ 関係の前記4符号の各々に該当する事柄(I)を熟考の上決定させた。③4符号に該当するOとIがきまつた后、 $P \rightarrow O$ と $P \rightarrow I$ の16個の事態に対して $O \rightarrow I$ の関係符号を推測判断させ〔 〕のなかに前記4種の符号で記入させた。④かくてでき上つた $P \rightarrow O$ 、 $P \rightarrow I$ 、 $O \rightarrow I$ の3関係からなる認知的事態に対するPの快—不快の感情的評価を5段階尺度で行なわせた。

結果：(1) 表1は全般的傾向をみるために、関係符号の強度差を考慮せず、 $P \rightarrow O$ と $P \rightarrow I$ の(+)と(-)の符号の組合せによる4つの事態に対する $O \rightarrow I$ の(+)(-)の推測判断の%及びその感情的評価の平均値(表ではAという記号で示した)を示した。

(2) 表2は表1の $P \rightarrow Q$ が(+)の場合の $P \rightarrow I$ と $Q \rightarrow$

I が同符号のときの結果で、符号を(++)(+)(-)(-)に分
析しそれらの組合せに対する%とその平均感情値を示
した。

(3) 表3は表1の $P \rightarrow O$ が(+)の場合の $P \rightarrow I$ と $O \rightarrow I$ が異符号のときの結果で、異符号間の諸種の組合せに対する%とその平均感情値を示した。

考察：(1) 表1より $P \rightarrow O$ が(+)のときは推測判断がバランスの傾向を顕著に示すことが知られる。 $P \rightarrow I$ と $O \rightarrow I$ が同符号のとき 86.1 及び 70.3 と高率を示し、これに応じて感情値もまた高くなっている。これに対し $P \rightarrow O$ が(-)のときはバランスへの傾向が殆んど認められず、感情値にいたっては逆の傾向さえ示している。

(2) 表 2 は $P \rightarrow 0$ が (+) のときの バランス 事態 を分析的に示したものであるが、 $P \rightarrow I$ と $0 \rightarrow I$ の (+) あるいは (-) の符号が 相称的 ((+)(+) (+)(+) (-)(-) (-)(-)) の場合に、非相称的 ((+)(+) (+)(+) (-)(-)) (-)(-) の場合よりも高い % を示すことが明らかである。感情値も大体これと並行関係にあり、同じくバランスの事態であつても、バランスの度の違いにより反応傾向も異なつてくることが知られる。

(3) 表3はアンバランスの事態を分析的に示したのであるが、この表の%からも(+-) > (+-), (++-) > (++-), (-+-) > (-+-), (-+-) > (-+-) というように期待に答へバランス方向への反応傾向がかなり認められる。然し感情値には一貫した傾向はみられない。

(4) $P \rightarrow Q$ が (一) の場合には、上述の諸傾向が殆んど見出されなかった。

表 1		0 → I			
		+		-	
		A		A	
		%	A	%	A
图 1	P → ++ ()	86.1	4.22	13.9	2.56
	P → - → I	29.7	2.85	70.3	3.98
	() → - → I	55.7	3.28	44.3	2.99
	() → - → I	50.7	2.60	49.3	3.21
(不快) (快)					
表 2	P → I	++	+	++	+
	0 → I	++	+	+	++
	%	35.6	33.5	15.8	15.0
	A	4.69	9.08	13.88	4.03
表 3	P → I	+	++	++	+
	0 → I	+	+	+	++
	%	49.0	14.3	22.5	14.3
	A	2.72	2.47	2.43	2.33

(連絡先) 熊本市黒髪町 熊本大学教育学部

教職に於ける不適応の類型(その原因と事例)

○ 田 春生 (東京都八王子市立田井中学校長)

前文: 学校という職場で明らかに不適応と見なされ、疎外者となる教員には、その性格、行動に一定の型があるようである。

不適応の状況、その攻撃性や異常行動、顕著な自己顕示、自己弁解、振替等は、思想的表皮や素面の口実にかかわらず共通点があるようである。

その不適応になる経過を20年間にわたり、数々の観察した中から、顕著な特徴を示す2名の事例を挙げて考察したい。

事例1 K教諭(49才男、私大出、組合員が健康)

● KはA区中学校で7年勤務して転任して来た。はたらく盛りの40代に、一度も学級担任をせず、学年所居もなかった。校務分掌は保健係であった。

● Kは授業の能力はやや弱く、事務能力や生徒指導の能力は著しく弱っていた。先ず3年に配属した。

● えず歓迎会に出席を拒否したのでその理由を問うとその費用の中に業者からのリベートが入っている。自分はリベートをとることは反対で健全な世論もそれを指摘している、と言うので、その経費は教職員会の積み立てでリベートは一歩も入っていないことを明らかにした所、体が悪いと言って欠席し、その後同じ理由で親睦の会には一度も出ず、リベートが入っていないことを明白に示しても同様であった。

● その後Kは毎日同僚といさかいを起し、相手をけがし、攻撃し、更に校長の許へ来て相手を攻撃し校長の処置を促した。その論法は憲法を引用して理路整然として詰め寄り1時間半にわたるのを恒としてた。前提は事実と相違し議論は飛躍が多かった。調べてみると原因はKにあるので、その点を指摘すると、自分はリベート問題をつつので嫌われるので、自分は正しいと譲らなかった。

● その後争ある毎に、全議等が自分の立場を顯示し、平素職員室で大声で自慢話をし、授業中生徒に向けて自分は正しいので嫌われているのだと演説調で話した。

● 結局1年後、前の職場と同じように、学年所居をなくし、図書館勤務とし、なるべく職員及び生徒との接触を少なくせざるを得なかった。

● Kは家庭で10才年長の妻をもつ(同じ教職でKより地位はよ)適当な年令に達してすみやかなポストにアップしたものの、その男等威加に攻撃性に転換し

たと思われる。

事例2 O教諭(43才男、地方大出、共産党員)

● Oは各正を転任してA区の小学校に1年居て中学に転じた。英語教師であるが学力は中学2年程度で、生徒や父兄の信用は無く、本人もその事は自覚していた。事務能力、生徒指導力に欠け、性格も非協調的であった。学級担任や指導上の分掌についても、トラブルを起すので1年でやめさせられ、最後に学級担任せよ保健係となっていた。

● 組合には熱心なOは、職場会の決定事項を守らず勝手な行動をするので、組合からも疎外されていた。職場には数名の党員が居たが、Oは危介者とされていた。

● 結局Oは次第に一匹狼のような極端な行動をとりはじめた。ストの際の極端な行動、学力テストの妨害、国旗掲揚儀の破壊、校長から叱責せられるとその悪口や傷のじらをつくり地域や区内の学校に配布。違情な送迎活動や思想教育を行い、それを止められると、反動ボスターを車に貼って生徒に見せつけ、職場会の再度の取り外しの勧告も聞かされた。

● 昨夏全議、PTA総会等には無味のわがまま大演説をし、正の組合の執行等々に立候補した。所が支持者は30名中2名で、分会の推せんが得られなかった。校長がそのことを他の職員と話題にした所、低え聞いて激怒し、冤状違反から告発すると恫喝しこんだ。

● 又自分の狙ったあるポストについての某教員を憎み、校長への追従者として終始攻撃した。事実はその教員は剛直な人間で、組合からも最も信用されていた。後に図書館に落ちたOは、区内の図書館研究会で副部長を自せんが強引に主張して獲得した。

● 結局Oは授業を8時間以内に減らし図書館係とし、学年所居をなくし、翌年は地域父母の強硬な要望で他の中学校へ転出した。

● Oの能力及び性格から職場内での活動がすべて失敗に帰したの、その代償行動として外部で攻撃的に戦われたと思われる。

教職の自主性と自由の保障、強い身分保障の中で、この種の教員が年々増加していくことは、教育上重大問題があると思われる。

成人精神薄弱者の社会的生活力 に関する研究 第3報 — 在宅保護と施設収容による比較 —

桜井芳郎
(国立精神衛生研究所)

目的: 成人精神薄弱者の社会適応とはなる処遇として社会生活力の開発増進に関する指導が考えられる。

我々は在宅保護をうけている者と施設収容されている者の身辺の処理、意志の表示と文換、移動交通、作業技術、数量処理、就労その他の日常生活の状況、性格行動の特徴などの実態を把握し、両者を比較考察を通じて指導のあり方を検討する。

方法: 調査は調査項目ごとに施設においては施設職員、在宅者では相談所の心理判定員が対象者の状況と具体的に記入し、その記述をもとに詳細判定をおこなった。

調査対象は施設収容群は全国成人3施設に10名、在宅保護群は東北地方の農村地帯に10名である。施設収容群の性別は男67%と女33%、年齢は20才前後の若者が多く、知能程度は中程度の者が60%と占めている。在宅保護群の性別は男女各50%で、年齢は20才後半から30才前半の者が多く、知能程度は中程度及び重度の者が多い。

結果: 両群の社会生活力と領域ごとに知能程度別にみると次の通りである。

(1) 身辺の処理: 施設収容群では軽度80%、中度60%、重度30%、在宅保護群では軽度50%、中度20%、重度7%が自立している。

(2) 意志の表示と文換: 施設収容群では軽度の者は男85%、女69%、中度の男26%、女17%、重度の男7%、女4%が自立しているが在宅保護群では皆無である。

(3) 移動交通: 施設収容群では軽度の男40%、女19%、中度の男9%、女1%、重度の男0%、女6%、在宅保護群では軽度の男25%、女10%、中度の男5%が自立している。

(4) 作業技術: 施設収容群では軽度の男42%、女27%、中度の男21%、女7%、重度の男5%、女3%、在宅保護群では軽度の男25%が能力を有している。

(5) 数量処理: 施設収容群では軽度の男39%、女28%、中度の男7%、女5%、重度の男1%、女2%、在宅保護群では軽度の男25%、女10%が可能である。

(6) 就労その他の日常生活の状況: 施設収容群では軽度の男65%、女39%、中度の男13%、女10%、重度の男女各1%、在宅保護群では軽度の男13%がかなりの力を発揮している。

(7) 性格行動の特徴: 性格、対人態度、非及び反社会的行動などは施設収容群では各々順次段階とも多少の問題と有するものが多いが在宅保護群では何れにも問題が多い。

年令別に両群の社会生活力とみると両群とも年令と社会生活との関係はあまり認められない。

考察: 成人精神薄弱者の社会生活力は知能程度別にみると在宅保護群よりも施設収容群が著しく上回っている。年令別には両群とも一定の傾向は認められない。かようなことから成人精神薄弱者の社会的生活力は知能や年令との関係よりも過去の生活経験の内容との関係がより密接であると考えられる。

在宅保護群では彼らを取りまく生活環境に問題が感じられる。在宅保護群の家族の態度とみると無関心、放任が62%と占めている。かようなことから適切な生活経験の機会に乏しく社会生活力の開発増進及び発揮がまたげられているものと考えられる。

一方、施設収容群においても施設職員の知能偏重の考之方や拙劣的な指導、生活訓練による社会生活力の発揮の阻害が感じられる。

成人精神薄弱者の社会生活参加を進めるためには具体的に現実社会での望ましい生活経験と豊かに社会生活力の向上をはかる指導が必要であり、その為には在宅保護群にあっては在宅指導を通じて精神薄弱者なりに家族に対する治療的教育的接近と面談通訳施設において情緒安定と改善と行ない社会生活に必要な生活態度と知識と身につけてせ望ましい人間関係の樹立をはかる処遇が望まれ、施設収容群では単に施設に収容し施設内だけでの指導訓練でなく社会生活参加に向って方向づけと活動が必要である。

(連絡先) 千葉県市川市国府台町1-7-1 国立精神研(7)

幼児・児童の問題行動の分析 (4) - 1

○児玉 省 森上史朗 中田カヨ子 立川和子 小林 芳郎 松本俊子
(東京成徳短期大学) (大阪教育大) (山ロセ子短大)

Ⅰ研究の構想：幼児児童の問題行動の種類、その出現頻度、年令的展開を検討し、同時に児童の発達状態及び家庭環境的条件との結びつきを考察し、併せて問題行動の意義を考えようとするものである。本研究については、すでに日にはじめ三回の発表を行ってきたが本日の発表では、一つは児童の問題行動の分類の問題をとりあげ、私はこれに関連して児童の問題行動の意義その他について考察を加えようとするものである。

Ⅱ問題行動という言葉について：アンケートに答えた親1127名、教師132名、医師68名、心理学者70名の回答を分析すると、

親：行動より態度を問題とすべきだ。問題行動というのは非行（反社会的行動）に限って使うべきものだ。子供の発達における逸脱だ。正常な行動からの逸脱。周囲の人が迷惑をこうむるような行動。不適応行動。家庭社会児童がともに困っている問題。

医師：乳幼児とくに乳児にこういう言葉を使うのは不適当である。小児においては神経症と正常の行動を区別することは困難であるのでこういう言葉は不適当である。異常行動としては如何。漠然として困る。便利な言葉だが抵抗を感じる。適当な言葉ではないが、他に適当な言葉が見当たらない。児童精神医学の確立が先決。問題児という言葉なら度々使う。気管支喘息などは「問題行動」と同じ原因で起きるか？問題行動とは言えないだろう。行動異常というか異常行動といったら、*abnormal behavior* と思うが、幼児以上では反社会性的なものか。この言葉でよいと思う。含義がいまいで誠に便利な言葉である。しかし我々はそれを症状 (*symptom*) と呼ぶことをちょうちよしない。

医師「どういう規準で問題行動を決めるか」：Gesell の正常行動に関する規準から。医学診断書（削ゲベールの発達規準、カナーの児童精神医学その他）から。Loutitt のよな基準から。常識的に正常を逸脱した行動。一般の小児からの逸脱。他人に迷惑をかけるかどうか。社会生活の邪魔になるか。また本人の日常生活及び生活発展の邪魔になるか。身体的に疾患がないが、心理的及び人間関係の改善によって改善せられるようなもの。現実生活に適応できないもの。

心理学者：症状群のあわわれ。発達異常一般的行動からの逸脱。平均傾向からのずれ。学校家庭での不適

応。集団生活不適応。本人が適応や精神発達に障害を来すような行動。親を困らせるある程度以上の行動。本人やまわりの人が問題とする行動。反社会的（非行的）行動。

三群の人の考え方で一致しているのは、児童の問題行動とは、(i) 異常行動とか、平均からの逸脱、正常からの逸脱 (ii) 反社会的（非行的）行動 (iii) 不適応行動、学校家庭、集団生活での不適応。社会生活の邪魔になるもの。の三つの中で、どのグループもこの三種のうちのどれかの意見を持ち合わせている人があった。なお不適応の中に入ってもいいものがあるが心理学者と親の中には、親が困っている問題、家庭、社会、児童が共に困っている問題、というのがあって注意を引いた。また医師の方からは、この言葉を使うことの不適当さを批判した人が多い。

Ⅲ問題行動に関する意見：これについての意見（研究班としての意見の統一未決定）を述べる。

(1) 親や社会が困っているような問題の意味である。しかし、夜尿、昼尿、食欲不振、神経質などから始まって、反社会的行動、精神病にまで及ぶ。夜尿症や食欲不振、かんしゃくの如きは、それほど重大な問題ではなくても親の困る問題である。どの教科書もみんなこれを入れている。

(2) わざわざこの簡単な言葉を使ったのは、重大な不適応の問題でない問題を入れて、子供の問題を考えるのが普通だからである。

(3) こういう問題は発達異常であることがあるが、たいていそれと関係ないこともある。平均からの逸脱は、勿論入るが、それほどでないものも入る。不適応と言えば不適応であるが、極く軽微のものまで入る。

(4) 大部分の子供が持っている親を困らす問題は、問題性と問題意識が低いことがあっても、特定の子供は充分に問題になり得る。

(5) 「行動」というのは、*reaction* の意味で、心理学で簡単に使う言葉として使った。前述した問題はどこから問題行動とするかという線を描くことである。

(6) 症候群である。ただし問題児という言葉はよくない。

東京都北区寿台1-7-13 TEL(03)4530 東京成徳短大内

幼児の積極性に関する一考察

大 藤 三 郎
(東京家政大学 児童学科)

研究目的: 本研究の目的は次の二つである。(1) 母親はどのように幼児の積極性の手ざかりをしているか。(2) 積極性の違いと子どもの行動特性との関係。

研究方法: 幼稚園の年長児(5才6ヶ月)・年少児(4才5ヶ月)を持つ75名の母親に付して、自由記述による質問紙を試行した。質問項目は次の内容を含む19項目からなっている。①積極的であるか否か、その理由、②積極性、③活動性、④創造性、⑤集中力、⑥幼稚園に入らないうちの変化、⑦友人関係、⑧同胞数、⑨両親の幼少時と現在の積極性について。

結果および考察: (1) 母親が自分の子どもについて、積極的であると答えたその理由について表1が表

理由	%	男児	女児
・人まじり好き	27.3	21.5	
・遊びと関係は絶対的	9.1	14.3	
・活動性大	13.6	17.2	
・園内にはよく答える	4.6	21.5	
・興味大	13.6	17.2	
・友達とよく遊ぶ	9.1	14.3	
・11-4に居る	4.6	17.2	
・おだてにのる	4.6	0	
・明々	4.6	0	
・同子が多い	4.6	0	
・おぼろしい	4.6	0	
・おぼろしいが多い	0	17.2	
・友達と遊ぶ	19.2	22.2	
・自分の気持ちの表現が	23.1	13.9	
・自分から言うがよい	3.8	16.4	
・興味大	11.5	5.5	
・引込み思案・人まじり	11.5	5.5	
・家では積極的	11.5	2.8	
・活動性小	7.6	2.8	
・何ごとの決断が速い	3.8	5.5	
・失敗と恐れ	0	8.4	
・性格的に	3.8	0	
・落ち着いていて危険を	3.8	0	
・のんびりしている	0	2.8	
・大子・競争意識が強い	0	2.8	
・身体が足踏りのため	0	2.8	
・依頼心大	0	2.8	
・11-4に居る	0	2.8	
・ほめられたい	0	2.8	

である。また、積極的でないとは答えたその理由について表2が表2である。このよう母親は積極性の手ざかりとして、①自主自立、②活動性、③友人関係、④興味、⑤同胞数を考えられていることと明らなされた。自主自立、活動性、友人関係については、外部的積極性の手ざかりと考えるが、興味は、内部的積極性の手ざかりと考える。しかし、同胞数という理由には、他の理由に比して、その次を占めるように考えられる。

なお、同胞数以外の手ざかりは、積極性の向上を方向と示しているものである。以上のことから、大部分の母親は外部から容易に観察可能なものとこの行動特性と積極性の判断手ざかりとして使用していることが明らかである。(2) 子どもの積極性について、11-4以上17-4の積極性群、11-4以下17-4の消極性群とした(11.49、3.022)。この両群について、質問項目についてみる。①活動性では $\chi^2=5.83$ 、5%で有意差が認められた。これは先に述べたように、積極性群とは外部的積極性大なるものであるから当然の結果といえる。②創造性について両群の場合両群の間に有意差は認められなかった。この場合まず内面的に表現されるものは、母親の持っている創造性のイメージである。その内容について記述を求めたため、判断の基準およびその内容の創造性の特徴の成り立っていることと手ざかりと考える。このよう母親とした質問のしかたでは、とらえ難いことと明らかとなった。その解決策として、現実の生活場面にこれらの特徴を置き、あるいは実験的にこれらの特徴を提示することと考える。③他者や自分について、両群の間に有意差は認められなかった。これらの結果は結局、母親が外部的行動特性としようとしているために原因していると思われる。④親の積極性といわれる関係が手ざかりと表2である。

	積極性群		消極性群	
	幼少時現在	幼少時現在	幼少時現在	幼少時現在
父母共に積極的	4	9	4	2
父積極・母消極	4	2	4	4
父消極・母積極	3	2	0	2
父母共に消極的	4	1	3	1

表3より子どもは積極性に多大の影響を与え、この積極性の子は両親の態度は、子どもとの限定された行動にのみ意味がある。この結果は、子どもと手ざかりする両親の態度は、子どもとの限定された行動にのみ意味がある。この結果は、子どもと手ざかりする両親の態度は、子どもとの限定された行動にのみ意味がある。この結果は、子どもと手ざかりする両親の態度は、子どもとの限定された行動にのみ意味がある。

今後さらに、積極性の概念を明確にするとともに、その相対性について分析しようと思ふのである。

(連絡先) 東京都板橋区加賀1-18-1 東京家政大学内

保育問題に関する調査報告(1)

山下俊郎 堀内康人 金平文二

島田俊彦 大場幸夫

(東京家政大学)

目的: 保育に関する諸問題を一般の人々はどのように受けとめているかを把握するための調査を試みる

調査方法: 個別面接聴取による質問紙法

調査対象: 次の特性をもった5群

A群 18才以上の未婚者 630名

B群 子どものいない夫婦 788名

C群 0～5才頃までの子どものいる夫婦 732名

D群 小学生以上の生徒だけのいる夫婦 912名

E群 共稼ぎしている夫婦(上群補充)

以上 計3066名(男・1530 女・1536)

調査期間: 昭和42年7月1日～8月31日

調査者: 本学児童学科、保育科学生計331名

調査項目: 生活および保育に関する計33項目

調査結果: 母親が職業と育児を両立することの可否について 両立しがたいと考える傾向が特に女性より男性に著しい。(表1)

一般には 家庭保育の必要性を支持する意見は少なく 大多数の人々は学令前の集団保育の必要性を感じている。(表2)(表4)

しかし集団保育の必要性を認める傾向を別の角度からみれば 子どもの年令としては 特に「女児のうち」が最も適当な時期としている。(表3) また0～1才児をもつ父親の意見のように「家庭での保育よりはましであるから」という考え方が 集団保育の意義を支持する主な傾向となっている。

ことに2才以下の子どもの集団保育の必要性を認める意見はきわめて少ないことが明らかになった。

一方 母親の就労と育児の両立を可能にする方法について質問した結果 一般に明確な反応は得られなかった。大半が無答に集まった。(表5)

また家族形態別にみても「子どもを家族がみてくれる」ということは 祖父母の同居する家庭ではその26.6%、夫婦と子どもだけの家庭では8.7%という結果を得た。

考察: 家庭保育が必要であると認められるような意見が かなり限定的傾向を得られなかった。この点という問題に関して なお資料の分析と今後の検討の余地を残している重要な課題があるといえよう。

また2才以下の子どもの集団保育の必要性を認める意見

表1. 母親が育児と職業を両立させることの可否

	農林漁業		商工鉱業		サービス		一般事務		専門技術		管理		無職	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
両立しがたい	67.6	55.5	57.6	46.2	60.0	38.8	59.7	54.3	66.1	31.0	71.3	35.7		67.0
両立しがたい	28.3	44.4	34.0	50.8	37.8	61.1	36.9	45.2	31.2	66.1	22.1	57.1		21.2
その他	2.1	0.1	6.4	3.0	2.2	0.1	3.4	0.5	2.7	2.9	6.6	7.2		11.8
計(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		100

表2 家庭保育のみでよいか

	よい	よくない	どちらでも	わからない	その他	計(%)
男子	1.0	52.3	5.3	2.5	38.9	100
女子	1.0	56.0	3.0	2.3	37.5	100

表3 集団保育は何才頃から

	0才頃	1才	2才	3才	4才	5才	小学校	その他	計(%)
男子	0.7	0.5	1.5	20.1	42.0	30.2	4.2	0.8	100
女子	0.3	0.2	1.9	13.9	25.4	14.7	0.4	43.2	100

表4 集団保育の賛否

	賛成	不賛成	どちらでも	わからない	その他	無答	計(%)
男子	78.9	2.9	11.8	5.4	0.9	0.2	100
女子	87.8	0.8	6.5	4.1	0.5	0.3	100

表5

	農林漁業		商工鉱業		サービス		一般事務		専門技術		管理		無職	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
施設利用	17.4	25.0	19.8	24.2	19.6	33.3	15.9	19.4	15.2	28.2	10.1	87.5		6.1
家族委託	8.7	11.0	5.4	12.1	4.3	2.8	9.8	10.4	6.6	14.1	5.8	12.5		2.2
他人委託	0	0	1.7	4.5	6.5	5.6	2.4	5.5	3.6	6.2	3.6	6.2		1.4
その他	72.9	63.9	72.0	59.1	67.6	58.3	71.8	64.7	74.6	65.1	80.4	63.8		89.4
計%	100	99.9	99.9	99.9	100	100	99.9	100	100	100	99.9	100		100.1

見は極少でありながら 実際にはその頃から「どこかに、あずかっもらうわけはなうない状況を感じとれる。集団保育、家庭保育の問題が 親の切実な懸念であり なるにより子どもの基本的な権利にかかわる問題であることはいうまでもない。保育に関する理念が一般には まだ十分普及されていないと思われる。このことは角度を変えてみれば 福祉、教育、行政の領域にわたる保育問題の複雑さを示しているといえよう。

(本研究は 昭和42年度総理府委託研究の一部である。他に植山つる、跡見一子、一ノ瀬和子、中池万理子、宮崎照子(いずれも本学教官)が参加している)

キーパンクサー意識調査の結果について

金 平 文 二
(東京家政大学 児童学科)

菅 原 馨
(人事院)

目的: 電子計算機におけるキー・パンク作業に従事する職員について、パンク作業の実態および職場環境のありかたに対する職員の意見、態度等を調査し、職場の問題点を明らかにするとともに、能率的な職場運営と行うのに必要の要因を明らかにすることによって管理改善の手がかりをうけることにある。

方法: 8 機関に所属する調査対象職員全道(女28名)に対して質問紙法による職場意見調査質問表を配布して各質問項目に記入を求めた。回答の方法は、原則として各作業室単位に調査対象職員を集め、質問表回答用紙の記入要領等の説明のあと、その場で記入を行わせた。記入終了後直ちに回収を行った。

調査項目

職業意識 (職種の認識、仕事に対する自覚、満足度、所属意識)

業務管理 (上司の指導・指導、コミュニケーションおよび職場運営上の諸問題についての意見、態度)

職場の人間関係 (上司・同僚間の人間関係についての意見、態度)

勤務条件 (作業環境、健康管理、給与、任用等の勤務条件についての意見、態度)

余暇活動 (運動事情、レクリエーション活動、余暇活動に関する意見、態度)

疲労自覚 (疲労の程度、休養、業績等についての意見、態度)

調査結果の分類集計方法: 調査結果の集計は電子計算機により、単独集計とクロス集計を行った。

単独集計

1. 職別別、作業室別
2. 年齢階層別
3. 配偶、未婚別
4. 学歴別
5. 健康別
6. 住宅事情別
7. 経験年数別
8. モラル得票別
9. 自由意見

クロス集計

現在の学説上一般にに関連があると認められている質問項目をあらかじめ選定してクロス集計を行った。

結果の考察: キー・パンクサーの疲労、自覚症状に影響を及ぼす各要素の検証。

キーパンクサーの疲労対策については、医学的、生

理学的な調査研究が行われ、疲労の現状や対策が明らかにされているのであるが、このような疲労やその自覚の原因は必ずしも医学的、生理学的なものだけでなく、キー・パンクサーの意識、態度、士気などと複合した社会学的・心理学的要因も多分に影響しているものと述べられる。このような事情から本調査を実施し、比較し判断するための資料が乏しく、調査結果を評価することばかりで困難であった。

しかしながら、キー・パンクサーの疲労対策がこの調査の基本的目的であることとからみて、疲労の多少を評価の基準とし、疲労に影響を及ぼしている各要素の要因を探索し、これらの原因を除去し、あるいは軽減することによって、疲労が減少し、すなわちキー・パンクサーの一般的モラルが向上するのでないかという前提のもとに調査結果の分類集計を行った。

質問項目	疲労の程度	自覚症状との相関	
6. 道徳的自覚	○	○	① 道徳的自覚
55. 昇進、配属使用に対する希望	△		
4. 新雇時の訓練			② 新雇時の研修
技術訓練	△		
その他の訓練		○	
36. 作業室間の人間関係	○		③ 人間関係
37. パンクサー以外の人間関係	○	◎	
31. 仕事の重要性の理解	○	△	④ 仕事の理解
33. 不平、苦情の取扱	○		
34. 日常の指導、訓練	○		
29. コミュニケーション	○	△	⑤ コミュニケーション
41. 意見の発表	○	△	
43. 経営企画の理解の仕方	◎	△	
46. 従事仕事の比較、知識技能の要否、つらさ	○	△	⑥ 仕事の評価
47. 打ち込みの度合	○	△	
48. いかに仕事を		◎	
50. 組織の一員としての感じ	○		⑦ 職場環境
44. 通風設備	○		
47. 暗視	○	○	⑧ モラル
28. モラル得票	◎	○	

◎ 明らかに強い相関がある ○ や △ の相関がある △ ある程度相関がある

電算機女子オペレーターに対する意見調査

馬場 昌雄
(星美学園短期大学)

電子計算機 (Electronic Data Processing System) の企業への導入によって、経営の革命が行われつつあることは、世界的風潮であるといえる。わが国におけるEDPSの採用は特に目ざましく、現在の稼働機台数はアメリカに次いで第2位となっている。

このような傾向につれて、特に入力データの作成にあたるキー・パンチヤー (K.P.) が、新しい女子の職務として望まれ脚光をあびた。しかし、関係者の認識の不足などから、この職務にはけんしょうえん、ノイローゼなどの職業病が起りやすいという現象が生じ、女子社員たちにはたずうに不安を恒えつてしまうことになった。

新しい職務にあられるこのような多くの問題は、ほとんどが無知から来る誤解にあるものといえる。恐らく、関係者たちの研究不足が原因となっているのであろう。新しい職務が生まれる場合には、職務分析、実態の正確な把握が必要であるといえよう。

目的：さて、この1～2年来、更に女子の職務として電算機オペレーターが生まれつつある。この仕事はこれまで主として男子社員によって行なわれて、その奥では、K.P.のようにまったく新しいものとはいえない。しかし、一般に電算機管理の問題としては、これまで、ハード・ウェアが中心として取り扱われて、電算機要員の実態はあまり明らかにされていまいようである。

そこで、本研究では、まだ数ばかりだが、現在オペレーターとして活動している女子社員の職務に対する意識、企業側の体制などと調査することにした。

方法：女子電算機オペレーターに対するパネル調査、およびアンケート調査を中心とし、彼女らの上司からの意見をも同様によって聞いた。

結果：50名のパネルから得られた結果の主なものを述べる。 (1) 職務について、では、仕事に対する誇りを感じているものは全体の65%、特に感じていないとするもの35%であった。「女子社員の他の仕事と比べて働きがいがあると思うか」に対する回答は、

働きがいがある	67%
〃 ない	0
どちらともいえない	34

であった。

また、オペレーターの職務と職業病については次のような回答がえられた。

職業病にかかるのを大いに気にしている	20%
あまり気にしていない	78

以下、作業環境、人間関係などに関する質問の回答は、つぎのようになっている。

「現在の作業環境に満足しているか」

・ 一応満足している	14%
・ 相当不満である	46
・ 普通だと思ふ	40

「あなたの会社ではオペレーターとして特別の配慮 (給食・休養・作業時間など) がはうわれているか」

・ はうわれている	28%
・ 〃 いない	70

「電算機関係の男子社員との関係はうまくいっているか」

・ うまく協力してやっている	58%
・ あまりよくない	12'
・ どちらともいえない	20

「オペレーターとして十分な教育訓練を受けていると思うか」

・ 十分に受けている	6%
・ まだ十分ではない	94

考察：時間的制約などにより十分な賛同は分りえなかったが、一般女子社員に対する他の調査などとの比較によると、女子オペレーターはかなり仕事に対して好意的な態度を持っていること、他方、企業側の体制は、まだ十分にできていないことなどがいえると思う。

電算機の発展に伴い、ますます女子の職務が広くなっていくことも考えられ、今後さらに要員の管理面に対する研究がなされる必要があると思う。

(連絡先) 東京都練馬区東大泉1228 (〒No. 177)

歯磨清涼感の一対比較判断における時間順位誤差

○ 梅沢 伸 嘉
(サンスター歯磨株式会社)

浅井 正 昭
(日本大学文学部)

〔目的〕 同一2刺激を連続的に提示し、2者の強弱の判断を求めると、判断の誤差が規則的に生ずることが知られている。この現象を時間順位誤差と呼ぶ。場合、この現象が歯磨中のメントールの清涼感判断において①試行時間および②濃度によって、どのように影響を受けるかを知らねばならないことを目的とする。

〔実験Ⅰ〕—試行時間の要因—

1. 試料として、純メントール量40%配合のかかり清涼感のある市販歯磨約1gを用いた。2. 同一試料2本を歯磨チューブに入れ、それぞれ別の記号をつけ下記の組合せによって一対比較させた。3. 被験者は当社歯磨パネル男女各5名、1名5回試行(計50回) 4. 判断は三件法によった。すなわち「前の方が清涼感が強い」「差なし」「後の方が強い」の3つのカテゴリーに分類させた。

5. 結果、各試行時間ごとに、3判断カテゴリーについて出現率を算出した。(Fig. 1)

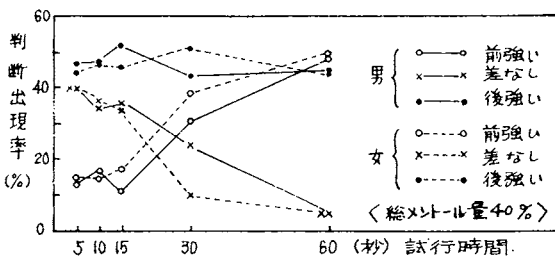


Fig. 1 試行時間の関数としての時間順位誤差

①. 連続的に比較判断された2刺激の試行時間は時間順位誤差(以下T.O.Eと略す)に影響を与える。②. 試行時間60秒の範囲では、負のT.O.Eが恒常的に見られた(後続刺激の過大評価)。③. 試行時間がますますつれて、正のT.O.Eが増加した(先行刺激の過大評価)。④. 「差なし」判断は試行時間がますますつれて減少した。すなわち、試行時間が長くなると正答判断が減少することを意味している。⑤. 性差はなかった。

〔実験Ⅱ〕—濃度の要因—

1. 試料として、歯磨ベースに0.1%のサッカリンを付加し、それに日本テルペン製メントールFを10, 20, 30, 40, 50, 70%付与した。歯磨ベース中の付与量はいずれも1.0%である。2. 提示方法は実験Ⅰに準じた。3. 被験者は実験Ⅰと同じで、1人3回試行(計30回)。4. 試行時間は30秒に一定とした。

5. 結果、各濃度ごとに、男女計30回判断の平均値を、3判断カテゴリーについて出現率を算出した。

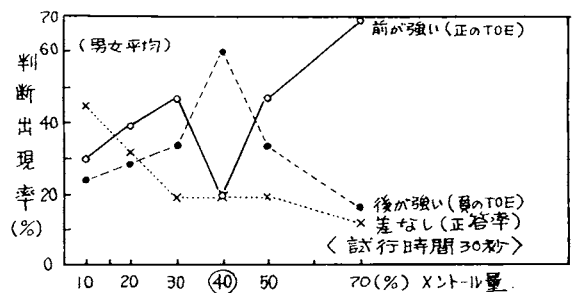


Fig. 2 濃度の関数としての時間順位誤差

①. 連続的に比較判断された2刺激の濃度は、T.O.Eに影響を与える。②. メントール量(濃度)の増加につれて、正のT.O.Eが増加した。(メントール40%例外) ③. 負のT.O.Eは約20~30%でほぼ恒常的に生じた(メントール40%例外)。④. 正答判断はメントール量の増加につれて、少しずつ減少した。

〔考察〕 歯磨中のメントールによる清涼感の比較判断において、試行時間および刺激濃度は時間順位誤差の生起に顕著な影響を与えることを確認した。試行時間の効果については、かなり明白な結果が得られた。すなわち、①負のT.O.Eは恒常的に約50%の出現率を示し、②正のT.O.Eは時間の増加とともに増加する。結果①については、従来の説明原理の一つである順応水準の概念で説明がつくと考えられるが、結果②については、口中の感覚麻痺による正答判断の減少の結果として説明した。濃度の効果については規則性を論じにくい、正答判断の減少は試行時間の場合と同様の傾向を示した。

〔連絡先〕 大阪府高槻市朝日町3-1

某食品製造会社における部門別適性に関する研究

大沢 武志
(日本リクルートセンター)

目的：製造会社における主要部門と考えられる製造、販売、研究、一般管理（事務）の四つの各部門の職員に要求される能力的・性格的特性の分析を行うことを目的とする。

方法：(1)被験者・某大手食品製造会社の社員268名。
(2)方法・以下に示す心理学的検査を実施し、かつ社員としての適性の評価基準にもとづいて基準変量としての評価資料を収集し、検査結果と評価結果との関係进行分析する。

・施行検査：以下の検査はいずれも日本リクルートセンターによって開発されたものである。

・一般知的能力検査AⅤ型（言語的・非言語的理解力および推理力を測定する。）

・性格診断検査RPI型（情緒的・社会的な適応に影響する人格の主要な側面を測定する検査で、応答態度尺度・異常性尺度・一般特性尺度の3尺度より構成される。）

・性格類型検査TI型（4つの心的機能を測定することにより、人格を典型的にとらえる。）

・基準変量：1. 人事評価：業績・職務態度・成長性の評価（各5段階）、2. 意見調査：職務に対する満足度および適性度の自己評価（各7段階）

・分析方法：1. 各部門毎に検査の各下位検査と2つの基準変量との相関係数の算出。2. 各部門毎に検査と2つの基準変量との重相関の算出。

結果：1. 部門別・各下位検査と基準との相関

表1. 各下位検査と基準との相関係数

テスト		A		U		R										P										I										T				I		CR
		V	NV	D+	D-	X	Y	Ne	De	Ew	In	On	Hu	So	Re	Ac	EI	SN	TF	JP	人満																					
製造部門 N=100	又	24.4	12.0	4.8	6.4	2.0	3.5	8.8	8.2	6.7	4.8	10.1	6.4	17.0	12.0	14.3	-0.4	8.5	1.6	2.6	100.0																					
	相関満	0.183	0.228	-0.02	-0.20	-0.19	-0.21	-0.12	-0.18	-0.12	-0.09	0.070	-0.06	-0.16	0.128	0.174	0.159	-0.14	0.170	0.268																						
販売部門 N=93	又	27.3	15.2	4.8	5.9	1.7	6.5	2.7	7.0	5.5	4.3	10.7	7.8	10.2	10.4	15.3	5.3	6.3	3.2	-0.1	94.8																					
	相関満	0.224	0.265	-0.27	-0.03	-0.02	-0.03	-0.10	-0.02	-0.09	-0.08	0.009	-0.13	0.007	-0.08	0.167	0.039	0.031	-0.09	0.035																						
研究部門 N=26	又	35.3	21.0	5.0	4.2	1.4	7.5	4.3	4.5	4.4	4.1	12.5	5.5	13.0	13.9	15.3	0.2	2.5	3.9	2.0	100.0																					
	相関満	0.092	0.157	-0.25	-0.28	0.07	-0.15	-0.16	-0.23	-0.05	-0.17	0.269	0.093	-0.26	-0.27	-0.049	0.354	-0.28	0.192	0.128																						
一般管理部門 N=29	又	32.2	17.4	4.7	5.3	1.5	4.7	6.7	5.8	4.9	4.7	11.7	7.2	10.4	11.5	15.1	4.0	5.7	3.4	2.5	97.7																					
	相関満	0.136	0.193	0.010	-0.35	-0.19	0.047	-0.27	-0.23	-0.34	-0.26	0.183	0.040	-0.36	-0.127	0.237	0.237	-0.185	0.147	0.082																						
	相関満	0.115	0.222	0.037	-0.19	-0.167	0.049	-0.125	-0.081	-0.084	-0.004	-0.07	0.075	-0.03	0.232	0.048	0.077	-0.118	0.133	0.283																						

人…人事評価

満…満足度

*…5%水準で有意

**…1%水準で有意

2. 部門別・検査と基準との重相関係数

表2
検査と基準との
重相関係数

	人事評価	満足度
製造部門	.442	.381
販売部門	.492	.509
研究部門	.880	.838
一般管理部門	.561	.510

考察：製造部門・人事評価の高いものは、判断的傾向（着実性・計画性に関連する性格傾向）を示す傾向がみられ、知的能力も高いという傾向が若干みられる。また外向的傾向をもつもののほうが、満足度の高い傾向がうかがえる。

販売部門・社会的に外向性を示す者のほうが職務に対して満足しやすいといえるが、職務上の成績と評価とは無関係といえる。感覚的知覚傾向の者のほうが、満足度が高い。また、知的能力にすぐれた者のほうが、職務上の成績はよいが、不満をいだきやすい傾向がみられる。

研究部門・明らかに知的能力のすぐれた者のほうが職務上の成績はよくできているといえる。また、外向的な性格を示す者のほうがよくれた人事評価を受けているが、職務満足度は低い。直観的知覚傾向を示す者のほうがよくれた成績を示す傾向がみられるが、これは研究職に対する適性についての通常の考え方と一致している。

一般管理部門・職務上の成績の高い者は、情緒的に安定しており、社会的に外向的で活動性も高いといえる。また、職務満足度の高い者のほうが、外界に対して判断的な態度をもち、着実に計画的な傾向を示し、知的能力も高い傾向がうかがえる。

連絡先：日本リクルートセンター TEL (03292) 5811

公害が作業性格に与える影響

(作業性格検査 37)

板倉 善高
(適性研究所)

目的: ^{a.}亜硫酸ガスなどの有毒ガスとか ^{b.}騒音 が人間に与える 心理的影響を調査する。

方法: N式 (連続加算) の作業性格検査による

対象: 京浜地区の某中学二年生 463名 (a)

京葉地区の某高校二年生 305名 (b)

環境: a. 大気の SO_2 による汚染度
高濃度発生回数

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
343	224	197	105	93	168	158	106	95	48	133	298	

内訳
ppm
0.1) 226 163 147 89 84 152 157 82 92 35 111 217
0.19
0.2) 93 47 34 15 6 16 1 23 2 9 21 61
0.25
0.3) 17 9 8 1 3 1 1 4 1 13
0.39
0.4) 4 3 6 調査時 2
0.49
0.5) 9 2 2 5
以上

b. 騒音 … 約5分間隔 に電車の交通により 75～85 フォンの騒音 をうける

結果: a.
作業曲線の出現率% (括弧内は 中学3年生全国 20000 名の平均)

曲線型 N(正常) U(上昇) D(下降) O(突出) I(陥没) S(平坦)

休前	30.0	8.4	8.4	7.8	31.2	14.2
	(25.72)	(18.62)	(5.33)	(13.73)	(12.50)	(24.10)

休後	13.4	3.7	15.4	22.0	25.7	19.8
	(11.30)	(12.89)	(6.58)	(26.83)	(7.47)	(34.93)

全国平均より

多い曲線型

休前 … I . D . N .

休後 … I . D . N .

少ない曲線型

休前 … U . S . O .

休後 … U . S . O .

結果: b.
作業曲線の出現率% (括弧内は 高校3年生 全国 20000 名の平均)

曲線型 N(正常) U(上昇) D(下降) O(突出) I(陥没) S(平坦)

休前	32.2	13.8	4.6	10.8	25.8	12.8
	(25.36)	(21.00)	(5.40)	(12.92)	(14.76)	(20.56)

休後	16.1	7.5	19.3	24.6	10.5	22.0
	(12.57)	(13.80)	(10.03)	(23.73)	(6.53)	(33.34)

全国平均より

多い曲線型

休前 … I . N .

休後 … D . I . N . O .

少ない曲線型

休前 … U . S . O . D .

休後 … U . S .

結果の考察

SO_2 の生体へ及ぼす影響 { 呼吸器
視力 } の
疲労傾向

騒音 の性格へ及ぼす影響 …… 転移性

関連調査: 防音窓の効果

(連絡先 … 松戸市松戸 1267)

現代学生層における意識構造についての研究

芥田 大公望
(立教大学 社会学部 産業関係研究所)

目的; 外資問題がクローズ・アップされる折から、将来企業の幹部要員たるべき学生層が、外資系会社側の立場を基準にしながう、どのような意識構造にあるかを分析した。

対象; 北海道大学より鹿児島大学にいたる国公立大学 1,509 と対象とした。これは意見調査でなく、特性向の関連を目的としたので無作為標本でなくともよかった。

期間; 1967(昭42)4~6月。

方法: 度同紙による郵送法。次に示す(1)共感性テスト Empathy Test 5問、(2)Error Choice Test 4問につき、その所の「外資系会社からみて好ましい反応」と①として=選択パターンにより潜在構造分析を試み、「特性のあるものの含まれる割合」により外資系会社に対する接近度合と層別した。

分析; Test の前者は、適性・規律性・情緒性・国際性・民主性に関する項目によって「価値判断」の側面に対応し、後者は、エネルギー・モータリゼーション・ヒーティング・駐日外人数などの項目によって「現状認識」の側面に対応させた。

(1) 価値判断に関する共感性テスト

どちらか、あなたがそうだと思う方に○をつけてください。

Q1. 自分の学校(会社)の校風(雰囲気)として、次のどちらをより多く望みますか。

①. 経済的利便 ②. 自分に適したところ

Q2. 次の2つは先生がもっといなければならぬ性質ですが、どちらが一層大切ですか。

①. 規律のきびしい先生 ②. 親切でやさしい先生

Q3. 次の2人のうち、どちらをより多く尊敬しますか。

①. 詩人 ②. 物理学者

Q4. 外国旅行をするに際し、外国の航空会社と日本の航空会社を使う人の割合は6対4、または4対6といわれますが、あなたはどちらがよいと思えますか。

①. 外国会社が6 ②. 日本の会社が6

Q5. 優秀なリーダー(監督者)とは、その人の能力によるというよりは試験の弊害によるばかりが多いと考えている人が何%ぐらいいると思えますか。

①. 10~20% ②. 50~70%

共感性テストに付いては前立大教授豊泉恒男氏による。

Ⅱ. 潜在構造行列 (④反応確率)

潜在的 クラス	クラスの割合 π_i	要 因 項 目				
		1	2	3	4	5
I	.9206	.9294	.3991	.5825	.2732	.3010
II	.0794	.8165	.6155	.9010	0	.0078

(2) 現状認識に関する Error Choice Test

どちらか、正しいと思われる方に○をつけて下さい
Q1. いま、日本のエネルギー源のうち、石油はどの位の割合だと思えますか。

①. 68% ②. 41%

Q2. いま、日本の自動車の総台数はいくらくだと思えますか。

①. 850万台 ②. 1240万台

Q3. いま、石油ストーブの世帯普及率は全国で何%位だと思えますか。

①. 37% ②. 63%

Q4. いま、日本には駐留米軍と除いて、どの位欧米人がいると思えますか。

①. 9万3千人 ②. 6万7千人

Error Choice Test は Hammond や Bernberg による。正答数値とはさんだ両方向の数値と示し、心理的歪みと変動させる方法。

Ⅲ. 潜在構造行列 (④反応確率)

潜在的 クラス	クラスの割合 π_i	要 因 項 目			
		1	2	3	4
I	.7944	.5469	.6675	.5111	.5431
II	.2056	.2881	.3311	.1809	.2866

結果; 有特性潜在的クラス(I)の割合90%以上と「近ソ層」、50%以上「中間層」、10%以上「やや遠ソ層」と規定した。(注、ともに30%以下なし)

価値 現況	近ソ層	中間層	やや遠ソ層	計
近ソ層	301	605	67	973
中間層	173 180	288 309	45 47	506 536
やや遠ソ層	7	21	2	30
計	481	914	114	1509

(23表) $\chi^2 = 3.5479 < 5.9915 = \chi^2_{(0.05)}$

つまり、現代学生層に於いては 価値判断と現状認識両側面は互いに別々の基準にあることが判明した。

(連絡先) 東京都新宿区塩場町5, セントラル・コーポラス 407, 電話(03) 268-1291

青年期における職業観の発達-質的変容(2)-

広井 南
(近畿大学)

目的:「職業観診断テスト」の各項目に対する賛成率を、中学生から大学生にかけて精査し、その変容の状況を明らかにし、あわせて性差を検討する。

方法: 対象 上記テストの被検者となった学生、生徒の中から表1の人員を抽出した。テストは1963年から1965年にかけて実施されたものである。精査の対象となった項目は該テスト120項目中の80項目である。

表1. 対象

	中1	中3	高2	大1	計
男	105	100	85	100	390
女	89	100	100	—	289
計	194	200	185	100	679

項目分析 80

項目ひとつひとつの賛成率の推移から、各項目の類型に分け、その内容から発達の特性をとらえた。これは日本教育心理学会第10回総会(1968)で発表した。

カテゴリー分析 このテストは4つの尺度を用いて測定するようにになっているので、それに従い、80項目を4つのカテゴリーに分け、カテゴリーごとに、賛成率の推移を検討した。今回はその結果の報告である。表2は、カテゴリー内容に含まれている項目数である。

表2. カテゴリー内容と項目数

No.	内 容	項目数
1.	収入・生活の安定の重視	17
2.	地位、名声、等の重視	18
3.	才能、個性、興味の重視	19
4.	社会的貢献、定着性の重視	26

結果: (1)

表3は平均賛成率と、推移型の分布である。上昇、下降、ともその差が5%レベル以下で有意であるものに限った。(2)各カテゴリー内、項目の内容と変動状況との関係を検討した結果、次の諸点と指摘することができる。できた。

表3 平均賛成率と変動型 上段男、下段女

No.	中1	中3	高2	大1	→	↗	↘
1	54.5	55.6	57.4	56.7	6	8	3
	46.3	55.4	55.8	—	6	9	2
2	52.4	52.8	42.1	42.7	7	0	11
	44.2	51.6	40.3	—	7	3	8
3	62.2	66.9	68.4	68.1	10	8	1
	57.0	68.2	70.2	—	8	11	0
4	68.9	60.1	53.5	50.8	9	1	16
	65.7	66.3	52.9	—	8	2	16

1 カテゴリー 生活の安定を第1とする考え方が高率で、ほとんど変化なく維持されている。地位、出世、社会的貢献よりも収入を重視する考え方に年々ともに賛成者が増える。(ロ)第2カテゴリー 全体的に見

て賛成率は低下するか、特に女子の後半に著しい。他の面を捨てて地位、名声を重視する考え方に対する賛成は激減する。この傾向は男子のほうが強い。(ハ)第3カテゴリー 全般的に賛成率は急速に高まるが、収入と対立する考え方に賛成するものはそれほど増えない。また職業の社会的貢献性や定着性と対立する項目に対する賛成率も傾向がゆるやかである。(ニ)第4カテゴリー 全体として賛成率は急速に下がる。しかし、精神修養的内容を持つ項目、定着性を強調する項目に対する賛成率の低下はゆるやかであるものが多い。特に女子にその傾向が強い。(3)項目の中にはカテゴリーの対立と内容とするものが多い。その賛成率の対比を見たいのが表4である。男女とも中学1年から高校2年までの推移を変動型だけで示した。0と

表4 対立項目の推移状況

カテゴリー	1	2	3	4
1		↗	↘	↗
2	↘		↘	↗
3	↗	↗		↗
4	↗	↘	↘	

上段男子、下段女子

あるのは平均して60%から40%の範囲にあるもの。+は60%以上、-は40%以下である。
考察: (1)第1カテゴリー賛成漸増、第3カテゴリー急増、第2カテゴリー減少、第4カテゴリー急減という一般的傾向は従来の結果と変わらない。女子中学1年の第2カテゴリーの平均賛成率が低いのが目につくが、飛らくこのグループには社会的開眼の進んでいるものがあったのではなかろうか、第4カテゴリーでも似たことがいえる。(2)カテゴリー間の力関係を考えると、中学1年では第2カテゴリーが比較的強く、他のカテゴリーとさきこうするが、年々ともに弱まって行くように見える。ただし項目数(対立内容)が少ないので一般的にはいえない。(3)平均賛成率は女子のほうが全体的に低いが、個々について検討してみると、観念的でなく、具体的な問題と考える時には、極めて強い自己主張を示す項目に、男子よりも多くの賛成者がある。また自己中心的な考え方が定着性と関係した項目で強く出されている時、それに賛成するものが多い。この傾向は年々進んで強くなっている。

実験的作業性格検査法による

パーソナリティと職業適性の診断

木 幅 墨

(北海道池田高等学校)

目的：職業適性の適切な予知の科学的方法は、今日の進路指導界及び産業事業所の配置指導面などにおいて重要視されているが、本研究においては「人格と職業の適合調和」について科学法を独自の検査方式の立場から研究するものである。

現在、我國の職業適性検査法として、広く一般化しているGATBについて検討すると、これは産業職群の適性範囲を判定するに際して、現代産業の技術革新による労働の多様化と新職種層の現出する傾向からは、広範囲な職種層についての適性なる適性の予知に難否を示す。更にGATBの能力測定は、10性能の適性因子の検出による20種の職務分析を基本としているが、これには性格面からの適性診断が欠如している。即ち、産業事業所の作業能力として、生産能力の高低、作業意欲、耐久性、安全度などに関しては、作業性格としての情意素質が大きな影響を及ぼすものであるとき、職業適性の合理的診断には、産業職群への必要的情意素質の分析診断を考慮されなければならぬ。ここに職業適性の診断には、情意素質の面から作業性能に着目し、独自の実験的検査装置を案出し作業性格(情意素質面の作業性能)の分析を可能ならしめ、GATBの適性分析を総合するところから、産業職群に対する「適・不適」を深層的に診断し、職業適性の討究範囲を有効適切に捉えようとするのである。

方法：実験的作業性格検査法の特長は、第1図の如き検査器具をもつてはすが、被検紙は直線へ斜線へ曲線図型による難易性をあて、右手操作により被検紙の作業指線線を描致に脱線しないよう作業を進めるが、与えられた作業指線は歪められた適応への精神的エルゴルである。作業の準備素質として、身体的、精神的（情意素質・興味）性能が行動を惹き起こすが、被検紙の心的内部は完全緊張の拘束性が要求される。分析方法は作業プロセスの観察記録、作業速度及び脱線量の計量的測定、作業図型の線量から個人差のある性格型が求められ、職業適応への心的事態が診断されるものである。又、職業的不適

たの心因にも重視し、職業的問題性格のものには、職業的適応への診断治療を加味するところに臨床法の発創を認められるのである。

次に本研究の検査は、どのような分析基準を設定しているか主要点を示すと下記の如くである。

(1)作業速度：本検査は急速作業であり、恒定性・振動性・振能切替を要するもので、精神振配の働き度合から、運動神経の因子、知覚性の因子が占拠される。

(2) 脱線度：作業は情老素質の振動的な均衡を要し、一定の作業条件の制約これに指標線の上に遊蕩していくが、第Ⅱ図の指標線にみられる脱線振状から、疲労、注意散漫、疲労、焦燥などが吟味され、情動的因子、意志的因子が分析される。

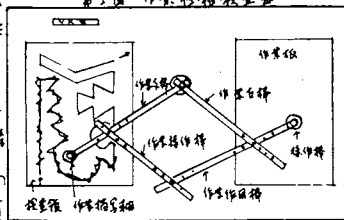
(3) 筋力度：初頭筋力へ終末筋力にいたる作業型型の線質（縮率・伸縮など）分析することによつて、筋肉（作業意志の強度）の個人差が診断される。この筋力度は作業性格を代表するものであつて、その性格の種類別にはギントの学級を引当する性格類分類上の強弱としては、伸縮型をもつて肯定するものではなく、作業性能面から慎重の動き、強弱・重さの速さなどの作業的傾向に至る性格をみるのである。

性腺型の型はC型—胆汁嚢、M型—黒胆汁嚢、S型—多胆嚢、P型—十二指腸嚢、 A_m 型—疑問不選の五分類される。

結果と考察：本研究は実験的段階にあるが、各為性の問題については、同性検査・フレッツペリン検査などとの関係を検討した段階にあるが、相関的有意性は高くないと思われるものであり、又、検査方式、各個別法であるところからは、作業態度の観察記録（18項目）を指標とし、検査の数値的測定値は標準化された評価段階に照応するとところから、一定の相関性のある科学的形式を整備した。尚、本検査による性格適性はGATBによる産業別必要性格表と照合を容易にする関係をもたせるもので、職業適性の判断は、多角の視点から職業適性群の適性範囲を効果的に発見し、職業的福利・職業的成功の動向が窺われるものである。



第五圖 検査紙



第3圖 作業性錯誤の種類

職業満足の因子分析的研究

——女子従業員を対象として——

武田正信

(関西学院大学 文学部)

○ 角 隆 司

(関西学院大学 文学部)

目的：個人の職業満足の根拠をばしていると考えられる基本的構造として、個人特性・監督・作業条件・給与・昇進と安定・経営方針・同僚関係・コミュニケーション・福利厚生の9種の次元が仮定される。本研究はこれら職業満足の諸次元を分析究明しようとするものである。

方法：(1)「職業満足度調査」の作成。仕事や職務を遂行する上で関連する意見や考え方の中で特に簡明かつ平易な記述を蒐集し、28項目にまとめて職業満足尺度とした。回答の仕方はLikert法に準じて「全く満足」から「全く不満足」までの5段階とし、それぞれに対して+2～-2の配点を付した。折半法によって求めたこの尺度の信頼性は、.893 (Spearman-Brown 公式で修正)であった。

(2)対象 1967年7月、短期大学において心理学を受講する女子182名に対して調査を実施したが、一般初上事務職に就いている73名を分析対象として抽出した。平均年齢20.5年、平均勤続年数2年3ヶ月、またその所属する企業規模については小企業22名、中企業21名、大企業30名であった。

結果：上述の手法から得られた資料から「職業満足尺度」の項目の28×28相関マトリックスを求めた。これにCentroid Methodを適用し、4因子を抽出したのであるが、これらの因子の意味をより明確にするために基準軸の直交回転を行った。その回転後の因子行列を表わしたのが次表である。(電算機FACOM 270使用)

〈因子の解釈〉

Ⅰ因子 自己の考え・意志の疎通や監督者に意見を表明するような項目に大きく負荷し、監督者との関係が重視されるので、「監督者に対する満足」の因子と命名する。

Ⅱ因子 .77～.48までの高い負荷量が給与に関する項目にあり、残る各項目も身分や地位の安定と昇進に関連するものである。ゆえに、これは明らかに「給与と昇進への満足」の因子といえるであろう。

Ⅲ因子 退職金の制度に関する項目に最も高い負荷量を持ち、次いでレクリエーションや休日、労働時間などの項目にも負荷しているところから「福利厚生へ

因子行列 (回転後)

Item No.	Factor loadings				h ²
	I	II	III	IV	
1	.24	.09	-.10	.33	.18
2	.47	.26	.09	.12	.31
3	.01	.09	.43	.39	.35
4	.01	.77	-.05	.08	.60
5	.16	.46	.18	.21	.31
6	.25	.29	.21	.22	.24
7	.29	-.18	.25	.47	.40
8	.58	.18	.31	.04	.47
9	.22	.03	.59	.08	.40
10	.53	.14	.26	.04	.37
11	.53	.41	.20	.27	.56
12	.13	.20	.04	.51	.32
13	.02	.73	-.01	.31	.63
14	.20	.38	-.03	.02	.19
15	.32	.16	.04	.31	.23
16	.30	.00	-.11	.44	.30
17	.46	.17	.15	.14	.28
18	.09	.03	.23	.13	.08
19	.46	.11	.09	.01	.23
20	.54	.08	.15	-.01	.32
21	.19	-.03	.12	.41	.22
22	.18	.48	-.09	.22	.32
23	.25	.44	-.01	.32	.36
24	.20	.41	.24	.29	.35
25	.19	-.05	.10	.30	.14
26	.18	.22	.44	.19	.31
27	.32	.13	.22	.21	.21
28	.14	.70	.05	.18	.54

の満足」を表わす因子と判断される。

Ⅳ因子 職務を円滑に行なうための設備や作業環境などの物的環境に対する満足と同時に、同僚や人間関係などの人的環境に対する満足を表わす項目の二種のものを含んでいる。ゆえに、これら両側面を統合し、職務ないしは作業を円滑に行なうための環境の重要性の意味に於て、「作業環境への満足」の因子と命名する。

結論：「監督者に対する満足」「給与と昇進への満足」「福利厚生への満足」「作業環境への満足」の4因子が抽出された。同僚関係への満足の因子が作業条件と共に抽出され、独立した単一の因子として出てこなかった。また、個人特性・経営方針・コミュニケーションなどは顕著には出てこなかった。

(連絡先) 兵庫県西宮市上ヶ原
関西学院大学 文学部

学力向上要因診断検査の妥当性

松原 達哉
(東京教育大学・教育学部)

目的: 学力向上要因診断検査(The Factors Diagnosis Test of Achievement-Advancement 略称FAT)を作製したが、この検査の妥当性を検討すること。

方法: この種の検査の妥当性を客観的に検証することは、かなりむずかしい。しかし、他の研究を参考にし、つぎのような工夫をして妥当性をたしかめた。

(1)理論的分析 内外の諸文献特に、M. Kornrich; Underachievement, 1965, P. 1~670を参考に理論的分析をした。

(2)下位項目別分析 小5の368人を対象に学力上位5群と学力下位5群とに分け、本検査の各問題の通過率を算出し両群のt-検定を行なった。同様な方法で、中2の383人についても行なった。

(3)成就値とFAT得点 小6の134人を対象に、田中B式標準学力(算数)、FATを実施し、成就値とFATとの関係を調べた。

(4)学業不振児と優良児の比較 全国から9中学校1~3年1285人および5高校1~2年1159人の中から、担任教師によって、学業不振児と優良児を選抜してもらった。その基準は、知能が高い(55.65以上)のに知的5教科(国・社・数・理・英)の成績が悪く、平均44以下のものを学業不振児とし、知能が普通またはそれ以下(55.54以下)で、知的5教科の成績が良く、平均44以上のものを学業優良児とした。こうして選抜された不振群(U)中学24人、高校38人、計59人、優良群(A)中学29人、高校25人、計54人を対象に、本検査と比較検討した。

(5)内部相関 小5の119人と中2の101人を対象にピアソンの積率相関係数(r)を算出した。

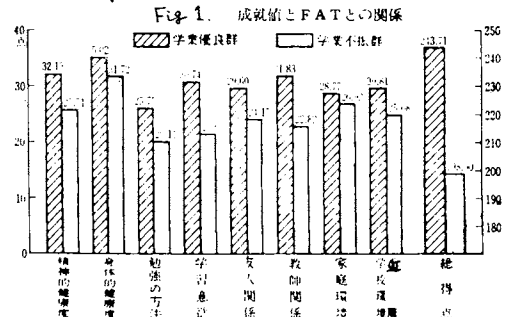
(6)検証尺度の妥当性 小5の100人、中2の100人、高2の100人を抽出し、相及す3内題項目にどのように回答しているかを調べた。

結果: (1)理論的分析 内外の諸文献数十論文を参考にし、学力向上に影響を与える要因を分析し、つぎの8領域をえた。①精神的健康度 ②身体的健康度 ③勉強の方法 ④学習意欲 ⑤友人関係 ⑥教師関係 ⑦家庭環境 ⑧近隣・学校環境

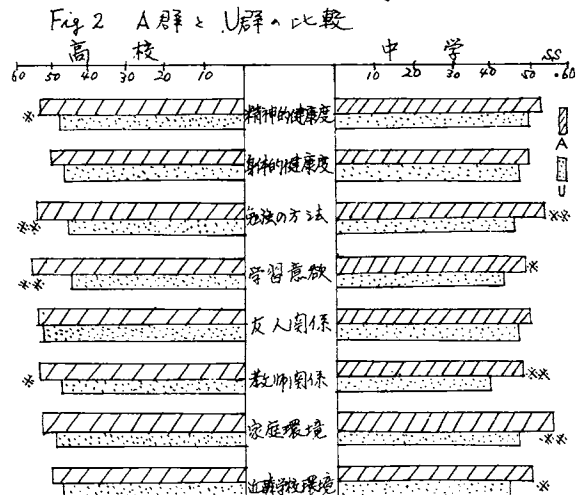
(2)下位項目別分布 t-検定によって、両群の有意差を決定求め、妥当性のある項目を多く含むようにして問題を選んだ。これらの項目分析の中で、特に有意水準1%で差のあった項目は、小学校53項目で

あり、中学校28項目であった。

(3)成就値とFAT得点 成就値の+10以上のA群10人と-10以下のU群32人のFATの各領域別の得点の平均は、Fig. 1のようである。



(4)学業不振児と優良児の比較 A群とU群について、FAT各領域別の偏差値の平均をFig. 2に示す。



(5)内部相関 Table 1に小中学校の内部相関を示す。

Table 1

下位領域	学校	M	P	H	S	F	T	D	E
P	小学校	0.37							
	中学校	0.37							
H	小学校	0.40	0.18						
	中学校	0.27	0.07						
S	小学校	0.40	0.24	0.65					
	中学校	0.36	0.16	0.67					
F	小学校	0.43	0.20	0.61	0.40				
	中学校	0.39	0.30	0.37	0.44				
T	小学校	0.44	0.21	0.48	0.46	0.43			
	中学校	0.41	0.26	0.45	0.45	0.50			
D	小学校	0.49	0.21	0.46	0.45	0.36	0.44		
	中学校	0.28	0.16	0.28	0.41	0.29	0.22		
E	小学校	0.46	0.10	0.27	0.28	0.48	0.36	0.49	
	中学校	0.40	0.22	0.25	0.37	0.48	0.45	0.46	
合計	小学校	0.46	0.47	0.63	0.63	0.64	0.67	0.60	
	中学校	0.46	0.58	0.65	0.69	0.62	0.64	0.63	

以上の結果、本検査の妥当性は高いといえる。

幼児性格行動診断検査の試み

藤原 元一
(九州工業大学)

(その3)

目的： 幼児性格行動診断検査は、幼児が示めす日常のいろいろの行動を通じて、その幼児の中に内在する問題行動を指摘し、更に親(又は保護者)の養育態度を問題行動から判断し、その結果、親の改善すべき方向を示唆するために作成しようとするものです。その標準化の過程を、今回は、小児1～2年(7, 8才)について調査した結果について報告せんとするものです。

方法： 北九州市及びその周辺より 地域性を考慮し、6校を選択し、小学校1～2年生の学級を無作為抽出した。次いで、幼児性格行動診断検査用紙を各家庭に配布、必要事項記入回答後に、これを回収した。

人数 7才児 男子73名 女子74名

8才児 男子78名 女子80名

検査得点頻度表 (上段7才児下段8才児:%)

検査項目	0	0.1~1.0	1.1~2.0	2.1~2.5	2.6~3.0	3.1~3.5	3.6~4.0	4.1~4.5	4.6~
けんさ1	20	37	25	7	3	1	3	2	2
	23	30	25	6	3	4	6	1	3
けんさ2	19	16	19	10	10	1	4	4	16
	22	13	18	8	10	3	5	9	12
けんさ3	15	16	25	8	14	5	2	6	11
	20	14	26	16	11	4	4	3	2
けんさ4	17	21	26	13	8	4	4	3	4
	21	19	22	14	10	1	6	3	5
けんさ5	13	12	17	9	11	4	7	8	20
	15	13	24	9	8	3	3	5	20
けんさ6	15	29	23	11	5	6	5	1	6
	17	28	30	6	8	3	4	1	2
けんさ7	17	16	25	10	10	4	8	1	9
	18	17	31	8	3	8	5	1	9
けんさ8	13	40	15	12	5	7	3	2	3
	15	35	26	10	4	4	1	1	2
けんさ9	28	38	17	6	3	3	0	3	2
	38	32	17	2	4	4	1	3	0
けんさ10	6	24	22	15	10	6	8	2	7
	10	26	19	12	10	8	4	5	6
けんさ11	4	31	40	10	6	5	1	0	3
	4	22	30	18	9	8	6	2	2
けんさ12	31	18	13	13	0	8	3	3	9
	30	23	12	15	0	12	1	4	4

結果： 1 男女の差について(検査毎得点)

男児群は、攻撃的、反抗期的、誇張的、自制力の得点において女児群のそれらに比較して高いことが知られた。さらに依存度においても、同様の傾向が認められた。女児群では、社会性がなく、神聖質な点が見られ、従つて、学校及び家庭の不満足、情緒不安などに、男児群に比較して高い傾向が見られた。

2. 年令別変化について(検査毎得点による)

3～6才児と7～8才児との比較について、

- 攻撃的な点では、変化が比較的認められない。
- 消極的な点では、7～8才児は、低い得点で人数が減少し、高い得点で増加するのが見られた。
- 家庭の不満足では、7～8才児は、減少するが、得点の高い所では、増加する傾向がある。(人数)

- 反抗期的な徴候は、7～8才児になると、得点は減少する。
- 依存的な点では、7～8才児になると減少するが、得点の高い所では人数が増す傾向がある。
- 誇張的な点では、7～8才児になると、得点は減少する。
- 社会性は、7～8才児になると、身につくのが得点で減少する。
- 情緒不安については、7～8才児は、得点は減少するが、得点の高い所で、稍増加(人数)する傾向がある。
- 退行的行動は、7～8才児になると減少する。
- 自制力の点では、比較的差は認められない。
- 神聖質な点では、7～8才児になつても差は認められない。
- 学校への不満足な点では、次第に減少することが認められる。

(連絡先) 北九州市戸畑区仙木町
3-30

感覚性誘発電位と反応時間の関係について

杉本 功介
(日本女子体育大学)

○岩崎 好子
(日本女子体育大学)

研究目的：脳の電気活動のうちには、自発性活動のほかに、明確な外来刺激に応じておこる電気活動がある。これを誘発電位(*evoked potential*)といい、自発活動から区別するのが普通である。

誘発電位は、通常低振幅の速い電位変化で知覚的刺激に直接関係して起る。誘発電位は脳の表面に直接電極をおいた場合に最も著明に証明できるが、ヒトの頭皮上からこれを導出記録することは困難なことであった。しかし1954年 Dawson が「重ね合わせ法」および「平均法」を発表して以来、この方面の研究がさかんに行なわれるようになった。

われわれは、単純反応時間について、覚醒時における脳波の低振幅速波のパターンとの関係を検討してきたが、ここでは脳波と同時に感覚刺激によって出現する誘発電位をとりあげ、与えられる刺激の種類とその強度によって、誘発電位がどのように影響されるか、それらが反応時間とどのような関係にあるかについて実験を試みた。

研究方法：誘発電位の波型は、与えられる刺激の強さ、刺激間隔、意識レベル、慣れの現象、自発脳波のパターンによって変化することが明らかにされている。本実験ではこれらに留意して次のような方法をとった。

記録・クリニカル脳波計、メテイアーフ401型を伴用。被験者・本学学生延20名。刺激呈示・電気刺激装置 ES-103 型。光・音刺激装置 DS-201 型を伴用。

刺激は、光および音刺激とし、刺激の種類、強さ、刺激呈示間隔を変化させた。音刺激とも50~100回の加算を行ない、その結果と250~500 msec の分析時間で観察、記録した。

脳波の誘導は、頭頂および後頭の双極誘導と、頭頂部、後頭部の単極誘導とした。被験者の体位は、脳波実験用のイ人に楽な姿勢でかけさせ、刺激呈示ランプとスピーカーを足元において、特に頸筋の緊張からくる筋電図の混入を防ぐように注意した。

実験結果：大脳皮質から導出される感覚性誘発電位は、多くの場合、初期の表面陽性波に続く20~30 msec の著明な陰性波からなる2~3相性の波で、このような単一刺激に基づく反応は通常1次反応と呼ばれている。そして、この後に約200 msec の長さにならなると、2次的な電位変動がみとめられる。

(1) 光刺激による誘発電位 光誘発電位は頭頂部よりも後頭部において最も著明に出現する。この結果は Monnier (1953) の報告とも一致している。

(2) 音刺激による誘発電位 音誘発電位は2~3相性の波型を示し、反応の長さは0.3秒位であると思われる。導出部位による差は、後頭部よりも頭頂部で最も著明である。

刺激の種類によって反応時間に遅延が生じることはよく知られていることである。本実験では、音刺激のサイクルと刺激呈示間隔を変化させ、誘発電位にどのような差位がみられるかを

問題とした。この際、潜時に注目してみると、覚醒時閉眼、音刺激2000サイクル、加算50回、注意の集中をさせたものが最も速く、次いで閉眼状態でのものが速い。

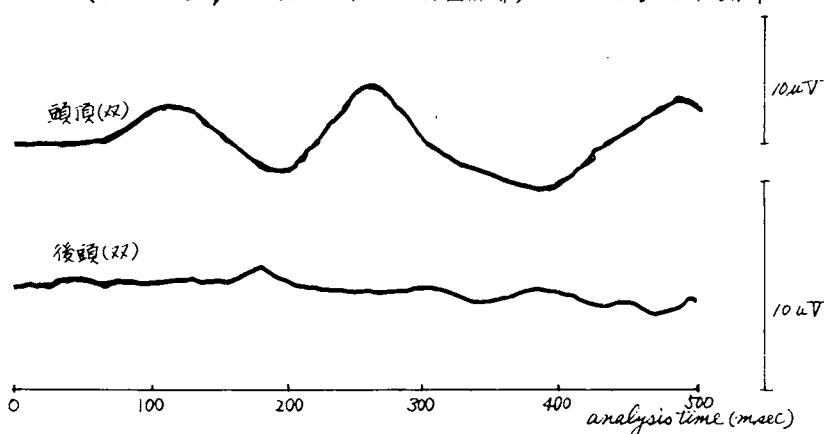
波型については、1次反応において波型、振幅に着しい変化はなく、2次反応において、閉眼時1000サイクルと2000サイクルの間に着しい変化がみとめられた。

連絡先：世田谷区烏山町
日本女子体育大学内

— 音刺激による誘発電位 —

(2000サイクル、1分40秒、50回加算)

Sub. MM 23才♀



二重抹消検査の研究 VII

○菊池哲彦 白幡悦子 北村晴朗

(茨城大学 人文学部)

(東北大学文学部)

1. Color-Form Cancellling Test の構成

10種の図形をランダムに横に120個配列し、それに再びランダムに5種の色彩をほどこす。この列を12行一組とし、上下2段に二組配置する。

2. テスト指示

指定された三種の図形を抹消せよ。ただし指定された二種の色彩の場合には抹消せずにおけ。上段と下段でこの指定を変える。被験者は各行30秒時間制限で作業し、終了時にカギカッコをつける。10行だけ作業。上・下段間3分間休憩。

3. 二重抹消作業の心理学的特質

抹消作業を色彩Cueで禁止することは、形態Cueの場合よりも一層直観的に情的であると思われる。上段の作業は注意の集中と分散が主として問題となるが、下段では内的規準の硬さ又は精神活動の流暢性が問題となる。また作業は30秒時間制限のため、かなり促進的であり、Vigilance Task に非均質的筋肉反応が含まれている。

4. 作業成績概観 (オ1表)

作業量は中学生群より大学生群が約20%増加している。中学生群内では上段作業量には着変はないが、下段—上段は年令と共に増加する。作業曲線は個人内変動が極めて著しく、平均曲線はほぼ平坦でSDが大である。精神病患者は作業量がすくない。

脱落率(抹消すべき図形を消し残した割合)は上段では年令と関係がないが、下段のそれは年令と共に減少する。一般に下段のそれが上段に比し小。但し精神病患者では一般に脱落率が大きく特に下段での増加顕著。

誤謬率(誤って抹消した図形数の割合)は正常人では一般に小さく、年令と共に減少するが、平均値の上では下段で増加する。精神病患者の平均は正常人の2~7倍に達する。行政処分対象者はその中間にある。

5. 他の検査成績との関連

1. 田中B式知能検査: 知能が低ければ全般に成績は低下するが高ければよいとは限らぬ。中位の方が問題易がすくない。(日臨心33回大会)

2. 内田・クレペリン精神作業検査: 疑問型を例外とすれば、定型、準定型……劣等型と進むにつれて成績は悪くなる。異常型も直線的関係は薄い。なおクレペリン各型におちる個人の二重抹消検査の成績はかな

り大きな分散をもち182名中11名が1%水準で棄却された。(日臨心33回大会)

ハ. MPI: 中学生1, 2, 3年計132名をN得点により3群(N_{12} 以下, $20 \sim 34$, 35 以上)にわけける。作業量下段の伸びは19以下でよい。脱落率は大差なし。誤謬は19以下では下段で殆ど消滅するが他群では逆に増加。同様E得点で分類すると作業量は各群で変化はないが下段での脱落・誤謬率は19以下で増加し、他群では脱落率減少、誤謬率不変であった。(オ2表)

ニ. YG検査: 大学1年次78名をYGによって5類型に分ける。作業量はB・D类で多く、C・E类で少ない。脱落・誤謬率もB・Dで多く、C・Eで少ない。

ホ. 速度見越検査: 行政処分対象者中ペーパーテスト成績1及び2のもの(料研研基準)48名を見越時間により3群(~ 999 , $1000 \sim 1999$, $2000 \sim$)にわけける。 ~ 999 では上下段で作業量不変、脱落率増加、 $1000 \sim$ で作業量増加、さらに $2000 \sim$ となると脱落率下段で減少(オ4表)

ヘ. 選択反応検査: ホと同対象を誤反応数で4群(誤 $0 \sim 2$, $3 \sim 5$, $6 \sim 8$, 9 以上)に分ける。群間差は上段の成績でだけみられる。作業量は $\frac{5}{2} > \frac{3}{2} > \frac{2}{2} > \frac{1}{2}$, 脱落率は $\frac{2}{2} < \frac{3}{2} < \frac{5}{2} < \frac{8}{2}$ 。(オ5表)

オ1表: 対象別規準値(平均値)

群		作業量	脱落率	誤謬率			
				計	形	色	形・色
A	上	46.7	30.1	0.91	0.31	2.5	0.12
	下	58.7	19.5	1.2	0.22	5.1	0.16
B	上	37.3	28.5	1.8	1.1	4.8	0.07
	下	46.0	21.0	2.1	1.6	6.8	0.03
C	上	37.0	31.5	3.3	4.2	3.0	0.3
	下	46.6	30.2	2.7	2.7	3.9	0.3
D	上	28.9	52.6	6.6	2.2	6.7	0.7
	下	32.9	56.7	6.9	3.4	8.2	1.0

A: 大学生, B: 中学生, C: 道交法行政処分者, D: 精神病患者

オ3表: YGとの関係

	类	A	B	C	D	E
作	上	47.1	49.7	44.6	51.2	42.7
	下	61.5	62.5	54.3	64.9	52.9
脱	上	28.7	36.1	26.2	36.7	25.2
	下	22.0	25.8	16.2	20.8	17.3
誤	上	0.6	1.1	0.5	1.9	0.7
	下	0.7	1.9	0.7	2.5	0.9

オ4表: 速度見越検査との関係

群	上	下	上	下	上	下
作	上	29	25.0	36.7	12.5	50.0
	下	30~49	66.7	42.5	50.0	30.0
脱	上	50~	8.3	21.0	37.5	20.0
	下	24	41.7	31.6	25.0	20.0
誤	上	35~49	41.7	36.8	50.0	60.0
	下	50~	16.6	31.6	25.0	20.0

オ2表: MPIとの関係

群	E	上	下	上	下	上	下
作	上	35.2	35.7	40.6			
	下	44.7	44.8	48.0			
脱	上	31.1	25.7	30.1			
	下	42.5	20.4	20.8			
誤	上	1.7	1.9	1.5			
	下	2.9	2.1	1.6			
N	上	34.3	35.0	39.7			
	下	51.1	42.5	48.8			
作	上	31.6	26.9	27.2			
	下	26.6	26.1	20.4			
脱	上	1.8	2.0	1.5			
	下	0.7	2.5	1.9			

オ4表: 速度見越検査との関係

群	上	下	上	下	上	下
作	上	33.3	33.8	42.8		
	下	33.3	38.1	48.6		
脱	上	33.3	42.8	42.8		
	下	50.0	33.4	33.4		
誤	上	33.3	33.4	14.3		
	下	16.7	23.8	19.5		
落	上	0.0	0.0	0.0		
	下	0.0	4.8	0.0		

Graves のデザイン判断テストの試行(I)

○横瀬善正 内山道明 鈴木正弥 辻敬一郎 後藤俣男
(名古屋大学)

産業界の発展と共に、昨今わが国においては、デザイナーという職業は日増しに重要視されてきている。しかし、このデザイナーという職業は誰にでもできる仕事ではなく、本人のセンスということが非常に大切である。したがって、もしも、デザインに対するセンスの良さを程度と識別しうるテストが出来れば、人々の職業適性の上から、きわめて大切なこととなり、産業界から、そのようなテストを作成することが要望されている。本研究は、かゝる要望に答えるようとするものである。

研究目的

形のバランス、プロポーション、シメトリ、リズム等の基本的要素的形式から構成される M. Graves の Design Judgement Test につき、以前、予備的に、中学、高校生、大生等のグループ別にデザイナーの人達のグループにつき、このテストを実施してみた結果、このテストがかなり有効性のあることを知った。そこで、協力者を得て、このテストにつき、広範囲に調査し、わが国におけるデザインテストの作成を思いついたのである。

研究対象および方法

Graves のテストのアイテム96枚をそれぞれスライトにとり、それによつて、一般に多くの人につき調査出来るようにした。各アイテムを順次プロジェクターにより投影し、それぞれにつき、2つ乃至3つの図柄が並列して画かれており、その中から、いづれの図柄がより好ましいかを選択させて、予め用意した記録用紙に記入させ、後にこれを集計し、各人の総合得点および各アイテムの正解数等を調べた。

調査実施の範囲

以下調査した範囲は、中学1年生群(97名)、2年

生群(111名)、3年生群(117名)、高等学校1年生群(200名)、2年生群(175名)、3年生群(317名)、大生群(短大生、専修大生)(536名)およびデザインスクール学生(70名)と総計1673名である。

調査の結果

まず整理中のデータであるので、今ここに整理したデータに基づいて、中間報告も可能なところである。

表1は各群の平均得点を示したものである。この結果をみると、一般人群と比較してデザインスクールの学生群は得点が一般に高くなつてゐる。

また、今発表のみにみると、中学生群は一般に得点が低く、中学1年生群は最低の得点である。高校生になると、得点は急に上昇し、これは大生になつても余り変化はみられない。

これ等の結果をみると、このテストは充分信頼性のあるものと思われするのである。

本研究に今ここに集められた資料は、地域的に偏つてゐるので、このテストを日本に標準化するためには、さらに広範囲に亘り、都市、農村、山村、漁村等の地域について調査する必要があると思われ。今後その方向に資料を集めること。さらに、デザイナー、画家などについての調査が不足しているの、その方への調査をふやし、それらの結果に基づいて、標準化を試みる予定である。

(追記)名古屋市中村区不老町 名古屋大学文学部

表 I

中学1年	2年	3年	高校1年	2年	3年	大学1年	2年	デザインスクール
55	58	58	61	62	61	62	62	67

Gravesのデザイン判断テストの作成(2)

横瀬善正 内山道明 鈴木正弥 辻敬一郎 後藤倅男
(名古屋大学)

目的: M. Graves が作成したデザイン判断テストの刺激図版をスライドで投影出来るようにして集団検査を行なった。検査の対象は、一般学生と美術系学生である。得られた結果は、上記の両群の外に、専攻希望別及び性差に関して比較が行われた。

方法: Graves 考案の刺激図版(無彩色) 90枚のスライドを作り、これらを順次観察者に提示した。観察は準暗室で行ない、スクリーン上に示される2~3回のデザインの中から一番良いと思われるものを選び、所定の解答用紙に記入させた。観察時間は約10秒とし、次の10秒で記入させ、1回の図版に約20秒の割合で90枚の刺激図版を次々に提示していった。本研究の観察者は、一般学生 97名(名古屋大学教養部学生; 男子 87名, 女子 10名)及び美術系学生 70名(三宅大学美術科学生・名古屋大学デザイン研究所研究生; 男子 27名, 女子 43名)であった。

結果と考察: 各グループの人数 N ・平均得点 $MEAN$ (90点満点)・標準偏差 SD が TABLE 1 に示されている。これによると、まず、一般学生と美術系学生とは、美術系学生の方が平均得点が高くなっている。Graves は、各グループ内での信頼性係数を求めているが、本研究では、一般学生と2群に分けて相関係数を求めたところ、+0.91と非常に高くなっている。これに対して、一般学生と美術系学生との場合は、+0.62と前者に比べて低くなっている。Fig 1は、一般学生と美術系学生と各得点に向う人数の百分比を示したものである。ここには、一般学生に比べて美術系学生の方が高い得点の方に幾分片寄っているのが知

られる。また専攻希望別では、男子学生と女子学生とも共に理科系の方が得点が高くなっている。Graves は、専攻課程のレベルで比較を行っており、美術に関連を持つ専攻課程(デザイン・商業美術等)の学生の得点がそうでない学生(畜料)よりも高くなっていることを示している。本研究の場合、文科系は、主として法学部・経済学部が中心であり、理科系は工学部・理学部・農学部が中心であったが、理科系の教養部などの科目には、図学・デッサン等が含まれており、美的判断を必要とする機会が文科系に比べて多いことも考えられ、これが得点の差に影響しているのかも知れない。つぎに、性差に関してであるが、一般学生では、文科系も理科系も男子に比べて女子の方が得点が高くなっている。これは、美術系学生で男子の方が高い得点を取っているのと対照的である。

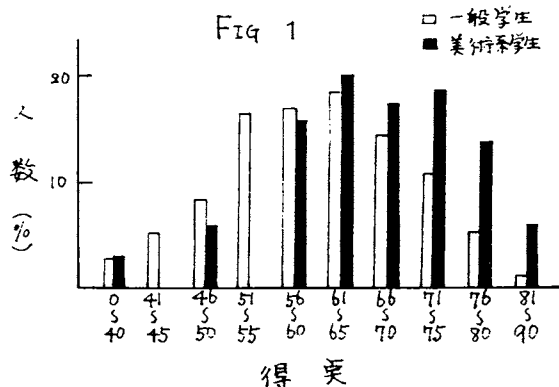


TABLE 1

Group		N	MEAN	SD	
一般学生	{ 男子	文科系	212	58.85	10.23
		理科系	667	60.34	9.53
	{ 女子	文科系	74	62.64	10.59
		理科系	25	64.68	6.61
		全体	978	60.31	9.73
美術系学生	{ 男子	27	67.67	10.07	
	{ 女子	43	66.05	9.79	
	全体	70	66.67	10.03	

以上、各グループ間の差異について見てきたのであるが、得られた傾向差はそれ程大きいものではなく、統計的検定の結果はいずれも有意とはならなかった。本研究の場合、グループ間の人数に大きな差があり、美術系学生の人数が少ないのが一つの問題である。また、検査対象についても地域的に限られており、検査の信頼性という観点から今後の検討が必要である。

人間の生き方に関する心理学的研究(7)

秋重 義治
(駒沢大学 禅研究所)

石井 克己
(九州大学 文学部)

中溝 幸夫
(九州大学 文学部)

目的: 前回の報告では、生き方に関する調査票「LSK」を用いて、適応者群、不適応者群を調査し、両群の差を比較検討した。今回の報告では、適応者群中の優良群について、さらに検討を加えたいと思う。

方法: 調査項目は、生き方に関する考え方や生活状況などを債肉するものであって、表[1]に示すように、10件条件に関するもの230項目、環境条件に関するもの292項目が、さらに条件Ⅰ～Ⅳに分かれる。

表[1] 調査項目

条件	項目数
10件条件	
Ⅰ. 身体的	106
Ⅱ. 心理的	124
環境条件	
Ⅲ. 物的(衣食住)	47
Ⅳ. 社会的(家族)	52
Ⅴ. " (職業)	60
Ⅵ. 文化的(教育)	66
Ⅶ. " (その他)	67
計	522

調査対象中の優良群と名付けたのは、かつて全国から健康優良児童として選ばれた者のグループである。これは、朝日新聞社会企画部が、昭和5年から行っているもので、各都道府県から、健康優良児童を男女別々1名ずつ、計92名を選ばれ、さらにこれらの中から白人、黒人、日本人、日本人-優良児が決定されるのである。昭和34年までの選ばれたこれらの人々1,187名に調査票を送ったが、回答が得られたのは46%の549名(男44.5%, 女55.5%)であった。表[2]の上段には、この優良群の年齢分布が示してあるが、住所の変更

表[2] 調査対象

年齢	25-30	31-35	36-40	41-45	46-50	51+	計
優良群	207	257	1	27	32	29	549
対照群	377	468	0.2	4.9	5.8	4.2	100
	7	11	4.5	12.5	9.5	5.8	42
	1.8	2.9	11.8	32.7	24.8	15.2	108

更その他の理由で、年齢の上位の層は、回収率おろく、30才以下が85%近くを占める結果となった。この優良群と比較するため、一般の人々600名にも調査票を送ったが、その64%に当たる383名(男49.5%, 女50.5%)の回答が得られた。これを対照群とするのであるが、表[2]の下段に見るよう、その年齢分布は、前者と異り、30才代が44.5%, 40才代が40.0%を占める結果となった。

結果: 各項目に対する回答は、なるべく「はい」、「いいえ」のいずれかとし、生き方の観点から考えて、好ましい回答には2点、そうでないものには0点を与えた。また「どちらでもない」あるいは「わからない」の回答は1点とした。このような項目得点を、各個人について、Ⅰ～Ⅳの条件ごとに加え、それぞれの回答数で割り、これを50倍して条件得点(満点100)とした。表[3]には、優良群、対照群の平均条件得点、 M

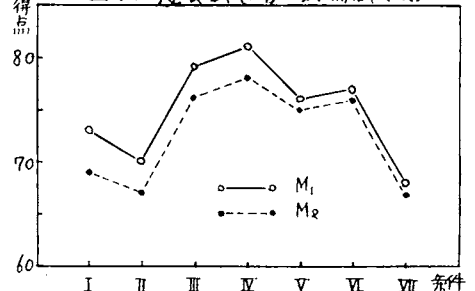
表[3] 調査結果

条件	優良群(M_1)	対照群(M_2)	$d (=M_1 - M_2)$	t
Ⅰ.	73.2	68.7	4.5	8.38*
Ⅱ.	70.1	66.8	3.3	4.19*
Ⅲ.	78.9	75.8	3.1	3.92*
Ⅳ.	80.9	78.2	2.7	2.62*
Ⅴ.	76.3	74.8	1.5	1.23
Ⅵ.	77.1	75.5	1.6	2.76*
Ⅶ.	67.6	66.7	0.9	1.15
Ⅰ, Ⅱ.	71.7	67.8	3.9	7.05*
Ⅲ~Ⅶ.	76.0	74.2	1.8	1.44

(* 5%レベルで有意)

M_2 およびその差 $d = M_1 - M_2$ が示してある。なおこの d の有意性を示すため $t = d \sqrt{\frac{N_1 + N_2}{N_1 N_2} \frac{N_1^2 + N_2^2}{N_1 + N_2 - 2}}$ が算出してある。この表[3]によると、すべての条件について、 $d > 0$ 、 $M_1 > M_2$ なることがわかる。また t によつて、これらの d の中、条件Ⅰ、Ⅱを除いた他の5条件では5%レベルで有意なことがわかる。全体的に見て、優良群は、対照群より上位にあるが、両群は、10件条件(Ⅰ, Ⅱ)について、環境条件(Ⅲ~Ⅶ)より有意な差を示している。これらの結果は、図[1]について、いっそう明瞭に認識されよう。

図[1] 優良群(M_1)と対照群(M_2)



付記: この調査は、朝日新聞東京本社企画部のご協力を得ましたので、感謝の意を表します。(連絡先) 福岡市箱崎 九州大学文学部内。

航空機騒音下の子供達(3)-オ三年度研究報告-

児玉省 O熊本道子 柳昌江 宮本和子 大門和子 木下靖子 竹内加代(日本女子大学)

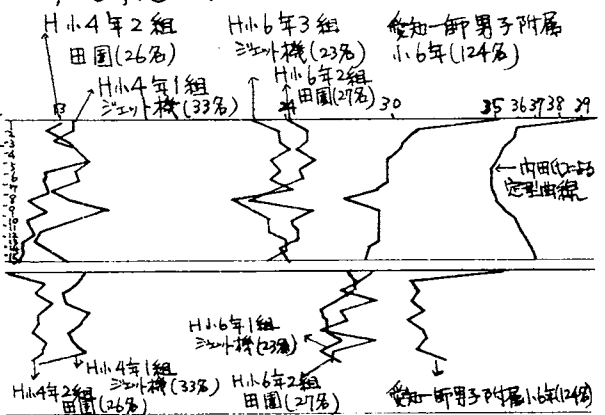
目的:東京都昭島市の航空機騒音下の子供達の五ヶ年研究のオ三年度報告である。I家庭環境の分析:昨年度までの論文で昭島市小へる子供達には自己不安・対人不安・社会不安の項目でコントロール群の子供達に比べて有意差をもっており感情が不安定でかつ攻撃的であることが示された。これは昭島における航空機騒音によってもたらされている可能性が充分考えられるがしかしどちらにそうであるかと断定することは許されない。例えば家庭的・社会的不安によっても惹起される可能性があるからである。それでオ三年度においては家庭環境の育児態度などについて対象児童の家庭の分析を行った。対象としては幼稚園保育園の幼児100名・小の1246年の児童130名とコントロール群の児童同じく1246年の児童120名とその家庭をとった。これらの児童の家庭環境分析によると殆ど差がないという結果が出た。これにより昭島地区の児童の感情不安が家庭環境に特に関係があるとは思われない。身体の発達についても昭島の児童は遅れてはいない。

II騒音下の学習実験:航空機騒音が児童に与える影響をみる一つの手段として各種騒音下のどのような学習実験を行なった。これは人工的場面の設定による実験ではあるが一応各種実験を教室に持ちこんでそれら各種の学習にどんな影響を与える可能性があるかを見ようとしたものである。使用した騒音はジェット機の騒音・ベートーヴェンの田園交響曲の一部を組み合わせた各種騒音の間に30分の空白をおき2本のテープを作成した。NOI音楽-空白-ジェット機音・NO2ジェット音-空白-音楽の組合せでこれらのテープを用いて小の二重窓の装置のある普通教室の1.5倍の特別教室でY一会社の好意によるステレオを装置し専門教師による操作のもとに実験をおこなった。学習実験に課した作業は①所定学力検査の算数から抽出したもの②WISC知能検査検査からの類似問題③WISCからの類似問題④クレペリン精神作業検査からの類似問題⑤クレペリン精神作業検査⑥田中B式知能検査。前述の2組のテープを教室でステレオ再生して対象群小4年2組計66名・6年3組計92名に対してテストに実験を行なった。作業の種類は比較的騒音の影響を受けやすいと思われるものとそうでないものすなわち機械的作業と推理を必要とするような思考作業が混ざり合っていて表示されているいろいろな音で

えてまでもわかる作業をつづけること」も表示した成績については表Iに示す。表I成績(平均点)

学年	H.1	H.2	有意差	H.1	H.2	有意差
テスト条件	田園	ジェット機		田園	ジェット機	
算数	6.1	5.9	N.S	1.6	2.3	N.S
類似	6.8	6.3	N.S	4.9	5.2	N.S
単語	8.2	8.9	N.S	7.4	8.4	N.S
テスト条件	空白	空白		空白	空白	
知能テスト	101.6	102.1	N.S	94.6	94.8	N.S

これによるとジェット機音下の成績は統計的に差がないが得点面からは騒音下の成績よりいいかまたは同じ位になった。II騒音下のクレペリン作業:また同一騒音下で内田クレペリン作業検査も施行したところ図Iに示すような作業曲線があらわれた。図Iのおおきなのは細化と裏野の小学6年生について得た作業曲線であってこれは定型である。一昨年普通の条件下の教室で行った実験クレペリン検査の結果は定型を示しているが今次のジェット機音下の作業曲線と騒音下の作業曲線は小4年6年いふれも非定型になってかつ両者が似かよっている。これは新しく見いだされた事実であつてもこれらジェット機音と騒音がクレペリンの曲線を歪曲させるという事実を示したものとすると他の種類の学習もまたジェット機音と騒音おとによつて同じような傾向の影響をうけている可能性を当然考えなければならぬであろう。来年度はこの問題にともくも予定である。



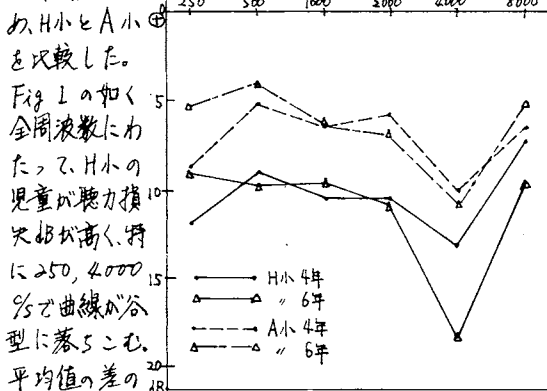
図I騒音下における内田クレペリン作業曲線(連絡生)東京都豊島区雑司ヶ谷1-15-13児玉省

航空機騒音下の子供たちⅣ (93年度研究報告)

○柳昌江・児玉省・大門和子・竹内加代・熊本道子
宮本和子・木下靖子

目標：報告Ⅰ,Ⅱでは諸心理検査、実験で騒音の影響をみてきたが、本研究では直接的に騒音の影響を受け易い聴力について、昨年度に引き続き調査し、又これに関連して、実際に騒音量を測定し騒音地図を作製した。

聴力検査：対象群はH小4年(28名)、6年(28)、H中(20)、統判群はA小4年(21)、6年(20)、総計117名(はつきり耳疾のある者は除外)をランダムに抽出し、リオン製 Audiometer AA-27型で気導聴力検査を行った。測定室には簡易防音装置のある学校放送室を使用。又、防音された隣室を児童の控室とし、測定前の聴覚の調整をはかった。聴力検査の結果から両群別に平均値・中央値・標準偏差を求め、H小とA小を比較した。



検定(下検定) Fig1 H小とA小のAudiogram (左耳平均値) と K-S 検定の結果、4年生は250、1000、2000 Hzの右耳に5%有意で、また6年生は250、500 Hzの右耳に5%有意で、4000 Hz右耳には0%で有意とで、いずれもH小の方が聴力損失が大きい事が見い出された。

他方、騒音に対する抵抗性には個人差があり、平均値のみで結論することは危険である。そこで個人別Audiogramに着目してみると、H小6年ではほとんど聴力損失型を示す。又、前年度、本年度と繰返し検査を受けた児童について聴力の変化をみると、一年経過した本年の測定値の方がやや大きい。(Fig2)

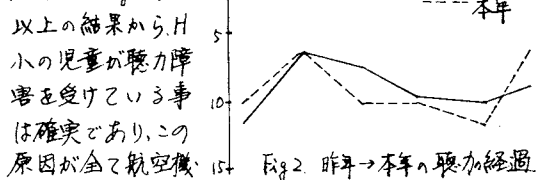
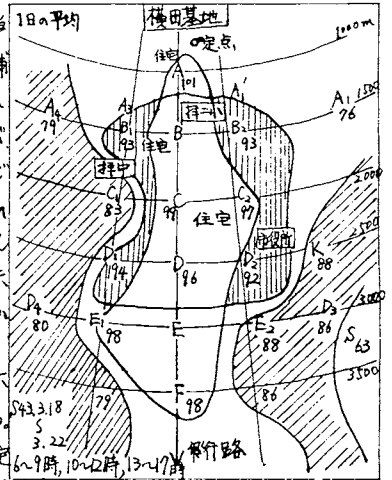


Fig2 昨年→本年の聴力経過

騒音によるとは断定できないが、その可能性は大きい。

昭島市の騒音地図と騒音量：上記のような騒音による聴力障害をひき起していると思われる航空機騒音の量と時間はいかなるものであるかを見る為に、我々は滑走路からの一定地点22点を5日間に渡り、6地点ずつ同時調査して、下図の騒音地図を作製した。AB...は測定地点を示し数字はホーンの単位である。国の補償対象地域は1km~1.3kmと大きくがこの図では1kmで平均100phn、35kmでは98phnで殆んど差のない事を示す。但し、飛行路から直角に横に、た場合は1km以下でも相当低くなる。



又、市の騒音測定観測地点で常時測定している結果に基づいて、騒音の継続時間をみた。(右表)

時	70ホーン以上	騒音継続時間	70ホーン以上の時間	10時間	41分(24時間中)
1	26	9	1時間6分	9時間24分	16時間中
2	4	5	48秒	3時間30分	4時間中
3	13	38	84秒	4時間30分	4時間中
4	9	8	27秒	1時間4分	1時間中
5	17	7			
6	9	5			
7	14	15			
8	45	43			
9	48	38			
10	58	38			
11	58	34			
12	37	54			
13	26	57			
14	46	61			
15	31	28			
16	34	103			
17	29	83			
18	38	99			
19	30	66			
20	19	62			
21	20	35			
22	15	31			
23	10	26			
24	5	19			

なお、現在は騒音の周波数分析を行い、かつ心理的騒音地図を試みつつある。又、完全防音装置下での聴力検査も行っており(連続先)豊島区雑司谷1の15の13。 児玉 恒

皮膚科学領域に於ける心理学的試み

——各種皮膚疾患患者のパーソナリティに就て

○内海 規
(千葉大学医学部皮膚科教室)

青木 孝悦
(千葉大学文学部心理学教室)

臨床において、われわれ臨床家がつくづく感ずることの一つに、同じ疾患を有する患者には、その態度・言語・行動から受ずると思われる何か、ある共通した雰囲気があると云ふ事実である。

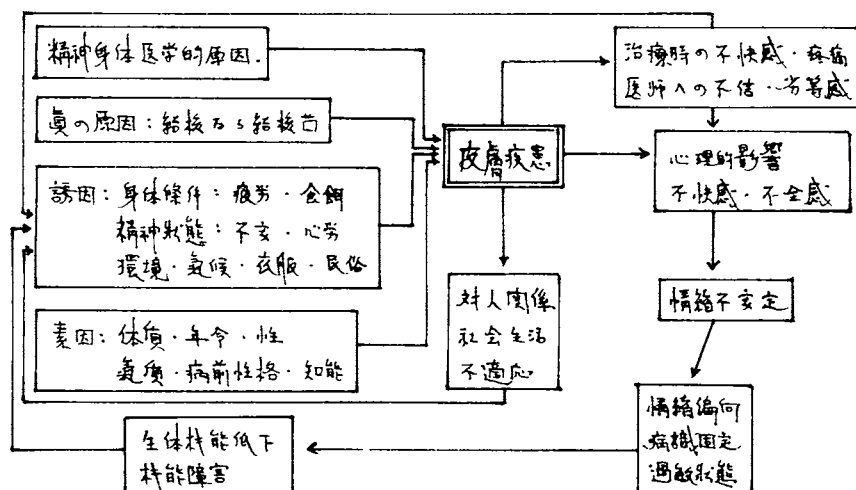
これは、その疾患に罹つたために起つた二次的産物である場合も考えられる。夜な夜な激甚なる掻痒に悩まされる者同志の間には自然、共通した心理状態が生ずるのであるとし、また顔面などに醜悪な皮膚病を生ずる皮膚病の患者は社会生活その他の面で、同病の患者とは互いに類似した生活行動をとるに至ることもある。

しかし、そうではなくて、その疾患に罹る以前よりすでにその病態の患者に特有の病前性格があり、その性格の人間は、その疾患が起り易いと言ふ場合も想定される。

勿論、この二つの要因は決して独立のものではなく病前性格がその病態に固有のものである。その疾患の症状が患者をして独特の心理状態に導くものや反別の場合もある場合も少なくない。

のみならず、精神身体医学的な原因や身体的な原因環境の誘因などが集積して生ずる皮膚の疾患が、更に情緒の偏向を齎し、生体の機能不全を醸し出し一層皮膚疾患を定着させる秩序と考えられる。

それを図式化すると下の如くなる：



われわれは今まで、この問題に関して、各種皮膚疾患症例につき、それら患者の有するパーソナリティを、ロールシャッパ、YG, PF, SCTなどにより調査して来た。それらのインデックスを比較して検討するにそれら疾患を惹起させる体質的な要因と一致した患者自身の病質的傾向が窺われるが、しかし同一疾患でも数多くの要質の類型があり、また異種の疾患にも同一の性格特性を見出す場合が少なくない。

これは疾患群を単位とする対象に対して、施行される心理テストに妥当性を欠いているとも考えられるが、しかし疾患の成立に関与する諸種心理要因解明のため、寧ろ心理テストに現れた subgroup を把握すべきとも考へる。それにより、近似インデックス患者同志を統計的に分類して、新規の疾患集団を確立し得るも考へる。

円形脱毛症には、外向性の群と内向性の群との2群あるも、慢性尋常性癬と対比的な特性を形成する。又、ビタミンB₁₂代謝症に於いては、代謝亢進型と欠乏型とに際立った差異が認められた。尋常性痤瘡群において Acné excoriée des jeunes filles Brocq 1898 を名の rigid type (Wittcocker) や father fixation など各種心理的変遷の秩序を拾ひ得た。

(連絡先: 東京都中央区日本橋両国44)

慢性精神分裂病者に対する心理劇の適用

迎 孝久
(福岡県立太宰府病院)

・古賀 良子
(九州大学文学部)

目的：われわれは、慢性分裂病者に特徴的な能動性の減退、感情の鈍麻、自閉症状などに対する治療の1手段として、数年来、心理劇を行ってきた。ここではS.42.4～43.3の一年間の結果に関して報告する。

対象：福岡県立太宰府病院入院中の分裂病女子患者の中から、CattellのC.F.知能検査の結果より、IQ56に達するグループ6名とIQ56未満のグループ6名との2群。前者の患者は全員昭和生れ(Sグループ)であり、後者の患者は大正生れ(Tグループ)であった。

方法：監督1名、補助自覚2名、記録者1名の治療者群(医師、心理士、看護婦)により、週2回、1回平均1時間行った。2群は半円形に同席し、1グループずつ平均30分行ったが、このとき、一方の群は、参加可能な観客として隣座している。テーマは、一般的、日常的な生活場面が主で、過去再現的なものとはなかった。用いられた技法は、大体においてMorenoの技法に準ずるものである。

結果及び考察：全体的な改善傾向は、まず知的活動面に、ついで、徐々に情緒面に見られた。この情緒面の变化とはほぼ同時に、拒否ないし無関心などの心理的抵抗が出現している。

初期においては、両群とも平板な日常経験的演技に終始し、場面の始末に固着した。反復や見聞による模倣にとどまらず、多量即時的な適応や、場を展開していく力を示した者は、Sグループのみに見られた。このように、SグループとTグループとの間には、劇中での自覚性、創造性の発現に差があった。しかしながら全症例を通じて、心理劇の場では多少とも行動面、情緒面に正方向への変化が見られる(両群の代表的な症例A,Bを下に示す)。心理劇は、一般の精神療法ほど知能程度による制限を受けない。したがって、慢性精神分裂病者に対する自覚性の訓練及び増強、場への適応能力を高めること、かつ言語化され得ない面に関する診断的な手段として有効である。

日	症例A [S.7年生, 35才, 緊張型, 発病時29~30才 開始時症状: 顔貌仮面状, 尾鈍。]	症例B [T.12年生, 45才, 破血型, 発病時21才 開始時症状: 尾鈍, 好癖, 回路的。]
4	・動作緩慢。どうやら役に入る。 ・顔貌仮面状。 場の把握は大体出来る。	・役と指定された諸君から、拒否はしないが、無言、佇立。 ・無表情。
5	・他者の模倣的な言動。	・「＝＝＝」と見られる。 10分。演技中は表情はない。
6	・時々拒否あり。	・「＝＝＝」と見られる。 10分。演技中は表情はない。
7	・誘導しなければ行動しない。 拒否的。	・習慣的なものについて、役を指定するときは必ずしも、それを劇化するとはできない。
8	・監督の状況流しに、適応した。 反復行動を見せる。しかし 9時に拒否あり。	・他人からの働きかけには応えられず、自分から動いては、 ・把握悪く、拒否もあり。一般に低言調。
9	・役に入りかわっている他者に働きかけ、役を取らせる。	・問題あるの指摘はできず、解決へ向かわない。
10	・演技が適応しているばかりでなく、現実感がある。	・経験に基いたようなことはできない。
11	・微妙な状況の変化に、他者へ気をくばり、20分。場をリードしていく。	・同一場面で行動している他者たちとの情緒的なつながりの感じられない。
12	・自覚的に役を取ると、場を救うこともできる。	・通りへへんと状況にないふりをする。

内閉性の変調とその治療について

— 心情負変調治療の研究 第 XVII 報 —

長谷川 琢一郎

(印樺少年院)

目的と方法：心情負徴候としての内閉性は、他人との心的交流意欲が乏しく、自己の内に閉じこもることであり、空想にふかり、周囲の人への無関心から、退屈感を欠き、全くの孤独や緘黙にいたるものがある。これを心情負問診を中心に事例を分析し、変調の出現と消失、他の徴候との関係、経過などを検討し、内閉性の機軸、診断と治療の方法について考察する。

手続：6カ月以上の経過をみた外来相談の100例、施設不適応の受刑者200例、問題中学生800例の記録を中心に、都内と川崎市の中学生の集団検診(昭和35～43年)結果を参考にし、内閉性の有無と程度をみた。内閉性の5段階の中、うち解けあえる相手がいないとどうしても物足らない(イ、欠損状態)、そういう相手がなくてもよい(ハ、固有状態)、そういう相手がいない方がよく、うち解けあう気持ちにどうしてもなれない(ニとホ、変調状態)をとり、普通状態(ロ)は省略した。他の心情負徴候には、抑うつ・無力・過感・強迫・自己不確実・粘着・意志欠如・即行・不安定・気分易変・顕示・爆発・遷徙性がある。

結果1：内閉性徴候とその変調の出現率

問診をくり返す過程で、内閉性の欠損状態は、外来例の21%, 受刑者例の13%, 問題中学生の23%に出現。固有状態は、それぞれ20%, 17%, 2%, 変調状態は、3%, 8%, 0.5%に出現した。一般の中学1年生には、欠損状態10～20%, 固有状態1～5%, 変調状態0.5～1%が認められ、年々不定に変動している。また年令の進むにつれ欠損状態は減少、固有状態は増加しているようであり、男女差は明らかではない。

結果2：内閉性徴候と他の徴候との関係

内閉性の欠損状態は、顕示性・爆発性の変調のほか、受刑者には即行性の変調を伴うことが多い。内閉性の変調状態は、かならず他の徴候の変調を伴って推移し、外来例では無力・過感・強迫性、受刑者例では強迫・即行・気分易変・顕示・爆発性の変調を伴うことが多い。また内閉性の欠損状態は、内省の乏しい場合に多くみられ、固有状態は、他の徴候の変調または固有状態に結びついて、複雑な反応形式をとっている。

結果3：内閉性変調の出現に伴う現象 (事例増)

内閉性の変調を示した外来の3例は、いずれも慢性

化した他の徴候の重い変調が持続する過程に出現したもので、人嫌い、緘黙のほか、作詩作曲・抽象画に耽り(26)、独語空笑作語、妄想様症状、幻覚を伴い(46)、あるいは全くの孤立・自蔽に陥いる(95)。受刑者の16例は、入所当初に妄想様症状を伴った激しい拘禁性反応の間に出現したもの(1, 10, 196)、仲間から嫌われ、強い人間不信から独居逃避を続けるもの(8, 12, 50, 70, 71, 72, 75, 150, 175)、出所直前に、一般社会への復帰を厭って出現するもの(13)などがある。問題中学生の5例は、いずれも軽症であつて、学校でも家庭でも話相手をつくらず、孤立し独り遊びをし、話しかけられても返事をせず、時々独語空笑、奇声を発するほか、めだつた行動に出ない生徒である。

外来・受刑者例とも、変調の軽快時に、幼少期の孤独と不適な経験を変調の原因あるいは転機として物語る。

結果4：内閉性の変調消失と欠損状態の推移

内閉性の変調の多くは、他の変調と共に軽快と悪化をくりかえし、きわめて徐々に軽快または消失するが、多くは固有状態にとどまる。音楽・作詩・建築設計・材木いじりにすぐれた能力を発揮するものもあるが、知能の低いものは、なお困窮のおそれと考えられる。

内閉性の欠損状態の約半数は、内省が深まるにつれて普通状態に移行し、他の変調が消失すると共に問題行動も消失し、順調に経過するが、知能が低いものの多くは欠損状態がはずぎ、おちつきを欠き粗暴な行動に出るものがめだつ。

考察：E. BleulerやE. Minkowskiが分裂病者の感情・思考について述べた内閉性の概念は、内的生活の優位と現実からの心的隔離であるが、それと心情質の内閉性変調との間には、段階的移行の関係があるように思われる。後者の特徴は、心的交流意欲の欠乏と弱化であるが、交流意欲が全く失われることはなく、交流意欲があつてもどうにもならないという悩みをもっている。その限りにおいて、自己表出法としての心的作業と小集団による人間関係の学習とによつて、治療が可能である。長すぎる独居処遇、治療者のおせりによる説得や、画一的取扱いは、つねに有害であらう。

分裂病への移行については、さらに検討を加えたい。(連絡先) 千葉県印樺郡印西町草深 947。

アクション・カウンセリングに関する研究

○武藤 安子
(日本児童臨床研究所)

高橋 湛子
(日本児童臨床研究所)

《本研究の目的》本研究は、お茶の水女子大学児童臨床研究会を中心に実践、研究がすすめられているアクション・カウンセリング(心理的カウンセリングあるいは関係療法)の立場をあらわにし、その技法の体系化を目的とするものである。

1. アクション・カウンセリングの原理

- (1) 関係理論—三者関係の原理、未来志向性の原理
- (2) 心理技法の原理—自覚性の原理、役割の原理、アクションの原理、集団性の原理。

2. アクション・カウンセリングの枠組

《問題の成立》アクション・カウンセリングの立場では、問題を、人に即してとらえたり、過去にそのぼってとらえたりはしない。問題を「人」とよび「もの」の関係の発展をよびまわりの状況が生じ、関係内個人の役割のとり方から困難であるとして把握する。カウンセリング関係内にもちこまれる問題は「いま、ここで」展開している人との関係・物との関係・自己との関係からなるカウンセリング関係内に位置づけ、その関係を発展させることにより問題解決の方向がめされる。カウンセリング関係における問題は、関係枠の明確化により、成立する。

《カウンセラーの役割》カウンセリング活動には、問題解決の方向にそって「人」、「もの」などの関係が新しく用意されることがある。カウンセラーの役割を変化させることその一つである。アクション・カウンセリングは複数のカウンセラー(監督的、補助自覚的、観者的、その他)のチームによりすすめられる。カウンセリング関係の問題の発展により、カウンセラーとの二者面談、三者面談がすすめられたり、関係状況を流動的に展開させるために多者面談(心理劇)がおこなわれることもある。

《診断の意味》診断が、カウンセリングあるいは治療に先だておこなわれることはない。問題がカウンセリング関係の枠組に位置づけられることにより、診断することその関係を発展させる意味をもつ。たとえば、カウンセリングのなかで用意されるテスト場面はカウンセリングにと、まわりの課題解決の場であり、カウンセリング活動全体を規走する対関係発展の場面といえらる。

3. アクション・テクニック

アクション・テクニックとは、アクション・カウンセリングの原理を実際のカウンセリングのなかで具現する手法(療法)であり、三者面談法、役割技法(ロールプレイング)などは、すでに多くの場面で実践がなされており、その有効性を高めている。アクション・テクニックはまた、カウンセリング関係の操作技法としての意味をもつ。関係発展の手、かけは、関係のなかに手である「カウンセラー」「カウンセラー」またその関係を規走する「もの」のいずれによ、まわらされるが、カウンセラーとそのまわりの関係を集団的にまたうして関係を発展させる手法を操作技法という。この場合、カウンセラーが操作するものは「人」ではなく、その人をそこにあらわしめる条件・状況などであり、操作することによ、その人の主体性が確立されたり、関係発展がもたらされることを目的としている。具体例をえる。3つあげよう。その1は、砂場を砂をつかんでは投げ、投げて散ることや更におもしろくなり、またつやみことをくり返している子どもと「乱暴な子だ」とか「放火手だ」というようにいってえらる。ここに砂があり、今は砂を投げることもおもしろいのだと思ひ、「雨がやみぶん降るは、そろそろやまかしう」といふ。子どもは「もうじま、ゆうぐち」といって散らせくやめる。これは場面操作技法のひとつである。その2は、子どもがルールーにおくれく入、まわりのメンバーや遊具に近づくは入口の近くに立、まわりの場合、カウンセラーはぬいぐるみの犬をいっ部屋をぐるっとまわって子どもに近づく「今犬は散歩してた。まわりのいっは」といふ。子どもは片手を犬のせき出すこれは役割操作技法である。役割操作技法には、この他にも、カウンセラーの役割をとったり(私はお水やさんだけ)、子どもに役割を賦与したりする(お父さんかな)ことによ、子ども行動を自らたしめ、自己統制がなけれ、その主体性が確立される方法などがある。場面、役割操作、他、関係、領域、時相、規律、集団、ものなどの操作技法のなかで多く発見、実証され、その体系化がすすめられている。

(連絡先)

武藤 安子 382-4 幼稚園 元付

小集団活動の研究

— 集団における個の変容 —

岩村 任代子
(お茶の水女子大学 児童集団研究会)

目的：児童集団研究会でおこなわれている母子小集団活動の発展に関する研究の一部として、ここでは子ども集団の活動に即して、集団における個の変容過程を明らかにする。

方法：①対象、子ども11名(2才10ヶ月～3才3ヶ月)と指導者2～3名からなる生活指導グループから、メンバーAについて分析する。②実施期間、1967年4月～1968年2月、週1回、1時間、一期12回、二期9回、三期9回、計30回。③研究方法、研究者自身が指導者の1人として参加し、指導者チームでとらえた集団内成員の変化と、参加観察者の記録をもとに分析をすすめた。なお、本研究は、児童集団研究会でなされた集団指導技法の体系化、指導カリキュラムの作成、集団の発展過程の類型化、などの研究成果をもとに行なわれた。

研究の立場：人間を含む生活状況は、3つの役割の位相でとらえることができる。1つは、社会構成的役割で、人はそれぞれに社会集団に所属し、その集団の活動目標および、集団の発展の方向に位置づけられて静態的に把握される社会構成的役割を担っている。この役割は、行為の次元での役割へつながる集団の要求期待体系としての役割である。また、生活状況を空間的現実規定性のなかでとらえると、場面構成的役割がある。これは、今ここに成立している状況を、体系的因果の関係でとらえるとき、状況を構成している要素としてとらえられるものの2つある。活動への動機的な働きをすると同時に、活動の展開過程を規定する性質をもっている。また、今、ここに展開している関係の発展の方向に位置づけ、時間的流れのなかで生活状況をとらえ、機能的役割がある。これらの3つの役割の位相を、母子小集団活動においてとらえ、母子、指導者の3つの社会構成的役割関係が成立しその3つの役割の特性がそれぞれに尊重されながら、3つの役割が出会うことによる関係の発展がめざされる。実際の活動の展開過程において、物(道具)や人のもつ特性が関係的に存在することにより、場面構成的役割を果たし、その役割を操作することにより、機能的役割関係の発展がもたらされる。

結果：一期、二期、三期を前中後期に分け、各期の

指導の特色、集団状況、集団内個の変化を明らかにした。ここでは、個の変化を記述する。

前期	領域的に集団の周辺にいて、自己活動展開。自分の好きな遊びがものとの関係ですぐみつかる。集団からみると、活動をつくり出す役割を果たす。
中期	遊びの領域がひろがり、物の選択がひろい。人との関係よりも、物との関係がよい。二つの物を同時に操作できる。自己の活動の成果を周辺へ広げる。
後期	物媒介に人への働きかけがでてくる。目的的に物を選択。集団の期待をとらえてものを用意できる。集団からみると、特投入による活動内容促進の役割を果たしている。
二期前期	物の選択が固定し(製作道具)活動に興味づけがでてきた。自己の活動の成果を集団へひろげる。
二期中期	状況がみえにいい。集団からみると、新しい活動を生み出す役割を果たしている。
二期後期	目的的に活動を展開できるようになる。自己に成立した課題の遂行過程で人への働きかけがでてくる。集団の課題もとらえて動くようになる。
三期前期	物のえらび方がひろがり、つくりかえて遊ぶ。状況がみえようになっている。集団からの期待をうけとめ、活動を促進する。
三期中期	自己に成立する課題を促進することにより、集団内にコーナーをつくる。まわりからの働きかけに役割をとってうけとめ、とり入れる。
三期後期	自己の活動の成果を集団にひろげ、集団全体の方角性をつくり出す。集団の様になる体験をする。物を素材的につかい、成果を明確にのこす。
三期後期	コーナー発展の担い手として、役割をとってふるまう。集団の期待をうけとめ、媒介的に動き、人との関係へひろげる。

共同研究者：内尾幸子 鮎田典子

連絡先：お茶の水女子大学 児童臨床研究室 岩村 任代子
児童集団研究会

家族関係の診断・治療

役割技法に関する一研究

黒田 淑子
(東京家政学院大学)

目的：役割技法(心理劇)は、家族関係の診断「即治療」に有効な技法であることを、次の諸点から明らかにする。(1)家族の役割関係の動態的把握(2)家族関係の变革・発展(3)家族成員の創造的役割の果たし方に関する基本的条件の解明(4)家族成員の役割訓練

方法：心理劇による集団活動と基盤にして、実生活に知らざる生活縮図の場面を構成し、理論体系(関係弁証法)に位置づけられる現象的事実(具体的な関係の動き、関係体験・役割体験)を媒介にして考察を進める。(大学生と対象とする「家族関係」の実習)

実習経過：①心理劇のwarming up ②小集団の構成③心理劇<291>役割設定、場面設定、心理劇の展開④役割評価<291>活動の展開(変化の段階)にそくして個別評価・集団評価を行なう。(評価基準：心理劇の役割基準による、監督的役割、演者の役割、補助自我的役割、観客的役割、舞台的役割)⑤心理劇<292>⑥役割評価<292>……⑦全体集団における活動のまとめ
役割評価表(例)

活動の展開	関係の展開	家族成員の役割
1. 子からの問題提起	子を中心に複合した二者関係(父・子・母・子)が展開する。	父 補 補 演
2. 問題を媒介に父・母の話し合い	新しい父・母の二者関係が展開する。子は間接的に媒介者の位置を占める。	父 補 演 観 母 演 補
3. 子の立場から問題解決の可能性提案	子に二者(父・母)の関係に働きかけることにより三者が相互作用をもちようになる。	父 補 補 監 母 補 補
4. 具体的な問題解決の方向に向かって活動促進	父における内・外関係の調整により、内・外関係が新しく展開はしめる。	父 監 観・補 演 母 補 補
5. 父・母・子の話し合い	三者が相互に関係に対する関係の通路をもち、共通の場が開け三者関係が展開する。	父 監(演・補) 補(監・演) 演(補・監)

考察：(1)家族の役割関係は、生活場面における活動の展開にそくして、力動的に変化・発展する。

「発展と促進する動き」・「三者関係の発展と、三者の中の二者としての存在が明確化していくように(松村)」三者関係が展開する。(役割評価表「関係の展開」)
・関係の発展をもちたす役割が相互に分化し・関連しあう。(役割評価表「家族成員の役割」)
・家族成員が相互に媒介的指導者の役割をとりあう。(監督的役割、補助自我的役割の交代、互に関係の変化)
・集団の内(家庭)と外(社会)との関係が統合的に発展する。
・関係の発展するなかで問題解決活動が展開する。

(2)心理劇は、家族成員が共通参加体験活動を活動にし、相互理解を深め、家族の三者関係の力動的関係づくりを進めるのに役立つ。場面操作、関係操作、役割操作によって、実生活に対応するいろいろな変化を縮図的に用意し、重ねて新しく劇活動を展開すると効果的である。(心理劇<291><292>における、また「活動の展開」における関係の動き、役割体験の変化)

(3)(4)今、ここで、新しく、自発的、創造的に役割をとってふるまう劇活動、行為と媒介にして役割評価とし体験を認識的に深める活動に参加することは、家族成員の創造的役割の果たし方を育(くる)に役立つ。
「体験」・自分も参加している関係の変動を体験する。
「認識」・家族関係の二者・三者・多者関係を認識する。(「間」関係的役割の果たし方、三者に共通の場、内・外関係の認識化)・関係の発展をもちたす役割の果たし方、役割関係の発展の様相を認識する。
「行為」・積極的に活動に参画して関係責任を果たす。
・役割演技、役割創技がでる。(きまづに通りに入るから変えてふるまう、創り出すへ)・いろいろな役割がとれる。(場面を変えて劇活動を重ねる、役割交代をするなど)・関係操作がでる。(行為を媒介にして操作の認識を深める、関係発展の技法の発見)

本研究は、松村康平教授を中心として展開している関係弁証法に立場に準って行なつたものである。

【文献】松村康平 人間関係(岡本編「家庭心理学」)朝倉書店；松村康平 心理劇 誠信書房；三宅啓子 人格の変容に関する一考察(「児童臨床学」85, 6月) (重刊略号) 東京都千代田区三浦町22 東京家政学院大学内

写字と黙読による学習効果の比較 (ヤナ)

Teaching Machine の基礎的研究

ス 脇 園 子 〇 橋 本 七 重

(白梅学園短期大学)

目的: いろいろな材料を学習する場合に必要とされる基本的条件、および、学習を促進する附随的条件の研究の一部として、英単語と漢字熟語の学習における、写字と黙読の効果と比較した。Teaching Machine の特徴の一つは学習者の自発的な反応に基づいて学習がおこなわれることにあるが、果して反応が overt に示されることと必要条件であらうか。overt な反応は動物や小児、児童の学習や、機械的素材の学習には重要条件であるかも知れないが、成人の、特に意味のある素材の学習には必ずしも重要条件ではないであらうと思われる。そこで前回 (応用心理学会第33回大会) の実験と同様に、女子短大生に英単語と漢字熟語の写字および黙読による学習をさせ、その効果を再生法と、多様選択の再認法でテストし、比較した。今回の実験で改めたのは、1. 学生の2群をそれぞれ英語と国語の学力によって等質化したこと、2. 前回の実験結果にもとづいて、学習材料に使用した英単語及び熟語のリストを、覚え易さを等質化するように編成したこと、3. 前回の実験から、特に英単語は覚えにくいことが見出されたので、学習期間中に、反応を予想させる時間を入れた。

英単語学習: 方法、48名の女子短大生(2年)を一年次の^{英語の}成績にもとづいて等質的な2群に分けた。英単語は、前回使用した24個を使い、前回の実験における成績を調べ、覚え易さを等しく2群に分け、リストIとリストIIをついた。各単語は太判画用紙に、上段に日本語、下段に英単語を対にして書き、一枚ずつ呈示した。呈示時間は各々の単語について、日本語5秒、日本語と英語の対呈示15秒を全リストについて2回、日本語5秒、対呈示10秒を3回繰返した、合計5回呈示した。学習方法は、リストIについては日本語のみが呈示されたときは全員黙読し、対呈示期間中はGr-1は写字学習、Gr-2は黙読学習とした。呈示後直ちに日本語のリストを配布して英単語を再生させ(再生法テスト)、次で、多様選択テストとして、スペルや発音の似た単語5~6個の中から正しいものをテスト(再認法テスト)を行った。次にGr-1とGr-2の学習法を交替し、リストIIを使い、同じ学習、テストを繰返した(テスト1)。この実験の2日後、同じ再

生、再認のテストを繰返した(テスト2)。

結果: 各テストの平均正答数と素点として分散分析をしたが、F検定の結果は、再生、再認両テスト共に、グループ間、学習方法間には有意差なく、リスト間、リスト×学習方法間に差が認められた。平均点は Table 1 に示した。

Table 1.

テスト	再生テスト		再認テスト	
	写字	黙読	写字	黙読
テスト1	4.7	4.7	10.2	10.1
テスト2	2.8	3.2	8.4	8.8

再生再認両テストにおける傾向は同じで、テスト1では写字と黙読学習の成績は殆ど等しいが、テスト2において黙読の方がわずかながら得点が高い。

漢字学習: 48名の女子短大生を国語学力と漢字テストの成績の総合得点にもとづいて等質的に分け、Gr-1とGr-2をついた。漢字は前の実験に用いた28の熟語を覚え易さによって等質的に分け、リストIとリストIIを作った。呈示方法は片かなと漢字の対を画用紙に1個ずつ書き、片かな5秒、片かなと漢字の対を15秒呈示し、14語からなる全リストを2回繰返した。学習方法は英語の場合と同様、写字学習と黙読学習をGr-1とGr-2に交替で課した。テストは再生テストと多様選択テストとし、呈示直後と実験2日後に示した。

結果: 正答数と素点として、再生テストについて分散分析したが、テスト1でリスト×学習方法間にのみ有意差が見られた。平均得点は Table 2. に示した。

Table 2.

テスト	再生テスト		再認テスト	
	写字	黙読	写字	黙読
テスト1	10.8	10.1	13.6	13.5
テスト2	9.3	8.9	13.4	13.2

平均値によれば、再生再認の両テストにおいて、テスト1、2とも写字学習の方がいくらか得点が高い傾向のみみられた。

結論: 統計的に有意では無いが、英語では黙読の方が、漢字では写字の方がやや学習効果が高い傾向のみみられた。以上の結果から、学習過程に含まれる条件は学習材料によって異なることが考えられる。

精薄児および境界線児の睡眠学習

小 出 進
(千葉大学教育学部)

○内 山 元 夫
(一 宮 学 園)

目的: 精薄児および境界線児について、睡眠中の学習の有無について検討することを目的とする。

方法: (1) 被験者
虚弱児施設の収容児童で、日常生活に支障のない程度の者。C.A、I.Q等については表1に示す。

(2) 装置 S.Lミテフル(日本教育企画株式会社)を使用。この装置は、タイマーつき録音テープ再生装置で、小型スピーカーが空気枕の中にあり、その枕を使用することにより睡眠学習することができる。

(3) 材料 下記10対の対連合学習課題(平仮名有意味語)で、1~5の5対を睡眠学習の材料とする。

- 1 ぼうし・でんしゃ

2 こいのぼり・ねこ

3 きんぎょ・ちゃわん

4 かさ・ひこうき

5 めがね・くつ

6 とんぼ・いぬ

7 いす・ようふく

8 ぼーる・ふね

9 げた・うま

10 はさみ・はた

(4) 手続 就寝と同時に条件づけ音楽を聴かせ睡眠に導く。睡眠に入ったことを確認(実験者の観察による)してから、前記5対の対連合学習課題を順次くり返して20回聴かせる。翌日覚醒時に10対の対連合学習課題を与える。対連合学習の方法は、先ず被験者に刺激カードと反応カードの両者を10秒間見せ、記憶するように教示する。次に刺激カードを見せ、反応カードを予告させる。このとき、順序はランダムに行い、予告の正誤にかかわらず反応カードを見せ、確認させる。10対の対連合学習を1試行とし、1日に3試行行う。全対について2試行連続して正しい反応をしたときを学習基準に達したものととして試行を打ち切る。また、21試行において学習基準に達しないときも試行を打ち切る。

結果: 前述の実験により、次に示す結果を得た。学習基準に達するまでの試行回数、学習基準に達するまでの誤反応数がいずれにおいても睡眠中に学習がな

れている傾向が見られる。

		K.O	T.K	A.S	M.Y	T.I
睡眠学習材料	1	21~	4	0	8	0
	2	21~	3	4	5	0
	3	21~	3	4	6	0
	4	21~	2	6	10	3
	5	8	2	0	8	0
	合計	92~	14	14	37	3
非睡眠学習材料	6	21~	5	5	13	3
	7	21~	4	6	3	0
	8	21~	3	7	6	1
	9	21~	2	7	9	1
	10	6	7	6	12	0
	合計	90~	21	33	43	5

表-2 学習基準に達するまでの試行回数

		K.O	T.K	A.S	M.Y	T.I
睡眠学習材料	1	20	4	0	7	0
	2	13	3	3	5	0
	3	14	3	4	6	0
	4	14	2	6	10	1
	5	12	2	0	6	0
	合計	73	14	13	34	1
非睡眠学習材料	6	14	4	4	13	2
	7	20	4	3	3	0
	8	19	3	7	6	1
	9	21	2	6	9	1
	10	6	7	4	11	0
	合計	80	20	24	42	4

表-3 学習基準に達するまでの誤反応数

(連絡先) 千葉市弥生町千葉大学教育学部内

児童における心身のエネルギーについて

竹 原 昭 典
(東京都国分寺市立オオ一小学校)

目的：人格理論の中で、エネルギーの問題（生命のエネルギー、心的エネルギー）は、十分明らかにされた概念とはなっていないが、教育の場では、児童理解の大切な手がかりのひとつであると考えられる。本研究は、児童における心身のエネルギーのあらわれ方と生活指導、学習指導との関連を考察することを目的とする。

方法：(1) まず手がかりとして、児童のエネルギーをつぎの観点からとらえることにする。

- 1 活発な身体活動
- 2 活発な言語活動
- 3 心身の機敏さ
- 4 成就、表現の意欲
- 5 集中力と持続

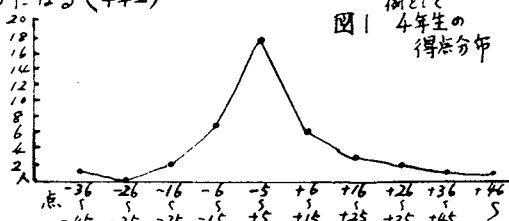
(2) 上述の観点をもとに、つぎのようなguess-who testを実施した。(小学校2～6年各1学級)

- 1 a いつも元気よく 運動や遊びをする人は。
b 反対に いつも静かで 元気よく遊んだり 運動したりしない人は。
- 2 a いつも大きな声でおしゃべりをする人は。
b 反対に おしゃべりをしないで静かな人は。
- 3 a 身体がよく動いて、すばやく何でもできる人は。
b 反対に、のろのろして仕事がおそい人は。
- 4 a 勉強のとき、あててもらいたくて、いっしょうけんめい手をあげる人は。
b みんなの前で言うのがきらいで、知っているてもあまり手をあげない人は。
- 5 a 長い時間何かやっても、最後まで熱心にやれる人は。
b 何をしてもすぐあきて、途中でなまけてしまう人は。
- 6 勉強や掃除のとき、みんなと力を合わせてまじめにできる人は。
- 7 すこしのことにすぐおこったり、しがえしをする人は。

(3) 1～5までのaに選択された場合は+1点、bに選択された場合は-1点を与え、各個人の代数値を求めた。

結果と考察

(1) 1～4の代数値を求めた得点の分布は図1のようになる(4年生)



これから、各学年共、上位25%、下位25%をとると、エネルギー(+)群、エネルギー(-)群に分けられる。

(2) この(+)群、(-)群が、それぞれ5、6、7の各項目で選択された得点の合計を求めると、つぎのようになる。表1

学年	5		5+6		6		7	
	+	-	+	-	+	-	+	-
2	31	-36	74	-15	43	21	43	34
3	37	-9	73	6	36	15	46	7
4	29	-21	64	-16	29	7	20	17
5	-10	-20	14	-15	29	5	37	12
6	25	-20	66	-10	50	10	55	12

(3) 5～6の項は1～4の項とくらべて エネルギーの活動性というより、それを統制する要素を含んだ項である。これが、いずれも(+)群の方が高い得点を得ている。

(4) 7の項は衝動性の要素を含んだ項である。これはいずれも(+)群の方が得点は高い。

(5) このエネルギーの統制及び衝動性については、年齢が進むにつれての統制の増加、衝動性の低下を期待したが、一定の傾向はみられなかった。

(6) 学校での児童の生活で、エネルギーの問題は、表面的には生活指導の場にあると考えてよい。いわゆる「よい子」主義の評価は、おしゃべりをしない子、ろうかをかけない子……などを期待する傾向にあるが、本研究で得た結果によれば、児童のエネルギーは行動の統制と無関係ではないものを予見させる。正しいエネルギーの評価が大切である。なお、学習面との関連は今後の課題である。

(連絡先) 東京都国分寺市東元町2-1-20 オオ一小学校

児童の音楽性の発達に対する診断（その一）

学校放送「日本のふし」小学五年生ラジオ聴取による音楽美の理解感得力

徳 永 茂 郎

（福岡県大木町立大荒小学校）

目的：児童の感性的経験から音楽的感觉や理解力の診断を行い児童期の音楽的発達の特質を究明する。

方針：（1）児童の音に対する感受性は音楽活動の内的本質である。豊かな感性的経験を通して感受性を高めることが表現活動を高める素地となつて発達する。

（2）児童は音楽的経験の背景と音楽性の成長や人間性の成長と発達の背景によつて音楽の美しさに感動するが、児童の発達や訓練の仕方によつて児童特有の個性的な創造的な聞き方の特質を発見することがある。

（3）今回は児童期の音楽的感覚の発達の背景の様相と特質をラジオ聴取から考察究明して児童期における基礎的な知的理解を加えた指導や読譜記譜指導の時期並びにその方法の基調とする。

方法：（1）日時 昭和43年6月14日金曜日第一校時

（イ）対象 小学五年生38名（男24、女14）

（ウ）放送題目 ラジオ音楽五年生「日本のふし（1）」

（エ）放送のねらい わらべ歌に親しめるとともにそのことを通して日本のふしの特徴を感じとらせる。

（オ）指導の重点 日本のわらべ歌の特徴について感じとらせ、その音組織を理解感得させる。

（2）（ア）ラジオ聴取後の理解感得度を文章表現を基にしてその状態を知る。記述による表現は文章表現への抵抗と個人差を考慮表現の巧拙にとらわれず音楽の表現内容を正しくとらえているかどうか重点の角度をあててその背景にあるものを明察するようにした。

（イ）一学級児童のなかより平均的児童10名及び上位の児童5名を更に抽出し考察を加える。

（ウ）抽出児童の感想文章表現と音楽能力、音楽素質及び音楽環境の相互関係を分析し事実を確認する。

（エ）抽出児童の成長と発達の様相からその原因に事例的な解釈を加えて検討する。

（オ）抽出児童の特質傾向を認識して音楽的感覚の感受力及びその発達の傾向特質を推測する。

結果：（1）ラジオ聴取後の感想文章表現は音楽学習の訓練如何によつて大きく左右するが、音楽的な音と感受する力や音楽の内容の多くを正しくとらえているため、放送内容の高度化にとまなつても、日常の指導と訓練の仕方によつては農村児童も消化しうる程度に発達していると考ええる。

（2）抽出児童はこの場合全体的にみて一般知能⁶¹と四教科の学力偏差値⁶²が殆ど一致している。音楽素質診断偏差値は⁶³は⁶⁴わずかな差であるが殆ど変りない。

（3）音楽素質診断検査と構成している各要素のうち高圧判断は5の段階でありながら陰陽旋法の音階の弁別を誤っているK女児は歌唱力器楽力共に優れているが音楽的な音と感受する能力に問題がみられる。K女児の一般知能偏差値は58で中の上、総てにわたつてよく努力する。運動能力にも優れている。家庭環境は銀行の支店長を父に持ち、母は保育園の保母として、本人は小学一年生の時よりピアノを習っている。

（4）音楽は一般知能や音楽的訓練以外にむしろ情意不安定や性格などがその底辺に大きく影響していることが明察できる。このような原因とみられるものが少しでもないよう意欲的にしむけて音楽性を発達させるべく配慮して指導に当らねばならない。

表 文章表現の類型（学級数38、抽出数15）

一般児	抽出児
1 日本のはらべ歌はたくさんある	26 12
多くは「イ音」が中心になっている	18 9
「ミ、ラ」で始つて「ラ」で終つている歌が多い	34 15
2 「ずいずいずつころばし」は少し違つた感じ	19 12
はらべ歌は五音の組み合わせでできている	31 13
日本のはしは二つの特徴を持つ音階がある	9 7
3 日本のはしは大変美しいことが解つた	26 14
日本の歌は「はし」に特徴がある	28 10
4 心もこめ感じもこめて歌つていた	16 9
年よりさ歌つてなぐさめてやろう	3 3
色々なはらべ歌をもっと聞いて歌いたい	12 7
よかつたら他の国のはらべ歌も聞きたい	8 5
5 その他	28 11
陰陽旋法音階の弁別	29 13
音楽素質診断偏差値	56 64

考察：（1）小学五年生の頃は知的活動も活発になってくるので、知識理解を加えて内面的に向つて深めさせていく方向づけの開始時期の重要な段階といえる。

（2）音楽の要素的な理解の上に立つて曲の感じを全体的総合的にとらえて理解し個性化しようとする時期であることが明察される。

（連絡先福岡県三潁郡大木町八丁牟田⁶⁵大木 2-0149

造形と音楽との関係(I)

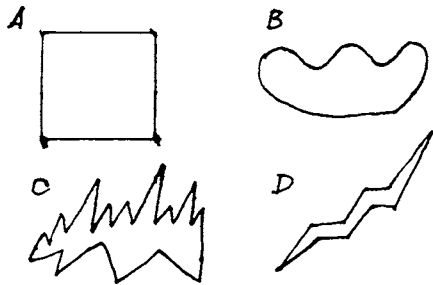
(形象による音楽的想像)

玉岡 忍

(共立女子大学 家政学部)

目的:音楽と造形との結びつきは、ごく自然なものと思われぬ。造形にもメロディーあり、リズムあり、またハーモニーもあつて、形式的にまとまつたものとしての共通点がある。また我々の感覚は視覚と聴覚とは対応して、生活の實體をなす場合が殆んどである。作曲においても、多くの作曲家は、色々の風景や絵画などにヒントをえ、または靈感をうけて作曲した例は数限りない。ベートーベンの「田園」、メンデルスゾーン「イタリア」、「スコットランド」、スメタナの「モルダウ」、シベリウスの「フィンランディア」、またはレスピーギの「ローマの松」、「ローマの泉」などは余りにも有名であり、その他枚舉にいとまないほど沢山の例がある。

ワイルマンは、この間の事情を單的、純粹に見るために抽象的な図形4個(下図A,B,C,D)を作曲家及び



一般人に見せて、その各々の図形から受けるムードをよき、更にそれをもとめて作曲させた。私はこれにヒントをえて、まず今回は、これら4図形から受ける音楽的想像を使ひてみたいと思つたのである。

方法:共立女子大学の音楽史講義生4名に対して、これら4図を逐次見せて、どんな音楽が想像されるか報告させた。

結果:①図Aについて、單純、こごんまりした、機械的、形式的な音楽というのを圧倒的に多く、曲種としては、2拍子または4拍子のもの、行進曲風のもの、4部音符のたくさんあるものなどで、具体的な音楽としては「カルメンの闘牛士のうた」、「ムジルグスキーの展覧会の絵」、「ジャパンの雨だれ」など、及び、バロックからクラシックのもの「バッハ、モーツァルト、ベートーベン」というのが多い。

②図Bについて、なめらかな、平和、やわらかい音

楽を想像し、曲種としては、3拍子のもの、ワルツ風のもの、及び童謡風のものというが多い。具体的な音楽としては「ドビュシーの子供の情景」、「スケーターワルツ」、「ベルリオーズの幻想交響曲」、「シューマンのトロイメライ」などがあつた。

③図Cについて、鋭い、ヒリヒリ、キリキリ、ヒステリック、いやな人間の心理などを表した曲と感じるものも多く、曲種としては、ジャズ、ロカビリー、テンポの速い、高低の差の大きいものを想像した。具体的な音楽としては、「ベートーベンの運命」、「ムジルグスキーの火山の夜」、「ハチャトリアンの叙舞」、「チャイコフスキーの悲愴」などであつた。

④図Dについて、鋭い、はげしい、一瞬の感じ、不安定な感じをもつ音楽と想ひ、曲種としては、落雷と表現したもの、高音の曲、ドラムの乱打、色々の変化のある音楽と想像している。具体的な曲としては「運命」、「田園の中の嵐の曲」、「モーツァルトの序曲」、「ドビュシーのラベールの曲」、「バッハのトッカータとフーガ」、「ワグネルの曲」などがある。

考察:ワイルマンが調べた場合と比較すると、(右図形とそれに対する感じ及び作曲された音楽の特徴とをまとめて述べる)図Aに対しては、ゆつくり、平穏なテンポ、2拍子または4拍子、おだやかな、きまりふしい。図Bに対しては、やわらかなで遅いテンポ、3拍子でスムーズなふわりやわくとおぼやうな感じのもの。図Cに対しては、きびしく、興奮させるようなムード、しばしば不協和音が出て来る、ギザギザしたメロディーをもつもので、どちらかといえば3拍子より4拍子のもの。図Dについて、速く、決定的、刺戟的なテンポで、2拍子または3拍子のもの、上昇してクライマックスへ進むダイナミックな音楽。というものである。これと私の調べた結果とは明らかに共通点があり、一定の形象の音楽のもつ感じまたは曲種と十分の関係があることが判る。ワイルマンが、作曲家と、一般のものとこの間にも高い相関があることを述べていることからもわかる。以上の結果からみると造形と音楽との関係を、作曲面と鑑賞面とにおいて掘り下げてみたいと思う。

スライドで映写された数字と文字の読みやすさ (2)

柴田 徹
(信州大学教育学部)

目的: スライドで暗い地に明るい数字の表を映写したとき, その数字または数字のまわり(地)がまぶしいことがある。今回はそのまぶしさに対してどのような要因がどの程度に影響しているかについて大学生を被験者として実験した結果を報告し, まぶしくないための条件について述べる。

実験の方法: (1) スライドの作り方

(1) 被写体は教科書体の写真植字による乱数表で, 字体は普通の太さとゴシック体の2種類である。

(2) これを2種類の距離で接写し, 字の大きさが2種類のスライドを作る。

(3) フィルムはミニコピーを, 現像液はコピナールを使い, 陰圧のまま使用する。

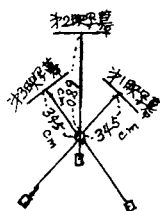
(2) 因子の組合せ

数字のまぶしさに関係があるかも知れないと考えられる因子の中から, つぎの5個の因子を選び, これを直交配列表 $L_{64}(2^{63})$ の列番に対して無作為にわりつけ, また各因子の二つの水準を水準1と水準2に無作為にわりつける。

因子	水準1	水準2
A 被験者から映写幕までの距離	345cm	680cm
B negative film上の数字のまわりの濃度	1.64	1.84
C 数字の太さ	細	太
D 数字の大きさ	大	小
E 外部条件の時間的变化	後半	前半

(3) 映写

オ1図に示すように, 3台の映写機で3枚の映写幕にそれぞれ映写する。オ1, オ2, オ3映写幕にいずれもわくの内側の左右の長さが198.2cmになるように映写し, ランプの明るさはフィルムを入れないで映写して映写幕面における照度がいずれも14.5 lxになるように1台ごとに変圧器で微調整する。オ1, オ2映写幕にはそれぞれ因子Aの水準1, 水準2のものを映写し, オ3映写幕にはフィルム上の数字のまわりの濃度1.64で, 細くて大きい方の数字の乱数表を映写する。幕に映写された数字の大きさ, 間隔, 照度, 輝度等はつぎの表に示す通りである。各は1/10以外の数字の大約の値, Cは数字の中心から中心までの距離である。



○ 被験者
□ 映写機
オ1図

オ1, オ2映写幕にはそれぞれ因子Aの水準1, 水準2のものを映写し, オ3映写幕にはフィルム上の数字のまわりの濃度1.64で, 細くて大きい方の数字の乱数表を映写する。幕に映写された数字の大きさ, 間隔, 照度, 輝度等はつぎの表に示す通りである。各は1/10以外の数字の大約の値, Cは数字の中心から中心までの距離である。

オ1表

単位 mm

数字の大きさ	数字の幅	数字の高さ a	数字の幅 b	数字の大きさ		C	行間隔
				糸田	太		
大		28.2	18.9	3.0	3.8	31.5	34.1
小		24.3	16.3	2.6	3.3	27.2	29.4

オ2表

映写幕についての の数値の種類	照度 (lx)		輝度 (cd/m ²)	
フィルム上の数字の まわりの濃度	数字	数字の まわり	数字	数字の まわり
1.64	7.9	1.8	12.9	0.26
1.84	7.9	1.2	12.9	0.17

(4) まぶしさの評価

オ3映写幕の数字のまぶしさと比較して, オ1, オ2映写幕の数字のまぶしさを評価する。評価の基準はつぎのようにし, 間隔1で評価する。

まぶしくない 0, 相当にまぶしい 8
ややまぶしい 4, きわめてまぶしい 12

解析の結果: 同一機種の映写機(コダック, カラーセル 800)で映写し, 映写幕の照度がフィルムなしで14.5 lxになるようにし(電圧約117 volt, low), 映写幕としてOSパールデライトスクリーンを使用して映写幕の真正面から見た場合, 被験者から映写幕までの距離が680 cmから345 cmへ, フィルム上の数字のまわりの濃度が1.64から1.84へ(映写幕上の数字の輝度が12.9 cd/m²で, 数字のまわりの輝度が0.26 cd/m²から0.17 cd/m²へ), 数字の太さが細から太へ(大きい数字では3.0 mmから3.8 mmへ, 小さい数字では2.6 mmから3.3 mmへ), あるいは, 数字の大きさが小(高さ24.3 mm)から大(高さ28.2 mm)へ変わるとき, 数字のまぶしさは増加することが危険率1%で示される。また, 同じ被写体を露出を変えて撮影し, フィルム上の数字のまわりの濃度について4種類を作り, 実験した結果は上の結果と同様であった。たとえば,

照度 (lx)		まぶしさ	
数字	数字の読み	太字	細字
64.5	1.0	12	8
	1.6	9	5
	2.8	6	3
	4.7	3	0

太字と細字の距離3mmにおけるまぶしさは左の表のようであった。

(連絡先) 長野市西長野町 信州大学教育学部内

保育絵本における語彙構造の分析 (第2報)

— 名詞を中心として —

加 藤 綾 子

(東京家政大学)

目的: 出版文化の発展に伴い、幼児向け絵本の氾濫は著しく、その選別に当っては相当の注意を要するものが現状である。なかでも幼稚園、保育所などを通じて全国的に普及している保育絵本は、他の絵本に比べて教育的役割が強いだけに、絵本編集の企画は重要な意味をもってゐる。そこで今回は、幼児の理解しうる語彙に対して、保育絵本の説明文に使用されている語彙の逸脱の程度を検討する。

方法: 現在、国内で出版されている保育絵本のうち、本研究では公表出版点数50万部といわれるA・B2誌を選び、昭和42年4月号より昭和43年3月号までの各12部合計24部(各号の頁数は平均16頁)を対象とした。説明部分の様式は詩的発想、物語的発想、両者の混合、説明的文章などであるが、B誌では特に前二者に集中している。この中に使用されている語の総数を品詞大系によって分類した。その結果、名詞(普通名詞、代名詞)は異語率においては約5割を占め、延べ語率においても2割以上で、助詞に次いで多い傾向がみられた。その名詞を中心に、それらが幼児にとって必要な語彙であるかどうかを、幼年基本語彙5000語表(阪本一郎氏)、語彙頻数表(牛島義友氏)により分類し、質的な分析を試みた。

表1 幼年基本語彙表による分類

段階	小段階	語 位	A 誌	B 誌	全
1	A	1 1 - 100	4.7	7.1	3.6
		2 101 - 200	4.7	6.1	3.6
		3 201 - 300	3.8	6.3	3.5
		4 301 - 400	3.0	4.4	2.7
		5 401 - 500	2.7	3.1	2.4
	B	501 - 1000	11.1	16.0	11.9
2	A	1001 - 1500	8.7	9.2	8.7
	B	1501 - 2000	4.5	6.5	5.0
3	A	2001 - 2500	4.3	5.5	5.0
	B	2501 - 3000	3.8	2.5	2.6
4	A	3001 - 3500	1.8	1.7	2.0
	B	3501 - 4000	1.7	2.7	2.1
5	A	4001 - 4500	2.4	2.1	2.6
	B	4501 - 5000	1.6	1.3	1.7
			58.8	74.5	58.4

表2

段階	A 誌	B 誌	全
1	78.6	81.0	85.7
2	71.7	63.0	78.3
3	61.4	68.2	79.5
4	44.7	44.7	57.4
5	51.4	40.5	64.9
	31.3	30.5	47.8
	21.2	15.3	30.2
	11.0	10.7	17.2
	10.2	8.8	17.0
	9.7	4.3	12.9
	4.1	2.5	6.3
	3.7	4.0	6.4
	4.4	2.6	6.7
	2.9	1.6	4.5

.1%で、幼年基本

語彙の1500位迄に

占める割合36.4%

と同一傾向がみら

れる。更に頻数表

の各段階毎との比率を示したものが表4であ

る。第100位迄に該当する語は6割で、理解

語彙と表現語彙の相違が著しい。ただし、第

500位迄をとった場合、両者の値は近似する。

(2)基本語彙以外のもの 2種の基本語彙表か

ら漏れた398語について整理した結果、「動

物の名称」が17.5%で最も多く、次いで「遊

びの種類」が7.0%、他は「植物」「玩具」

「土木施設」等が3割前後である。この傾向

は特に図鑑的色彩の濃いA誌に強く、日常生

活に密着した語彙とは認め難く、基本語彙か

らの逸脱は当然の結果であると思われる。

結果および考察: (1)基本語彙 j)「幼年基本語彙5000語表」による分類 A・B両誌24部に使用されている語の総数は11886語、異語総数は2007語である。このうち名詞の延べ語数2920、異語数1001につき、語彙表に基づいて分類した結果が表1である。異語数1001語中基本語彙とされるものは584語で、名詞全体の58.4%と約半数にすぎない。しかしこれと基本語彙表の各段階の語彙数(名詞総異語数3024)と比較してみると、表2のようになる。最初の100語以内には85.7%、続く2・300語位ともに80%近くを占め、500語以内でも6割以上となっている。従って、より重要な基本的語彙は30余年を経過した現在でも同様な傾向を示しているが、低語彙になる程、表に該当する語の割合は低下している。ii)「語彙頻数表」による分類 表3 語彙頻数表による分類

段階	語 位	A 誌	B 誌	全
A	1 - 100	3.0	4.8	2.6
B	101 - 500	12.8	17.6	11.7
C	501 - 1260	13.5	13.6	12.4
E	1261 - 1500	5.5	6.5	5.4
計		34.8	42.5	32.1

表4

段階	A 誌	B 誌	全
A	50	54.8	61.9
B	40	37.3	52.0
C	17.0	11.6	22.2
E	21.1	16.8	29.2

特殊児童の教育評価に関する一研究 (その八)

岸本英男
(東京都 目黒区立 向原小学校)

目的:既に昨年の発表において、明らかにしたように、今日の特殊学級は、教育的に遅れた児童生徒(学業不振)、境界線認知能に分類される者、及び軽度の精神症状をもつ者(slow learner)を含めて三層多段階の方向に発展しつつあるが、元来、障害別に編制せねばならぬ特殊学級が、教育予算配当の関係で、経済原理による定員定額制のシワ寄せを受け、social devianceも含めて、単一特殊学級に一括收容されるという、没理的な画一主義の抬頭によって、若くは混乱を増してきている。このようなキメの荒い特殊教育対策は、当然、特殊学級の教育効果を低下させ、必然的に、教育のlevel downを招来せざるを得ない。現に、特殊学級は地域社会から疎まれ、必然的に担任希望者は少なく、又学校経営上の便法として行政処理されるケースも漸増し、2年未満の勝り勤務型担任が急増しているとの報告もある。(大阪市の場合、それが64.3%と報告されている)。この事実、特殊学級が、今日の教育行政の中で、いかに冷遇されているかを実証している。

同時に、そのことは又、一般学級での教育困難児がscape-goatsとして、送りにまわっている今日の特殊学級の指導が、いかに困難であることを実証していることにもなる。従って、今日のような特殊学級形態が続くものとするれば、個々の学級担任が、三層多段階の指導原理を体得してはかばかばならず、そのための特別な現職教育の機会が構えられねばならないことになる。

このことは、school counselingとの関連において検討すべきであろうが、counselingそれ自体、哲学初期の役割を果たしているにすぎない現状においては、将来学としての展望を理念化する急いで、現実の特殊学級の問題を解決し、ひいては、教育のゆがみを是正する所まで一般化してはいないうみがある。その問題を縫うようにして、school counselingの領域を、生活指導という極めて曖昧な行政指導の強化で糊塗しているのが、今日の学校教育における特殊学級教育の実情であろう。

従って、今日の教育の歪みを是正し、特殊学級教育が、その機能を十分に発揮するようにするためには、抜本的には、特殊学級担任教師養成の方法に、従来の

単位取得と教育実習に加えて、counsellorとしての特別な研修制度を設け、そのための特別講座を、各教員養成大学は、開設すべきであり、又現担任の現職教育には、最低4年の臨床経験、更に4年の担任経験を積むよう制度化すべきであろう。4年のサイクル制をとるのは、責任ある社会公共事業執行に最低必要な年限であるとの社会通念によつたものであるが、これを、2サイクル、つまり8年間の研修にまで、いわば拡大延長する所以のものは、実に、この教育の困難度が尋常一掃のものでないことからの発想である。

それは、今日、とかく、空文化されようとする教育基本法の理念を再確認し、「この理想の実現は、根本において、教育の力にまつべきものである」のテーマにこたえるための、当面の課題であるからには、好むならないからである。

従って、特殊児童の教育評価の実態を、明らかにし、その問題点を剔出して、政治家の怠慢が、教育行政をいかにゆがめ、ひいては「教育の力」をいかに弱め、それが、わが国のみならず、世界の人類にとつて、いかに大きなマイナスを、もたらしつつあるかを、明らかにすると同時に、その対策を考えつつ、日常の教育活動を通して、不断のフィードバックを続けていくことを、本研究の目的とする。

方法:ならびに考察:

以上の目的で、社会の動きを既知数としてとらえ、教育の力の牽揮された面を未知数として、多くの方程式を想定してみた。その結果、そこにおいて、とらえられた教育の力は、対称値としてでなく、唯一絶対値としてしかあり得なかつたことになる。つまり、方程式の未知数は、教師としての自己燃焼としてしか、求め得なかつた。

それに反し、教育基本法の理念を独立変数とし、自己の教育実践で従属変数とする場合、社会制度、経済変動、政治外交、世界観、体質、性差、地域差、要求水準、等の無数の多変数が「教育の理念」に対する「教育の力」の対称値に介入してくるので、不断の懐疑と葛藤と選択の場に陥りこまれることになり、ここに「懺悔道」としての教育学が成立してくる必然性が生じ、現代教育は、より一層、充実するものと思われる。

連絡先: 品川区西五反田4-9-12 (492)(4208)岸本英男

優秀児の特質に関する基礎研究(第22報告)

— 幼稚園児の第2次追跡結果を中心として(その3) —

○ 後 藤 嘉 余 子 森 重 敏 佐 藤 初 重

(東京家政大学児童学科) (岡山大学教育学部) (柿ノ木坂幼稚園)

目的：昭和29年ないし38年の各年度に1幼稚園の1年保育在園児について、WISC知能診断検査で検出された知的優秀児(IQ130以上)は、14～5年後の今日、どのように成長しているか。優秀児の特質研究の一環として、彼等の発達を普通児との比較において追跡的に検討する。昭和38年、卒園4～8年後の発達について第1次追跡調査を試みたが、今回は、その後の卒園児をも含めた第2次追跡結果を、「その1」、「その2」(昭.43.日本保育学会、日本教育心理学会)に続き、特に学業成績・性格面に関して考察する。

方法：(1) 手続 昭和29～38年度(31・32年は欠)の全1年保育在園児に、毎年10～12月、WISCを実施し、検出されたIQ130以上の優秀児(G)を対象に、5～14年後の時点で再検査(WISC又はWAI-S)を行うと共にY-G性格検査を試み、更に質問紙で身体発達、出欠状況、成績状況を調査した。他方、比較のため各年度よりG群とほぼ同数に抽出されたIQ90～114の普通児(N)に対しても、同様にY-Gと質問調査を行った。なお質問紙は主に郵送によった。

(2) 対象 東京都目黒区柿ノ木坂幼稚園における上記8年間の1年保育児全員203名を基底に見出されたG群61名について、本追跡調査でWISCとY-Gの資料を確定した30名(質問調査は35名)、並びにN群53名中、Y-G検査終了19名(うち質問調査完了13名)。その内訳は表1の通り。

表1 年度別対象(G群・N群)の数 (昭.43.7.1現在)

1年保育 在園年度	基礎資料					第1次追跡時 在学年	第2次追跡時 在学年	第2次資料					
	G			N				G			N		
	男	女	計	男	女			計	WISC	Y-G	質問紙*	Y-G	質問紙*
29年度	6		6	5	8	13	中学3年	大学生・初能			—	5	—
30年度	6	2	8	5	3	8	中学2年	大学生・初能	5	5	5	2	1
33年度	4		4	4	8	8	小学5年	高校1年				2	2
34年度	2	1	3	3	4	7	小学4年	中学3年	1	1	3	3	3
35年度	6	3	9	4	1	5		中学2年			6	3	3
36年度	6	2	8	3	3	6		中学1年	6	6	6		
37年度	6	6	12	1	6	7		小学6年	10	10	8	4	4
38年度	8	3	11	1	1	2		小学5年	8	8	7		
計	44	17	61	19	34	53			30	30	35	19	13

注) *質問調査は29年度在園児分を除く。

(3) 本追跡調査期日 昭和43年2～6月

(4) 実施場所 柿ノ木坂幼稚園および被検児の自宅
結果および考察：(1) 教科別にみた成績評価 G群

の学業成績を5段階法による評点でみると、全科平均3.92で、数学、外国語(共に4.13)は高く、保・体(3.60)、図・工(3.73)はやや下廻っている。他方、類数は少ないが、N群は3.46を示し、保・体に次ぎ理科が低い(それぞれ3.00、3.38)。又G群の各教科成績点を、便宜上、品等法によりA～Dの4段階に分けると、全科で61.54%がA、32.97%はBを占め、C、Dは極めて少ない。Aに含まれる割合は国語(73.53%)、数学(63.64%)の順に高率を示し、Bは図・工(41.38%)、保・体(41.18%)が多い。優秀児は、相対的に技術教科より基礎教科に優れている傾向にある。

(2) 優秀児の学業成績とIQとの連関 教科成績とWISC全検査IQとの関連を相関係数によってみると、数学において5%の信頼水準でかなりの連関($r=0.452$)が認められる。しかし、国語、社会($r=0.293$ 、 $r=$

表2 Y-Gプロフィールの順 (%) 0.314)は低く、理科、外国語

類型	G			N
	男	女	計	
A	25.00	40.00	30.00	
B	5.00	10.00	6.67	5.26
C	35.00	20.00	30.00	36.84
D	35.00	30.00	33.33	47.37
E				10.53

は殆ど連関がみられない。

(3) Y-G Profileの類型にみ

られる特徴 G群は殆どA、

C、Dの3類に等分され、N

群にみられるE類は皆無。又

男子は積極型と消極型とにお

表3 Y-Gにおける尺度別性別の連関

尺度	D	C	I	N	O	Co	A ₂	G	R	T	A	S
r	-0.095	0.289	0.381	0.250	0.154	0.453	-0.238	0.154	0.223	0.309	-0.144	0.190
r^2	0.270	2.505	4.354	1.875	0.711	6.431	1.639	0.711	1.491	2.864	0.622	1.083

注) Level ** 0.02>P>0.01, * 0.05>P>0.02

いて顕著であるが、女子は平均型、積極型に著しい。一般に優秀児の大部分は、情緒的に安定し、社会的にも適応した好ましい性格特徴を示している。(表2)

(4) Y-Gにおける要因別性別の連関 G群について12尺度と性別との連関を求めたのが表3である。即ち、CoとIにある程度連関がみられ、男子において協調的、劣等感小のものが多く、女子に非協調的、やや劣等感大といった傾向が、相対的に認められる。

要約：追跡された優秀児は、性格的に情緒安定、社会的適応等好ましい傾向がみられ、学業成績においても高い水準を示している。更に標準学力検査によるIQとの学年別相関、幼児期の性格特徴との関連、環境要因の影響等を普通児との比較において追究したい。

調息・調心に関する心理学的研究(77)

呼吸作用と情動との関係に関する心理学的研究 (14)

松 本 博 基
(駒沢大学文学部)

シェリントン、さらにはキャノン、バードらの有名な実験以来、ジェームズ・ランゲ説は支持し難いものとして否定されてきた。確かに、ジェームズやランゲのように、常に内臓や筋反応が情動の意識的体験に先行し、その原因をなすと主張するのは正しくないであろう。しかし、自律神経支配下にある身体的機能のうち呼吸機能のように相当程度意識的統御の可能な機能と情動との関係を追求しようとする場合、この説のもつ意義は必ずしも全面的に否定し去られるべきものとも思われない。ここに筆者が、あえてこれらの説をもちだそうとするのは、感情に及ぼす末梢(骨格筋や内臓)の影響が、ややもするとみすごされてしまいがちになることを警告したいからである。

筆者がこれまでしばしば述べてきたように、西洋においては呼吸作用と情動との関係を扱った研究はすでに相当の数にのぼっている。しかし、これらのほとんどは情動生起時における呼吸の様態を追求しようとしたものであり、呼吸の意識的統御が情動に与える影響をみようとしたものではない。これに対し東洋においては、科学的解明こそ今後にはまたなければならぬが、すでに数千年以前から感情統御の方法として種々の呼吸法が工夫され、多くの人びとの実践を通してその効果が実証されてきた。感情統御に対しても呼吸統御の意義には、心理生理学的な種々の要因が含まれているものと思われるが、そのうち心理学的立場から特に重要と思われるもの1~2をあげてみると、例えば坐禅における数息観にみられるように、呼吸を注意ないし意識集中の手段として用い、それを通して心の安定をはかるといった心理学的要因のあることを指摘することができよう。この数息観も禅寂においては宗派によりあるいは師承によって、必ずしもこれを用いるとは限らないようであるが、注意を集中させる手段としてのその意義は決して無視できないものと思われる。このような数息観もそれをさらに細かく検討するならば、そこにいくつかの問題がみいだせると思う。例えば、数の数え方についていえば、従来の方法にみられるように1から10までを繰返して数えるのがよいが、あるいは数に制限を設けなくてどこまでも数えていくのがよいが、あるいは各自に合った適当な方法で数える

のがよいが等々。また呼吸の数え方にしても、吸息を数えるのがよいが、呼息を数えるのがよいが、あるいは吸・呼息を合わせて1つと数えるのがよいがなど、詳細に検討しなければならないことがいくつもあるだろう。これらについては筆者の共同研究者が研究を続けている。次に感情統御に関する呼吸調整の意義のうち、ややもすると等閑にふされがちで、しかも極めて重要なことがらに腹圧の問題がある。腹圧は血行、腹その他の生理学的要因と密接に結びついていることは勿論であるが、個体に与える安定感を通して不安や、いらいらを鎮め、心の安定をもたらすという心理学的要因とも密接に結びついているということは、決してみのがすことのできない重要なことがらである。これは例えば、腹圧を強調する岡田式静坐法などによって多くの神経症や、心的要因が強くはたらくといわれる喘息や不眠症が多数治癒されているという事実によっても裏書きされるものと思う。これらの点についてはさらに細かい検討が必要であるが、これに関連して1~2考慮すべき点をあげれば、腹圧は呼吸型と密接な関係をもつものであり、いかなる呼吸型を用いるかによって、それは大きな影響をうける。呼吸型は細かい差異を除けば大別して次の3種になると思う。すなわち胸式、腹式、胸腹式である。このうち胸式呼吸においては呼吸による腹圧はほとんど感じられない。これに対し腹式および胸腹式呼吸は呼吸による圧を下腹部に感じ、どっしりとした安定感を得ることができ、心の落ち着きを招来することができる。ここにおいて、腹式と胸腹式のどちらの呼吸法が心の安定と得るのにより適切であるかが問題となってくるが、われわれの呼吸は吸息よりも呼息より静かに、しかもほろかに長く延すことができる点を考えるならば、静かな、しかもどっしりとした心の安定を得るためには、胸腹式呼吸の方がより適切ではないかと思われる。禅僧の坐禅時の呼吸型が、呼息時間において非常に長いという特徴をもち、また禅寂において呼息と特に重んじるといふことの意義もこのへんにあるのではないかと思われる。これらについては、さらに詳細な検討が必要であろう。

東京都世田谷区駒沢1丁目 駒沢大学心理学研究室

調息調心に関する心理学的研究 (78)

人格の変容に及ぼす調息の効果に関する心理学的研究

中 村 尚 志
(駒沢大学)

方法:

呼吸と精神活動との関係を心理学的に究明しようとする試みは、前世紀末から今世紀初頭にかけて、とくに、ライプチヒ大学のヴントの研究室において盛んに行なわれ、迄として、種々の心的状態における呼吸の変化が追及された。その主なるものは、Lehmann(1898), Mentz(1895), Zonseff(1903), Reboldt(1911)等の研究である。その後も同様の目的をもった研究は、断続的に現われて今日に至っているが、しかしながら、それらの研究は必ずしも一致を見るまでにいたっていない。

情動現象と身体的表出との間に簡単な一義的關係が見られないことは、ひとり呼吸についてのみ見られる現象ではない。その他の多くの身体的表出についても事情は全く同じである。そこにはなお幾多の研究反省すべき問題が残されていると言わねばならない。

精神活動と呼吸との関係に関する従来の研究は、上述のように、精神活動の変化に伴う身体的表出としての呼吸の変化を見ようとするものであったが、しかし、両者の関係については、さらに別の一側面があることに注目しなければならない。すなわち、意識的に営まれた呼吸活動のコントロールが精神面に如何なる効果を及すかという問題である。

周知のように、情動と深い関係をもつ内臓諸器官の多くのものは自律神経によって支配されていて有意的にこれをコントロールすることが不可能である。しかるに、呼吸機能のみは、思うままにこれをコントロールすることができる器官である。

古来東洋諸国においては、印度をはじめ中国、日本等において、呼吸を調整して精神を整えることが数千年の昔から行なわれてきた。ヨーロッパにおいても、これらの東洋の行法をとりいれた呼吸療法が試みられている。その一つは、ロンドンのKnowles呼吸研究所である。最近30ヶ年間に60余ヶ国の10万人以上の人々に施して相当の効果をあげている。わが国における呼吸療法としては、二木式呼吸法、藤田式呼吸法、岡田式呼吸法等をあげることができる。

本研究は、呼吸と精神活動との関係のうち後者について心理学の立場から研究せんとするものである。

呼吸および吸気の活動は、胸腔および腹腔の圧変化によって生ずるものであって、これに主として参与するものは、横紋筋よりなる胸筋および腹筋群と横隔膜である。とくに、横隔膜は、内臓器官唯一の有意的にコントロールできる横紋筋よりなる器官といわれ、その活動は、腹圧、すなわち所謂丹田力と称せられてきたものの発生に重要な役割を演ずるのである。このため近年、横隔膜運動と情動との関係が注目されるに至り、Faulkner(1941), 村木(1950)を初め、われわれの共同研究者松本(1965, 66, 67, 68)などの研究がある。

横紋筋は訓練によってその機能を大巾に変化しうるものであって、とくに、微妙な動作に関係する筋群の活動は、3~4才の幼児期より訓練を初めることが絶対に必要とされている。これに反して、使用的訓練をなさない筋肉は萎縮し、その機能が衰微することも周知の事実である。本研究は、情動と深いつながりを持つ横隔膜の早期訓練に着目して、呼吸法と情動との関係を発達心理学的見地から研究するものである。

手続:

I. 保育園児、小学生を主たる被験者群とし、副被験者群として、中学、高校、大学の生徒および成人を用いた。

II. 主被験者群に各種の心理テストを施し、その性格特徴を明らかに把握する。

III. 各種の身体検査を実施して、胸囲、体重、肺活量、呼吸数、GSR、レ線撮影による横紋筋の活劣量等を測定する。

III. Knowles呼吸法の第1より第4課程にいたる4種の呼吸法を長期間に亘って実施訓練して、そのあとで、上記、II, IIIの検査を実施する。

V. II, IIIの結果と副被験者群に関する研究結果とを総合的に比較検討することによって、呼吸の訓練と精神活動との関係を明らかにする。

連絡先 東京都世田谷区駒沢1丁目
駒沢大学心理学研究室

調息調心に関する心理学的研究 (79)

坐禅における脳波の除波化の変化に関する心理学的研究 (1)

香 渡 大 玄
(駒沢 大 学)

脳波発生メカニズム、および、脳波の相異なる各種のパターンの持つ心理学的意義に関しては、今日まで定説が得られていない。しかし、脳波の basic Pattern が個人によって著明に異なる事実が存在することは、否定しない事実である。

この個人差の問題に関しては、今日までに多くの研究者による報告がある。Davis 等 (1936) は、安静時における α 波の出現率を基にして、1) dominant α , 2) Subdominant α , 3) Mixed α , 4) rare α の四つの群を分類した。Henry (1941) は、安静時、覚醒時、心的活動時 (読書、暗算等々) における個人差が必ずしも一致した傾向を示さないことを報告している。Golla, Hutton および Walter (1943) は、安静時から心的活動に移行する際の α 波の出現傾向に基づいて、P 型、M 型、R 型を分類している。

共同研究者三池は、安静時における α 波の出現は、dominant グループと rare グループにおいては安定しているが、medium グループにおいては変動し易いことを明らかにした。また、Golla 等々のいわゆる R 型は、思考活動にあたって必ずしも視覚的表象を用いるとは限らないことを確かめて、P、M、R 型の分類が必ずしも一義的意義を有しないことを明らかにした。また、共同研究者菊地は、正常者と分裂病患者との脳波のパターンに相違があることを明らかにした。

禅定中、脳波が除波化することは、笠松教授はじめわが国の多くの研究者によって確認されている。しかしながら、除波化現象の意義に関しては、必ずしもその説が一致していない。笠松等は脳機能の意識水準の低下によるとし、共同研究者秋重等は、いわゆる「三昧」等のことばによって表現せられる中枢の統一なる遂行活動に基づくものと解釈する。

禅定における脳波の除波化現象の意義を明らかにすることは、禅の心理学にとつては極めて重要なことであるといわねばならない。本研究はこのような禅定中における脳波の除波化の変化を心理学的立場から研究しようとするものである。

I 共同研究者山岡の研究によって、1～2週間の注意集中の持続的訓練によって脳波の除波化は顕著

に上昇することが明らかにされている。しかし、長期間にわたる研究はまだなされていない。本研究においては、坐禅の初心者について、坐禅開始後 1ヶ月、3ヶ月、1年、2年、3年、乃至10年、20年、30年にわたる長期の修行が如何なる影響をもつかを明らかにする。

II 同一時間の坐禅の実習と数回に分けた分割法がよいか、分割しない連続法がよいか。その効果を明らかにする。これは権心会の在り方に関係するものである。

III 禅定中の脳波の除波化に関して顕著な個人差がある。これについては共同研究者三池の研究があるが、この個人差の意義を明らかにするために、禅僧の平生の安静時の脳波の個人差と禅定中の脳波の個人差との関係を明らかにする。このために、禅僧の性格検査等を行なう。

IV 鈴木の研究によれば、たとえ身体的に坐禅の形式をとつても脳波の除波化は生じない。これに反し臥床の姿勢においても坐禅の心構えをとるときは除波化現象が生ずることが知られている。この禅的心構えが如何なるものであるかを明らかにする。この問題は極めて複雑な問題であるが、ここでは初步的な問題として、従来の非指示的坐禅の方法と、ある特定の視覚的刺激、または、聴覚的刺激を与えてこれに対する注意集中の態度をとらせる方法、各種の数息観を行なわせる方法などの比較研究を行なう。教理を背景とした心的態度の問題等については、これを将来の問題として残したい。

(連絡先) 東京都世田谷区駒沢1丁目 (駒沢心理学研究室)

調息調心に関する心理学的研究 (80)

禅カウンセリングと実存分析に関する比較心理学的研究 (1)

武井 広平

(駒沢大学)

I、最近のヨーロッパにおける心理療法の動向は、人間学派あるいは実存主義学派によって代表されるように、従来の症状中心的な行き方から人間存在そのものを追求しようとする方向へ向っている。すなわち、ビンスワンガーに代表される存在分析においては、存在の存在論的構造から精神病理を理解し、そこから治療実践の原則をたてようとする。またフランクルは、臨床の実際から人間学的アプローチを示した。これらの人間学的アプローチにおいて問題にされるものは、精神病や神経症という症状ではなく精神病患者・神経症患者そのものである。それゆえ、症状の診断とか、直接に患者の障害を除去することに重きが置かれるのではなく、まさに「悩む人間」そのものとその存在の根拠から把握し、その患者に自らの存在のあり方に直面させ、これを自覚させることにおいて、葛藤や苦悩や危機に對して、自ら自己自身をひきうけるという決断を行なわねばならないことによって真の自己完成を目指す人とする。この人間存在の根本的理解から出発するとき、治療者と患者との関係は、ひとつの「出会い」として考えられ、「治療者は職業人としてではなく、人間として、また患者としてではなくて、ひとりの人間に對してかわり合うことを根本的定位置とする」と言われる。したがって、「心理療法において根本的に問われているのは、つねに、結局は、治療者自身の人間性なのである。」(霜山, 1965)

II、禅の二大根幹の一つである参禅問法がカウンセリングの構造をもつものであることは、共同研究者佐々木によって明らかに示されたとおりである。信太(1967)もまた、次のように述べている。「禅の学仏道は「道統」を大事にする。――つまり、仏道が主體的証悟の血肉によって媒介された以心伝心の伝承性である。仏性かもと「人々の分上には具足円満」としているものであるからには、無師にて頓悟するのがこの本筋といえなくもなりが、正師との出会いによる仏道への引揚を要する」と。このように、禅においては、面授面受の嗣法こそ学仏道の中核をなすものである。これに関連して想起されるのは、フロムが述べていることである。「禅の最後の目標はサトリと呼ばれる明悟の至驗である」。かかる至驗の次元では「木木木木

は誰も他の人を救うことはできない。人はたがいのれ自身を救うるにすぎないのである」。したがって「禅の師匠の役目のひとつは眞實の悟りと偽りの悟りとの学生の混同を防ぐことである」と。この場合の師匠の受容と指示とは、しかしながら決して所謂、直接的なものではない。ここに、ロジャーズの謂う非指示的なクライエント中心のカウンセリングとの類似性を見ることが出来る。

III、I、IIにおいて論証した如く、禅カウンセリングと実存分析との間には幾多の親近性を示すことができる。しかし、これをさらに深く追求するときは、人間観ないし生命観に關して、そこに重要な差異のみを見出す。この親近性と差異性を止揚するならば、禅はその方法に科学的新局面を開くことが可能となり、実存分析はさらに深く新たな局面を開拓させることが可能となるであろう。

IV、従来の欧米に於けるカウンセリングには、禅やヨガに見られるような行的契機が欠如していた。近時、シュルツはここに着目し、新たに自律訓練法を創始した。このような行を媒介とし契機とする feedback-interview とは、参禅の生命である。しかし、同一型式の結跏趺坐の行も、その背後に異なる教理を持つことによってその効果を異にする。ここに、IIIに述べた人間観ないし生命観の重要性が再認識されるばかりではない理由がある。

V、最近、島園(1960)は、眼球運動が脳波に勝った精神活動の指標として用いうることを明らかにした。禅定中の脳波の活動については、数に多くの研究がなされているが、眼球運動による研究はまだ皆無である。本研究に於いては、禅の行の実践である禅定中の精神活動の変化を眼球運動を指標として分析し、禅定特有の技能構造を明らかにするとともに、併せて禅定と、I、II、IIIにおいて述べた人間観との関係を明らかにするものである。

(連絡先)

東京都世田谷区馬込一丁目 駒沢大学心理学教室

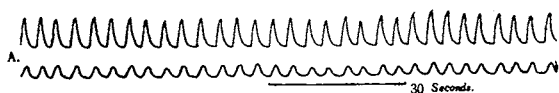
睡眠時の呼吸に関する研究

中 溝 章 夫
(九州大学 文学部)

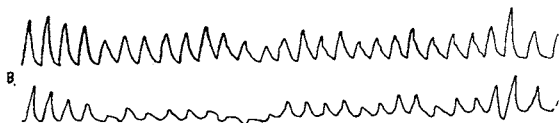
序：一般に睡眠時呼吸は、浅くなり数も減少するとされているが、睡眠経過に伴う生理心理的変動の多様性から、呼吸に関して適切な記述がなされておらず、研究者間の一致にも乏しい現状である。呼吸型についても、呼吸量、呼吸数、吸息呼息時間、呼息後停止などのパターンインテックスが、個人内・個人間の両方で多様に変動することから、一般的記述を困難にしている。他方、覚醒時において、意欲や情動の発現と共に呼吸が変化可能なことは、経験的事実であるが呼吸には、voluntaryな側面と involuntaryな側面があるため、覚醒時においては、刺激に対する respiratory response にも個人間で一致した傾向を把握しにくい。そのためには、その個人の basal な状態をみなされた睡眠時の呼吸型を知る必要がある。以上の観点から、これまで行った睡眠時呼吸の観察結果を報告する。

方法：観察1は同一被験者(♂, 30歳)のク晩の終夜睡眠時呼吸、観察2は5名の被験者(♂, 21歳~26歳)の入眠開始後3時間から5時間間の呼吸、脳波、眼球運動である。呼吸は竹井式呼吸・GSR測定器で、腹部・胸部の呼吸運動を同時記録した。脳波(左右頭頂部、単極導出)、眼球運動(垂直水平の2方向)は、三栄測定器製12チャンネル脳波計に同時連続記録した。

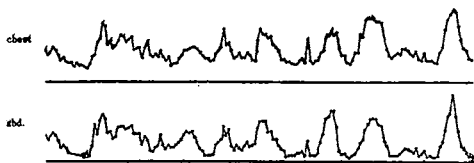
結果と考察：振中の計測結果から、睡眠時の呼吸は regular period (安定期) と irregular period (不安定期) に分けられることができた。脳波的に安定している睡眠時期は、呼吸も安定しており、両者の相関がみられる。脳波的に入眠から深い睡眠に入っていくプロセスで、呼吸は不安定期を通過するが、この時期は呼吸振中の波状の変動がみられ、α波、δ波の波状的な減少増加との関連が示唆される。α波の出現を伴う、脳波の arousal reaction と1つあるいは2つの deep breathing の出現とが対応しており、意識水準の急激な変化と深い呼吸との相関を示している。急速眼球運動の出現と呼吸パターンのみだれとが対応している。同題案としては、観察1の結果、この被験者の呼吸パターン分類をおこなったが、それが観察2の被験者にあてはまらないこと、個人間変動があるため大きなサンプルでの脳波の変動と呼吸の変動との対応関係を検討する必要がある。



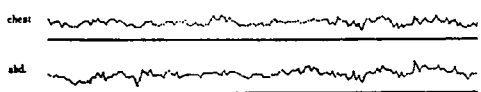
安定期



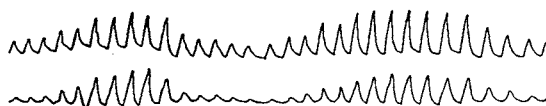
不安定期



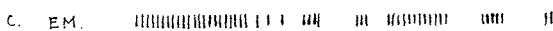
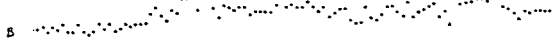
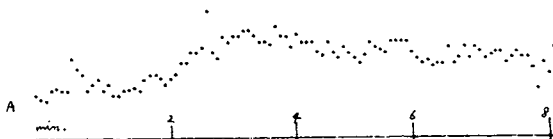
不安定期の呼吸振中・変化



安定期の呼吸振中・変化



波状の変動を示す呼吸



(眼球運動の出現に対応した呼吸の変化 Aは振中 Bは呼吸時間)

(連絡先) 福岡市箱崎九州大学文学部心理学教室内

ESP テスト に 与 え る 実 験 条 件 に 関 す る 知 識 の 影 響

大 谷 宗 司
(防衛大学校)

目的: 偶発的 ESP 現象に於ては, percipient は, 現象を生起させようとの意図や期待を持つことは稀である。一方, 実験事態に於ては, 被験者は target かにどの様な状態にあるかを予め知らされ, それに対し意図的に guess を行う。ESP 現象に於ては, percipient, agent 又は実験者の役割の重要であることが知られており, 之等因子が ESP 過程のどの段階において作用するかについては未知である。本研究に於ては, target を当てようという被験者の意図の役割と, 当てさせようという実験者の意図の役割を分離しその効果を見よことを目的に, 被験者が target の存在を知らされてい場合と, 知られていない場合との call と target との対応について両場合について比較を行った。

本報告は, 本研究における 2 ケースのシリーズの結果である。

方法: 1st Series, target を与えよと同時にその存在を被験者に気づかせぬ為, target を記入した紙を最下層に置き, その上にカーボン紙, 記入用紙を重ね糊付けした記録用紙を用いた。本シリーズは 2 sessions より成り, 1st session は ESP 実験であることと教えた条件 (unknown condition), 2nd session は通常の ESP 実験の条件で行う (known condition) 1st session においては, 被験者は, ESP 標準図形の暗図形を出題日毎の順序に記入することと要求される。この際, 特別な意図を持つことなく自由気まに記入する標準意を与える。2nd Series に於ては, 被験者に記入用紙のみを渡し, target は実験者の部屋のロッカーに積重ねて格納してある条件を含んでいる。この時の target は, 1st session に於て使用した target を再び用いた。

結果: 総得点については, 両シリーズの結果とも, MCE から有意な偏りを示さない。Position Effect を見よ為, 記入用紙を左右上下に等分し, 各区域間の適中数の差異を調べた (2-2 Analysis)。オ 1 Series の結果はオ 1 表に示す。

表に見よように, テスト前半より後半に何つて, unknown condition に於ては下降, known

オ 1 表 (↑: 1%水準で有意)

	+64	-59	+5
↑	-109	-17	-126
	-45	-76	-121

N: 117
(unknown cond.)

	-80	+57	-23
↑	+117	-30	+87
	+37	+27	+64

N: 117
(known cond.)

condition に於て上昇の傾向が見られ, 特に右行の前半に於てその差が著しい。この結果は, 被験者が実験の仕組について無知であり, 従って少なくとも意識的に "当てよう" という態度をとさなくとも ESP 機能が実験者の意図との範囲に於て働くことを暗示している。

2nd Series に於ては, 1st session に於ては 1st series, 1st session を全く同じ条件に於て, 2nd session に於ては, 同じく unknown condition に於て target を実験室外に置いて実施された。両 session の被験者は重複していない。結果はオ 2 表に示す。

オ 2 表 (↑: 1%水準で有意)

	-13	-81	-94
	+28	+55	+83
	+15	-26	-11

N: 91
(near target)

	+22	+107	+129
↑	-18	-79	-97
	+4	+28	+32

N: 87
(distant target)

表に見よように, target が記入用紙の直下にあり場合は上昇, 離れたときは下降の傾向, そして之等は右行後半に於て著しい。この結果は, 1st series の結果と必ずしも一致していないが, 被験者が, 当てようとする意図を持らず, また target が被験者の近くにない場合でも ESP が働くことを暗示しているように思われる。

考察: 本実験に於ては, 実験者の ESP 対応を生じさせようとの意図の効果をよ見よことを目的としたが, ESP の効果は無意識的であり, この実験の場合, 被験者が無意識的に彼等の ESP 機能を target に指向しているという可能性を排除することができていない。しかし, 偶発の場合に見よく特に percipient が意識的に意図しなくとも ESP は生起するものであることを示す結果であると解釈することができよう。

連絡先: 横須賀市走水 防衛大学校

ESP と生理周期 との関係(Ⅱ)

長田一臣
(日本体育大学)大谷宗司
(防衛大学校)

目的: ESPテストにおける得点は、一般に恒常な値を示すものではなく、実験期間、或は、テスト unit 内部の特定の場所にて得点が集中する傾向 (Position Effect) が見られ、これは、ESPの二次的効果と呼ばれる。従来、ESPの長期測定において、得点の漸次的低下が報告されているが、我々は、これが周期的変化を示すことを見出した。昨年の本大会において、我々は、婦人の生理的変化の指標である基礎体温 (BBT; Basal Body Temperature) と ESP とを長期にわたって連続測定した結果、ESP得点が BBT の周期に伴って変動するのを観察したことを報告した。今回は、同一被験者によるその後の観察、及び、新たに加えた被験者の結果について報告する。

方法:

被験者: (a) MK (21才) 未婚 (正常)
(b) YO (29才) 既婚 (子宮切除)

期間: (a) 1966年11月～1968年7月

(b) 1968年5月～1968年8月

場所: 各被験者宅

用具: ESPカード、ESPテスト用紙(大谷式)
婦人体温計

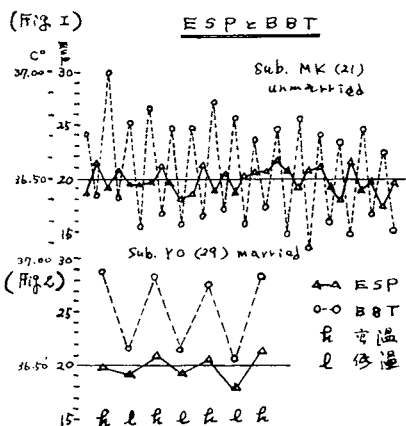
手続: (1) ESPテスト - ESPカードを用いる場合は、被験者自身カード1組を shuffle し、裏向きに重ねたまま guess し、その結果を記録用紙に記入する方法 (DT法; Down Through Method) をとり、テスト用紙を使用する場合は、記入用紙の直下に隠れた random に並べられた ESP symbols を target とし guess をする。(2) BBT測定 - 毎朝、覚醒時、動かないまゝ、床中において、口腔検温をする。

結果: 結果は図に示す。図において、縦軸は ESP 値と BBT 値を、横軸は BBT 高温と低温の周期を示す。中央 20 の線は、ESP テスト 100 試行 (1日において試行数) における偶然期待値 (chance level) を示す。

Fig. 1 は、被験者 MK の 20 ヶ月にわたる結果を示すもので、BBT 高温・低温を各 15 日における各周期内の、BBT 及び ESP の平均値をプロットしたものである。ここで見られる著しい事実は、ESP 値にも周期的現象が見られること、そして、一般的に、BBT 高温期には ESP 値の低下、低温期には上昇が示されることである。この結果は、昨年の報告と一致するもので

あり、この BBT, ESP の関係は、この被験者に於ては安定していることを示すと解せられる。

Fig. 2 は、被験者 YO の結果である。期間が短いので (3 ヶ月) 横軸は拡大して示した。図に見るように 7 回の周期に於て、MK の結果とは異なる傾向を示している。すなわち、BBT 高温期に於て ESP 得点は高く、低温期には低くなるという。



考察: 従来、BBT の研究では、高温期は不安定相、低温期を安定相 (原氏) とするものや、低温期には精神健康度が高く、高温期には低下する (堀中、小林氏) などの主張がなされている。

ここに見られる結果が、ESP 周期と BBT 周期とが直接関係することを示すものか、或は、両者は独立な周期的現象であるか判断することはできないが、ESP 得点は、被験者の心理的状態と関係があることは知られており、本実験の場合も、BBT 変化に連関する心理的状態の変化が ESP 状態に影響を与えていることが予想された。両被験者の示す傾向が異なることは、YO についての測定期間が短く、今後どのように推移するか予測出来ないこと、ESP を規定する因子は多様であり、それらの複合的效果が得点に反映するものであり、これが BBT・ESP が連関していることを示す証拠にはなり得ない。何れにしても、BBT の周期に応じて ESP も同様の周期的変動を示すことは注目すべき事実であり、今後、この個人差の問題を解明するため、各種精神検査、基本的運動能力などとの関連を見たいと思う。

(連絡先) 東京都世田谷区深沢 1-1 日本体育大学内

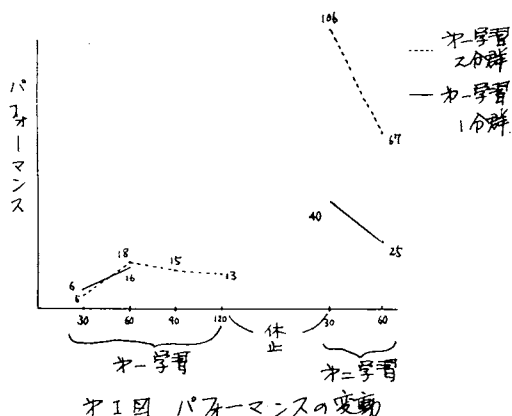
幼児の運動学習における個人差(1)

福島 峰美
(東京学芸大学)

目的：抹消置換などの学習課題は、幼児の場合その知能的側面から数多く研究されているが、その性格的側面については未だ十分な検討がなされていない。本研究は学習課題として追従作業をとりあげ、その個人差の性格的要因を考察するための予備的検討を行う。

方法：実験装置 竹井機器追従装置。回転速度4% 目標円盤直径18mm。平型。回転盤の中心から目標円盤の中心までの距離73mm。回転方向は時計回り。ペン高オシログラフで記録。目標線に1/10秒以上長く鋭筆が接触している時間を読みとる。実験時刻 午前10時〜午後1時。実験室 個室。外音は遮断できないが、EとS以外の者は入室しない。被験者 5〜6歳児4名。ランダム・サンプル。課題 円盤追従の集中学習。要因 ①ヤー学習時間の長さ：2水準(1分、2分) ②ヤーとヤニ学習との間に挿入される休止時間の長さ：3水準(1分、3分、5分) ③ヤー学習の最初の10秒間のパフォーマンス量：2水準(高、低)。

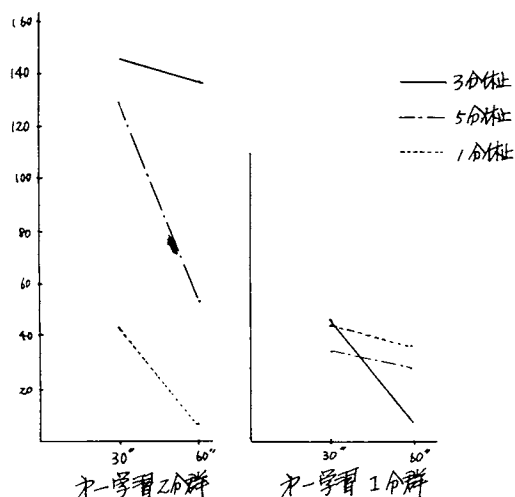
結果：1.パフォーマンス、ヤ1学習時間1分(12名)と2分(12名)とを比べ、30秒ごとのパフォーマンス量(目標円盤に接触した時間)を次に図示する。



ヤ1図 パフォーマンスの変動

分散分析の結果、ヤニ学習のパフォーマンスはヤー学習1分群よりヤー学習2分群の方が有意に大きい。次に休止時間の長さによる差異をみると、ヤー学習1分群の場合には差がなく、ヤー学習2分群では3分休止あるいは5分休止と1分休止との間には

有意な差が得られず。



ヤ2図

ヤニ学習のパフォーマンスと休止時間

ヤニ学習のパフォーマンスは最初に高く、後に下降する傾向がある。最初の10秒間のパフォーマンス量から次の30秒間のパフォーマンス量をひいた値を分散分析すると、休止時間要因は有意でなく、ヤー学習の作業時間要因では有意であり、ヤー学習が長い場合ウォーム・アップ効果が大いといえ考えられる。

3.レミニッセンス ヤニ学習の最初の30秒間のパフォーマンスの値からヤー学習の最後の30秒間のパフォーマンスをひいたレミニッセンスの測定および、ヤニ学習の最初の10秒間のパフォーマンスの値からヤー学習の最後の30秒間のパフォーマンスをひいたレミニッセンスの測定を分散分析したが3要因(ヤー学習時間、休止時間、ヤー学習の最初の10秒間のパフォーマンス)のいづれにおいても有意差は得られない。

3.パーソナリティ要因 ヤー学習2分休止3分群とヤー学習2分休止5分群の8名をそれぞれ向き得点で2分割して上記の諸測定を比較すると、ヤニ学習の最初の10秒間のパフォーマンス量における内向性が外向性より大きい傾向が認められる。

考察：ヤー学習2分休止5分の集中学習によってパフォーマンス量やレミニッセンス測定のパーソナリティ要因を検討することが可能であると考えられる。

課題と構えの形成との関係について

(1) 幼児に於ける色・形反応と構えとの関係

川 島 浩 子

(九州大学文学部)

目的：客観的条件を重視するワスナー学派の構え理論に立つて、対象的構えの形成が、被験者に与えられる課題との様な関係をもつことを明らかにする。類似した研究は、同学派のヴェンゲルによるもので、これを持ちに幼児について発達の見地から考察する。本実験では、課題と直接関係のない立方体の色と重さ（両者は対応している）に対する構えの形成の有無を調べるが、それに先立って色形の反応で、色を規準とする者は、構えの形成が、より容易になるのではないかと仮定する。又その時、色自体のもつ心理的な重さについても検討する。

方法：実験Ⅰ 1)被験者—保育園児3～6才計25名。2)刺激図形Ⅰ—単純な4種の幾何学図形と赤、青、黄、緑とを組み合わせて、4図形を1系列として4系列の副図形を複製。主図形として、各系列毎にその系列の副図形とは同色異形の図形カード4枚を1組として16枚複製。刺激図形Ⅱ—幼児にとって、より親しみのある具体的な4種の図形と、上述の4色とを組み合わせる。以下同様。主図形についても同様。3)指示—「これら（副図形板の各図形）とこれら（各主図形）とをよく見て下さい。そして、これ（主図形）と同じものは、これら（副図形板）のうちのどれですか」。重ねても、指でさしてもよい。4)結果の処理—愛知学芸大学の相川にならった。

形反応優位度	形に対する反応
	$\frac{\text{形に対する反応} - \text{色に対する反応} + \text{total}}{\text{形に対する反応} + \text{色に対する反応} + \text{total}} \times 100$
純粋形反応者 (F)	100%
形反応優位者 (F > C)	51~99
色反応優位者 (C > F)	1~49
純粋色反応者 (C)	0
不定者	50ない反応不足

実験Ⅱ 1)刺激—赤(50g)と緑(150g)の立方体(6×6×6)各5個。立方体の上部には動物、植物、植物の絵が書いてある。刺激Ⅱ—150gの立方体2個(赤と緑)。50gの立方体2個(赤と緑)。2)指示—絵の書いてある立方体を1個ずつ、色彩と手との対応なくもたせて、その絵について質問する。質問の規準なし。10回問った後、初め50gの方で、次に150gの方で重さの比較をさせる。実験Ⅲ 1)刺激—赤の立方体(150gと50g)、緑の立方体(150gと50g)。利

便Ⅱ—赤青緑黄、中間色1、中間色2の6個の立方体(6×6×6)。2)指示—初めにコントロールとして同色の重さの異なった立方体を持ち、重さの比較をさせる。次に2個ずつの対5組についてランダムに被験者の両手におき、左右いずれが重いかを尋ねる。

結果：実験Ⅰ色形反応について—総数でみると、親しい図形の場合は、形の方により注意するであろうと予想したが、図形Ⅰと図形Ⅱとの間には移動がなかった。(F on F > C—17人, 15人, C on C > F—12人, 8人)。色形と年令との関係に就ては、3,4才では少くともFに傾き、5才ではFとCに分かれ、6才で再びFに傾いている。実験Ⅱ課題と直接関係のない構えの形成に就て—対照実験の結果、1、被験者の64%が錯覚を生じた。2、年令が高くなるにつれて、錯覚を生ずる率が下る。3、3,4才では同化錯覚(10人全員) 5,6才では対比錯覚(6人中5人)の傾向がみられる。実験Ⅲ色の見かけの重さに就て—1、今回の実験に関する限り、幼児に於ては、整然とした色の重さの序列はできない事が示された。2、中間色が原色に比べて、かなり重いと判断された。次に赤と緑に関して、実験ⅡとⅢとの関係を個々にみても、対応関係はみられない様である。それ故、実験Ⅱに於ける錯覚は、構えの形成の結果とみてよからう。なお、ヴェンゲルの実験では、この事に全く触れていない。

考察：以上の結果をまとめると、色形反応に於て、色を規準とする者は、上述の様な構えの形成が、より容易になるのではないかと—という仮説は不適であった。次に構えの形成について、ヴェンゲルの実験結果では(恐らく大人と思われる)、殆どの被験者に構えの形成が見られなかった事、及び同化錯覚が生じる割合が大きい事は、形成されにくい構えの力が大きくない事を意味する—という仮説を参考にとすると、年少児では対象の色が、直接関係のない課題と結びつき易い、その程度は弱い、逆に年長児では課題のみにより注意が向く傾向がある、それが色と結びつくと時には、その程度は強くなるのであろう。と思われる。この問題は、同化及び対比錯覚の生じる年代、同化対比錯覚と構えの形成の強さとの関係を、より厳密な条件で調べる必要がある。

大きさの恒常性の発達の研究(Ⅸ)

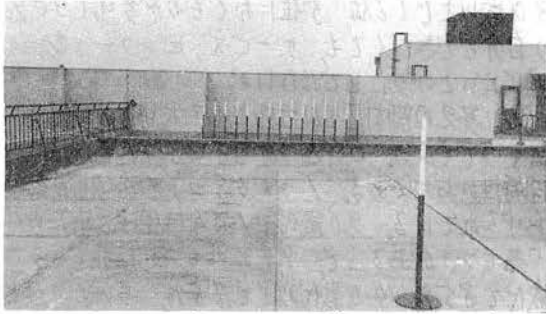
—日常空間と写真面の比較—

島田 俊秀
(東京家政大学)

目的: 我々は1960年日常空間において、高さ1m、巾5cmの標準刺激を用い、系列法による大きさの恒常性に関する実験を試みた。本研究は、前研究の問題点、つまり、日常空間の構造、系列の構成等の問題について再検討するとともに、日常空間を二次元面に変換した場合の大きさの恒常性についての実験結果を報告する。

実験方法: 実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲからなり、各実験は各々TechⅠ、Ⅱからなっている。

実験Ⅰ—実験場所は本大学第3本館屋上(12×70m)である。比較対象は、直径30cmの鉄製円板の中



に直径3.6cm、高さ70cmの黒色パイプを固定したスタンドに直径3.0cmの白色鉄製パイプをさし入れ、その白色部分を比較刺激とした。比較刺激の部分は上下伸縮可能である。標準刺激は50cmで、比較刺激は表に示したように15本からなり、各々水準の異なる5種である。

系列	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
A	47.5	45.0	42.5	40.0	37.5	35.0	32.5	30.0	27.5	25.0	22.5	20.0	17.5	15.0	12.5
B	57.5	55.0	52.5	50.0	47.5	45.0	42.5	40.0	37.5	35.0	32.5	30.0	27.5	25.0	22.5
C	67.5	65.0	62.5	60.0	57.5	55.0	52.5	50.0	47.5	45.0	42.5	40.0	37.5	35.0	32.5
D	77.5	75.0	72.5	70.0	67.5	65.0	62.5	60.0	57.5	55.0	52.5	50.0	47.5	45.0	42.5
E	87.5	85.0	82.5	80.0	77.5	75.0	72.5	70.0	67.5	65.0	62.5	60.0	57.5	55.0	52.5

注: X系列内の最小対象 XX中央対象 XXX最大対象 (cm)

被験者と比較刺激系列の中央対象との距離は8、16、32、44cmの4布置で、標準刺激との距離の比は、いずれも4:1のA-N布置である。実験手続は、TechⅠとⅡからなり、前者は系列を最大から最小に至るまでの15本を右から左に大きさの順に配列した規則系列を用い、後者は15本の対象を無差別に配列した不規則系列を用いた。判断の方法は全てLambertierの方法にし

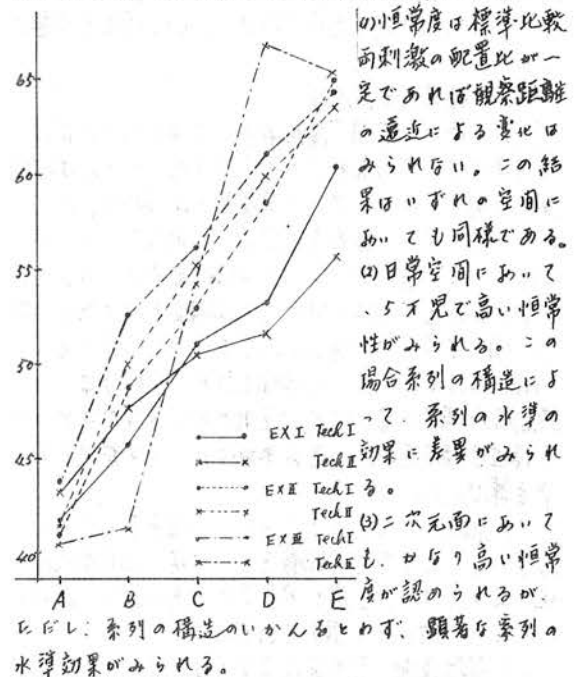
にがった。

実験Ⅱ—前実験と全く同空間における全実験布置を観察地点の高さ130cmの位置から撮映した初(36mm)をポジにしたスライドを作成、それを50×70cmの大きさに投影して実験をあらう。手続は全て実験Ⅰに準じた。

実験Ⅲ—実験Ⅱのネガフィルムから15×23cmの印画紙に焼付して刺激図形にした。他の条件は実験Ⅱに準じた。

被験者: 本大学附属幼稚園5才児 男子6名、女子6名計12名。なおIQの分布は、全児平均117.6 優秀児群(6名)131.3、普通児群(6名)104.0である。実験は昭和40年10月下旬から43年2月下旬まで、午前9時~10時の自由時間にあつた。

実験結果: 実験Ⅱ、Ⅲは等価対象を実物の大きさに換算して集計した。図は、5系列について12名のPSEの平均を求め、さらに4布置の平均を求めて図示したものである。この結果からつぎの結論に達した。



(4) 日常空間に比べ二次元面においては系列の水準効果がみられ、しかも、系列の構造による水準効果の強弱は認められない。

自動車運転者としての自覚的特徴

山根 薫
(立正女子大学)

I) 目的 交通事故防止のために物理的・法的な対策が講ぜられているが、究極的=人間的・心理的条件の整備にかかっているのではないか。物理的制約をこえてなお災害がおきるのは、運転者、歩行者のもつ条件が不十分だからと考えざるを得ない場合がきわめて多い。千葉および静岡の火葬場跡の報告によれば、交通事故で送られてくる少年の大部分は、IQ100以下のものであるという事実は、このことを示すものといわねばならない。

II) 日時および対象 昭和42年10月に実施された兄回の埼玉県地方公務員研修会に出席した自動車運転者男子94名について調査した。その年齢構成は20歳代—34名、30歳代—40名、40歳代以上20名である。これらの人々は兼業者をいれて、乗用車勤務6名、それ以外の資力車、大型車41名である。それらの85%は中学校卒業者である。

III) 研究方法 これらの人々にあらかじめ用意された質問紙を配布し、説明を与えながら各自に記入してもらったもので、20分ないし30分程度を必要とした。

IV) 結果とその考察

(1) 第1の質問「運転者として備えなければならない条件は、どんなものと考えますか。たとえば知能・運転技術……について、その重要さの順序を1から、2、3…の番号を○の中に入れてください」この6項目およびその他(事例)に順位番号をいれるとき実際には差をつけにくいとして同順位をつけたり、数箇の順位番号の平均値を記入したりしたものがあった。同順位はいくつでもその順位を認め、平均値はその最高位の順位に書き改め、それと他の事項が認められた順位の数値を求め、その年齢グループ全員の比率を算出した。

1) 知能 1位を与えたもの、6位を与えたものがある。もっとも多くの頻数をもつのは、20歳代の3位(24%)、30歳代の32%である、40歳以上になると5位にしか認めていない。

2) 運転技術 20歳代では1位におくものが29%でもっとも多く、2位、3位におくものも相当数ある。30歳代、40歳代以上になると2位に格下げしたものが多くなる。

3) 性格 20歳代では1位にするものが29%と30歳代、40歳以上では4位(26%、30%)にしかみえていない。

4) 交通法規 20歳代では2位におくものが35%、1位24%である。30歳以上ではとも1位にみえている。(50%、50%)

5) 一般教養 20歳代では6位(29%)、5位(26%)におく。30歳以上でも5位(30%、30%)である。望ましくはあっても、この際とく必要というわけではない。

6) 構造修理能力 20歳代では6位(38%)、30歳以上でも6位、5位におくものが多い。(30%)自分でできなくても、サービス・センターへ電話すればよいということではないか。

(2) 第2の質問「その性格として大切なのは何か、いくつでもよい。○印をつきなさい」18項目の人格特性があげてある。1つから8つまでの項目がとりあげられている。20歳代で1ばん重視されたのは「落ちつきがある」で、94%のものが指摘し、30歳代で85%、40歳代以上で75%、若いものほど落ちつきたいと考えているようである。それに次いで「親切」、「すなち」、30歳以上で「親切」、「まじめ」をあげる。20歳代でもこの「まじめ」を4位にあげている。30歳以上では「教養」を4位にしている。「おどけ」、「内気」、「平気」各1例といった特殊なものもあるが、一般的にはむしろ内向的傾向の性格が、自動車運転者としてはより望ましいとしているようである。

(3) 第3の質問「運転中気をつけたいことの順序=1、2、3…の番号をいれなさい」その他を加えて7項目ある。交通法規を守るべきことが1位におかれるのは当然であろうが、速度をおそく(8%)、運転だけに専念する(13%)ことこそ1位に考えるものといえる。次いでめき見運転をしないことを2位におき(32%)、運転だけに専念することと3位(29%)にしている。しかし乗客に話しかけ乗しくさせることも無難でないとし、6位におくものが25%いることも注目されてよい。ただ無言で同乗者と話をしないことは5位におかれる程度にしか考えていない。

(連絡先) 津和野高4-16-10

安全運転管理者制度の問題点

長 塚 康 弘
(新潟大学教育学部)

目的：多数の運転者を擁する事業所や職場では、事故防止のためには運転者の自己管理もさることながら、管理者による総合的安全管理が極めて重要である。40年9月、道交法に安全運転管理者制度が定められた。管理者は安全運転確保の責任者として安全教育・管理を組織的、計画的に企画して実行して行かねばならないわけだが、現状はどうだろうか。事故発生状況を業種別に見ると、自家用車の事故率（オ－当事者）の高いことに気づくが、安全運転管理の良否が関係ないか。わいわいわは事故防止に寄与すると考えられるこの管理者制度はどうあるべきかを考察しようとするが、今回はこの制度の実情について予備的調査を行ない、問題点を整理しようとする。

調査に当って、わいわいわは(1)事故の発生は安全運転管理の良否と関係があろう、(2)管理の良好な職場には「適性のある」運転者が多く、不良な職場には少ないだろう、(3)管理の良否はその職場の運転者の生活意見にも反映されるだろう、という想定をたてた。

方法：新潟市内の安全運転管理者をなく職場の中から事故寡少（受彰）職場（電気関係）と事故多発職場（地方自治体関係）とを選定、下記の各項のような調査を行なった。(1)安全運転管理者との面談、(2)各職場の所属運転者に対する適性検査、(3)同じく生活意見調査、である。こからの項目のうち、(1)の面談のみ長岡市内の6つの職場（□の枝肉2、市の枝肉1、銀行1、砂利会社1、商店1）においても実施した。

結果：(1)安全管理者との面談の結果一面談に際し、①管理者として、現在安全確保のためにとっている方策は何か。②運転者の性格や適性状況はいかにして把握するか。③事故防止の効果的方法は？などを中心に質問して安全管理の実施状況を探ろうとした。

結果としては、総合的立場から科学的、計画的に安全管理者としての仕事を遂行している者が少ないという傾向が見られた。良い例として、○家族の状況や自己の心身の状態を中心とする「自己申告書」を提出させて問題をつかんでいる、○作業点検・整備を徹底させている、○法規に精通させるため、警察官や講師に研修をくり返している、○家庭訪問をしている、などがあるが、他方、○管理者の仕事として具体的に何をやるべきかわからぬ、相談の手段もわからない、○運転者の

のnormalityは、顔色で判断すればよい、○声をかければキチンとする、○安全運転管理の良からは無茶だとわかってても経験的に仕事を強いることも多い、○適性検査は知らない；知っているがやる状況ではない、等の例が圧倒的にみられた。

(2)適性検査の結果：—先に北村・丸山・長塚らが開発した重複作業反応検査（詳細は日本心理学会25回大会論文集487頁ほか）を実施した。同時的作業処理能力をみる。

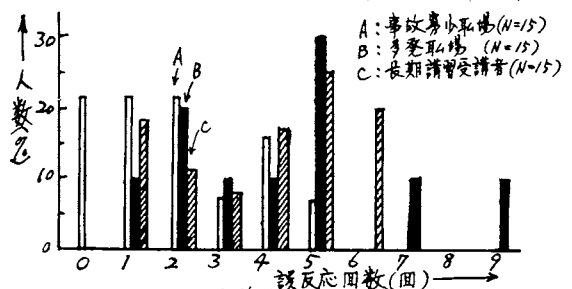


図1 重複作業反応検査の結果

誤反応の分布を示した図1からもわかるように、事故寡少職場群では受検者の76.9%が3回以内の合格圏に入るのに対して、多発職場群では40%に止まっている。平均誤反応は、前者が1.9回、後者が4.3回である。参考として実施した長期講習受講者の事故運転者の成績も示した。

実施に際して時間的制約があり、検査が一種類に止まり、被験者も少なかった。従って一般的話論は無理だが、以上の結果に関する限りでは、管理の良否とその職場に所属している運転者の質の良否の間には関連があるように仮定される。

(3)生活意見調査の結果：—事故寡少職場群34名、多発群25名、長期講習受講者48名に実施。主に管理者に対する見方、同僚間の人間関係、協力関係、取務満足、その他交通場面一般についてアンケート形式で質問し、5段階評定法で回答させた。多発群での上司への信頼感の薄さ、communication不十分など、モラールの低下が示唆されている。質問内容と詳細は紙幅の都合で略す。

総括：せつかくの制度も、管理者の人選の不適切さなど、人を導くことができず、十分な成果があがらないでいるように思われる。管理者がなすべき指導内容方法についての研究と共に、安全問題についての管理者教育と啓蒙が必要であらう。(新潟大学精神科教授と共同調査のうち長塚分担分を報告した。協力を得た新潟県警本部に感謝する。)

阪大式C-Fテストについて(2)

大森 正昭

鶴田 正一

(大阪大学文学部)

1. C-Fテストの目的 : C-F (Colour-Figure) テストは、色彩・数字・図形間にコンフリクト状態をつくり、その際の反応の適否と運転者としての適性の有無を検討しようとするものである。なお本発表は、その開発途上における中間報告である。

2. C-Fテスト : テストは、赤、青、黄、緑、茶の5色、2、4、5、7、8の5数字、○△□☆⊗の5形を用いて、コンフリクトをつくるものである。例えば、ある場合には、形について選択させ、他の場合には、その形の色について、選択させている。

	△	□	○	⊗	☆	□	☆	○	⊗	△
○			✓					✓		
□		✓				✓				
△	✓									✓
☆					✓		✓			
⊗				✓					✓	

3. テスト方法 : 被験者は、集団を対象とし、タイムリミットでテストを実施することになるが、開発途上の現段階では、個人を対象とし、ワークリミットでテストを実施し、所要時間と誤数を測定した。

4. テスト対象 : N運送の長距離トラック運転手約150名を対象としている。なお、結果の整理にあたっては、事故群と優秀群の中から、入社年度、運転経験年数、年齢等の等しい27名（計54名）の運転手を選出して分析を試みている。

5. テストの結果 : 図-1は、テストにおける誤数を優秀群（平均誤数1.85）と事故群（平均誤数3.44）について示したものである。図より、優秀群の方が、誤数が少なく、しかも、分散が小さいことが明らかである。（t検定1%水準で有意）次に表-1は、優秀群・事故群の所要時間を比較したものである。表より、優秀群の方が所要時間が短いことが認められる。

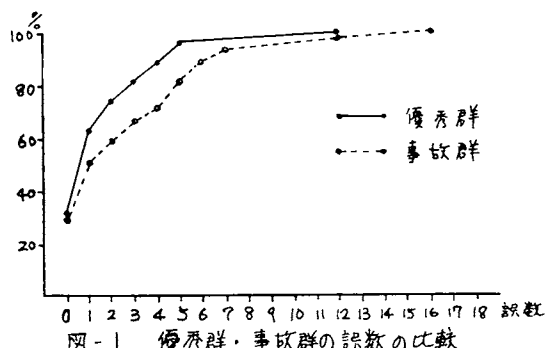


表-1 優秀群・事故群の平均所要時間の比較

	優秀群	事故群	差
1 色	30.2	33.4	3.2
2 数字	28.3	30.0	1.7
3 色数字	31.1	33.9	2.8
4 色数字	30.1	33.3	3.2
5 数字	27.0	28.9	1.9
6 色	25.3	27.2	1.9
7 色形	27.5	28.4	0.9
8 数字	25.6	27.3	1.7
9 色数字	27.0	29.1	2.1
10 色数字	29.3	31.0	1.7
11 数字	25.4	26.8	1.4
12 色形	33.6	35.4	1.8

表-2は、C-Fテストを構成する12問のうち、コンフリクト状態をつくり出す問題について、その所要時間の差（例えば、色について選択した場合の所要時間と同じ問題について、形について選択した場合の所要時間の絶対値差）を優秀群・事故群について比較したものである。これより、いずれのコンフリクト状態にも

	優秀群(27名)	事故群(27名)
コンフリクト1 (色と形)	6.2 秒	8.0 秒*
コンフリクト2 (色と数字)	4.2	6.2 **
コンフリクト3 (色と数字)	6.1	5.6 **

おいても、優秀群の方が、コンフリクトが少ないことが、明らかである。以上のごとくテストの有効性が実証されたので、今後一層の研究を行いC-Fテストの妥当性、信頼性を高める。

長時間注意状況に関する心理生理的研究

山岡 哲雄

(九州大学 文学部)

目的：長時間注意状況において、心身諸機能に変化が生ずることが考えられる。本研究においては、この問題を、視的注意集中による視野の変化と、認知の正確さの変化、および精神活動（暗算等）における集中の度合と生理的諸変化の測定を通じて検討した。

方法：実験Ⅰ；長時間の視的注意集中と視野の変化。被験者は大学生男女12名。実験条件は21×21cmの白色紙の中央に直径5mmの黒点を付した刺激板（Ⅰ）をタキストスコープにより連続して30分間提示する。一対、（ⅡA）同じく21×21cmの白色紙の中央より右上11cmの位置、（ⅡB）同じく右上3cmの位置へ、それぞれ異なる3桁の数字（16ポイント）を付した刺激板（Ⅱ）をそれぞれ4枚ずつ用意した。被験者は両眼視で刺激板（Ⅰ）の中央の黒点を30分間凝視する。開始時、10分後、20分後、30分後の各時期に刺激板（Ⅰ）と重ねて、刺激板ⅡA又はⅡBの3桁の数字を瞬時提示した。露出時間は、開始時に各被験者について2回の提示で正確に3桁の数字を読みとれる時間とした。被験者は6人ずつ2グループに分けられ、それぞれ刺激板ⅡA又はⅡBの系列が与えられ、読みとった数字と、それに要した提示回数をカードに記入する。提示回数と正読数が、それぞれ4時間条件の間の差を見るために統計的に検討された。

実験Ⅱ；精神活動における集中度と生理的変化。Ⅱa. 暗算の難易による変化。被験者は大学生男子16名。10名の被験者は閉眼で、安静、3の累積（2分間）、その累除算、を暗算で行い答が1に合った所止める、安静の4条件を行い、この期間中の呼吸数が測定された。1分間呼吸数の差が、4条件間について統計的に検討された。残り6名の被験者は、閉眼で、安静、3の累積（2分間）、安静、2の累積（2分間）の暗算を行い、この期間中の脳電図（左右頭頂、後頭、単極）と心搏数の測定を行い、安静、累積の前半、後半、各1分間の後頭部α波、心搏数のそれぞれについて、3条件間の差を統計的に検討した。Ⅱb. クレパリン作業量と呼吸数。被験者は男女24名。クレパリン作業検査中の呼吸数を測定した。12人は15分間の作業、残り12人は10分間の作業量について、被験者毎に各1分毎の作業量と同じ期間の呼吸数の相関が検討された。

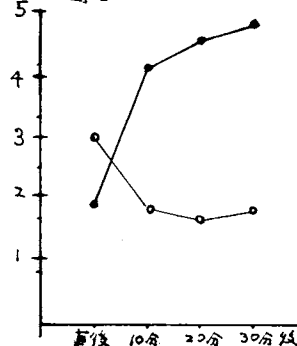
結果：実験Ⅰ。全体の傾向は図1のグラフに示した

通りである。開始時に較べて、10分後には、正読数が減少し、読みとりた要した提示回数が増加し、その後20分、30分後に、この傾向は漸増している。しかし、提示回数の時間条件；直後（10分、20分、30分）9間の差は有意である（ $p < 0.05$, $t_0 = 2.916 > t_r = 2.447$ ）が、10分：20分：30分、の間には有意な差はない（ $p > 0.05$, $F_0 = 0.125 < F_{\alpha}^2 = 4.10$ ）。被験者間にも有意差はみられなかった（ $p > 0.05$, $F_0 = 1.418 < F_{\alpha}^2$ ）。正読数については、直後（10分、20分、30分）、10分：20分：30分、いずれも条件間（ $p > 0.05$, $t_0 = 1.93 < t_r$ ）（ $p > 0.05$, $F_0 = 0.038 < F_{\alpha}^2$ ）、被験者間（ $p > 0.05$, $F_0 = 2.17 < F_{\alpha}^2 = 3.29$, $F_0 = 2.39 < F_{\alpha}^2$ ）に有意差はみられなかった。刺激板Ⅱbについては全体として変化はなかった。

実験Ⅱa. 累積、累除、前後の安静の4条件における呼吸数の間には有意な差はなく（ $p > 0.05$, $F_0 = 0.634 < F_{\alpha}^2 = 4.60$ ）。被験者間には有意な差（ $p < 0.05$, $F_0 = 3.064 > F_{\alpha}^2 = 2.25$ ）があった。3累積、2累積においては、累積の前半、後半と難易に差があると思われるが累積前と併せた3条件における条件間には、心搏数、α波ともに有意な差はみられなかった（ $p > 0.05$, $F_0 = 2.32, 0.390 < F_{\alpha}^2$, $F_0 = 0.043, 0.034 < F_{\alpha}^2$ ）。Ⅱb. クレパリン作業量と相関をもつ呼吸数を有するものは、24名の被験者中3名であった。

考察：長時間の視的注意の集中においては、視野は狭められ周辺部への注意が欠落する傾向が認められるが、この実験からは、意識機能の変遷を証明する資料は得られなかった。暗算による精神集中は、時間の経過とともに問題があつたかしくなり、それだけ集中度も高まっていったものと思われるが、生理的指標を十分変化させるには至らなかった。他方、クレパリン作業量と呼吸数との相関の欠陥は、呼吸等の生理的指標の心理的意義に対する限界を示すものと思われる。

図1



少年犯罪の地理的分布

— 東京都西部における少年犯罪の地理的分布 —

佐伯茂雄
(警視庁)

目的：東京都西部内における少年犯罪の多発地域と非行少年の多住地区ならびに犯罪率を解明し、その地理的分布を知り、少年犯罪の重発的防止対策樹立の一助とすることを、まず、その目的とする。

次いで、戦後、東京都における少年犯罪の第一最盛期である昭和25年当時の非行少年の居住地、非行地分布、および犯罪率との比較をなし、その変動状況を明らかにすることを目的とする。

方法：電子計算機によって得られた昭和41年の警視庁防犯部少年第一課の資料「少年非行率の実態」(その1)により、少年犯罪の地域的分布状況、すなわち、その非行行爲地、居住地、犯罪率等と巴毎に集計順位化し、これら相互間の順位相関を求め、このようにして得られた昭和41年の都区内の少年犯罪の地理的分布状況と、日本心理学会第16回大会、昭和27年5月(1952年)発表の、昭和25年の東京都西部の「少年犯罪の地理的分布」の結果と比較考察をする。

結果：

表1 昭和25年と同41年の少年犯罪に関する順位比較表

	居住地順位		行爲地順位		少年犯罪率順位		犯罪率順位	
	昭25	昭41	昭25	昭41	昭25	昭41	昭25	昭41
千代田	23	23	11	19	23	23	23	18
中央	19	22	10	16	20	22	13	2
港	6	17	3	18	17	21	1	12
品川	5	5	8	6	5	10	10	4
大田	1	1	2	1	2	1	11	14
世田谷	2	3	7	5	1	2	19	20
目黒	15	18	20	22	12	17	15	17
渋谷	21	19	19	8	19	19	17	16
新宿	9	12	4	2	15	12	5	9
中野	10	20	13	23	14	14	7	23
杉並	13	13	15	15	3	5	21	21
文京	18	21	18	21	18	20	18	19
豊島	8	14	9	7	16	15	3	8

北	3	8	6	10	7	9	2	11
板橋	7	4	14	9	10	4	8	10
練馬	22	16	23	20	21	7	16	22
台東	20	11	1	3	8	16	22	3
荒川	12	7	16	12	13	18	9	1
足立	4	2	5	4	4	3	6	6
江東	17	9	22	17	22	11	4	5
墨田	11	15	12	11	11	13	12	13
葛飾	16	10	21	14	6	6	20	15
江戸川	14	6	17	13	9	8	14	7

考察：(1) 表1の居住地順位の大きく上位化した区は、台東、江東、江戸川の3区である。それゆえ、大きく下降した区の施策等を参照し、より治済な少年非行防止対策を、今後、樹てその推進を計らなければならぬだろう。

(2) 全般的には昭和25年時と同41年のこの相関は、 $r = 0.669$ である。それゆえ、16年の社会的・経済的変遷のあった今日でも、その分布状況には、大きな変化は認められない。

(3) 行爲地順位では、渋谷区のみが大きく上位化している。これは従来より上位にあった副都心の新宿区の隣接して、また、最近の犯罪の広域化のひとつの現れと解せよう。

(4) 都の昭和43年「青少年白書」によると、新宿、渋谷などは、他府県より上乗してきた少年による非行が多いとされている。(浅草、銀座地区も同様)この事実も、居住地順位と犯罪率順位が相関(25年 $r = 0.598$ 、41年 $r = 0.370$)からも、十分、理解される。

(5) したがって、これらの地区では、従来より以上の早期発見活動が遂行される。

(6) 犯罪率の大きく上位化した区は、中央、台東、荒川の3区である。25年と41年の間の相関は、 $r = 0.387$ と低い。それゆえ、これらの区は(4)の事実に見み、流入少年および流入勤労少年の非行防止対策を、より鋭利に、考えなければならぬだろう。

(連絡先) 新宿区西大久保4-170、新宿少年センター

家庭と犯罪との関係

三原 憲三

1 犯罪の原因としての家庭

犯罪の原因は、個人の心理的、生理的、精神的事情にもとづくことは、もちろんであるが犯罪人をめぐる気候凡土の影響、人口密度、経済的条件、文化的条件その他の社会的諸条件にもよることが少なくない。前者は犯罪の内的原因であり、後者は外的な原因であろう。これら犯罪者の生活過程をとりまき、その性格の形成に影響を及ぼし、レンツ・エフスナーのいわゆる人格形成環境(Personlichkeitgestaltende Umstand)として作用し、あるいは犯罪行動の習得、規範意識、順法心の形成に影響する間接的条件としての家庭環境の良否は、まさに外的な原因となす一場合とすることができよう。

しかして家庭は、夫婦および子供を中心として構成される団体であり、人間が生育過程において最初に接触する外界であり、いわゆる一次的集団として最初のものであって、家庭の教育は幼児の人格(Personlichkeit)の形成と社会的適応性の獲得とに極めて重大な関係がある。したがって犯罪の外的原因としての家庭の環境(Umwelt)が犯罪に及ぼす影響は、すべて精神の発育期である少年に顕著である。概して少年の時期は、精神的、肉体的に未成熟であり、一面において種々の良い面が現れると同時に、他面には罪過的部面も現れてくるのであって、その結果、少年犯罪の増加をみるにいたり、社会防衛上も重大な問題を提起することとなる。

2 その対策

少年犯罪の原因として、犯罪心理学の立場からは、主として少年期における肉体的、精神的な特色、幼児期から成人期へと移行する肉体的な成長と精神的な変動を多くともなった不安定性が、少年の逸脱的な行動を導く要因であろう。しかして少年犯罪は、いわゆる人生の最初の危機にともなった現象であろう。ゆえに少年犯罪の防圧および少年非行防止対策として、まず家庭環境の改善、是正をもつてもっとも重要な対策となすべからう。家庭環境の悪化にともない激増する浮浪性少年を家庭に帰し、あるいは各種社会施設を充実、強化して、養護施設、児童厚生施設に収容し、もつてこれらの矯正を図り、他す、これらから影響を受け、非行化する少年の増加を防止すべきであろう。

最近では、少年犯罪の問題が重要視されてくるとともに、警察、教育、福祉の諸機関、社会事業団体、一般市民等の関係者による活動と総合調整する目的で設けられた地域の青少年問題協議会が中心となつて、とくに問題の多い地域を対象として、特別の対策を講じる必要があろう。

すなわち市区町村単位の青少年問題協議会などが成人だけの組織ではなく、これら青少年の自主的な組織の代表者を、進んでその構成分子に加えて活発な活動をすべきであろう。青少年の育成を目的とする組織にはP・T・AやB・B・S、児童發達班、修養団、保護司会、児童委員組織、社会教育組織等が数えられるが、これらの組織が活発な活動をしていなければ、これらの組織が未だに地味住民の理解と協力が得られぬからではなからうか。とくに精神薄弱者、性格異常等の特殊児童およびその家庭については、学校教員、児童福祉司、児童委員その他のケース・ワーカーによる個別的な指導を強化する必要がある。なお、これらの指導、保護には、それに相応する施設を必要とすることは当然であろう。

家庭環境の悪化した場合には、これに代わって少年の保護、善導機能を果たすべきことを期待されるのは学校教育であろう。しかし、その学校も教師の威信の失墜、教師自身の価値体系の混乱等の事情から、少年に正しい行動規範を教え、その社会的逸脱を阻止して、健全な育成を図る機能を果たさなくなつてゐるのではあまいが。がような意味で、少年非行対策として学校や家庭への働きかけが強調されなければならぬであろう。すなわち、この激動する社会において、自己の責任において自主的に行動することのできる人間の育成が家庭、学校を通して望まれるのである。小、中、高等学校において、学科の教授を目的とすることなく、教師と児童、生徒とが直接、接触して、あらゆる生活上の問題について助けを与え、解決すべきであろう。また学校が地域社会との間に緊密な連絡を保つために、高等学校における特別教育活動を盛んにしてゆくことも、重要な活動の一つであろう。

犯罪性精神病患者の心理的分析

○ 関 力
(神奈川県立栄養短期大学)

伊 藤 亨二
(早稲田大学)

目的：数年前より、犯罪性精神病患者に対する二つの問題が、日本刑法学会並びに刑事裁判所で問題として提起せられている。その一つは、犯罪性精神病患者に対する刑事責任能力（限定責任能力の有無）の問題であり、他の一つは、保安処分の適否の問題である。本報告においては、これら二つの問題の問題点を整理し、現状における法曹会（刑事裁判所・日本刑法学会・法制審議会）の意識並びに態度を説明し、それらに対する近い将来の展望を予測してみたい。

一、犯罪性精神病患者の刑事責任能力

1. 刑法39条

- ①心神喪失者ノ行為ハ之ヲ罰セス。（責任無能力）
 - ②心神耗弱者ノ行為ハ其刑ヲ減輕ス。（限定責任能力）
2. 大判。昭和6年12月13日。集10巻。682頁。

心神喪失・心神耗弱

心神喪失ト心神耗弱トハ孰シモ精神障礙ノ態様ニ属スルモノナリト雖共ノ程度ヲ異ニスルモノニシテ、即チ前者ハ、精神ノ障礙ニ因リ事物ノ理非善惡ヲ弁識スル能力ナク又ハ此ノ弁識ニ從テ行動スル能力ナキ状態ヲ指稱シ、後者ハ、精神ノ障礙未タ上叙ノ能力ヲ缺如スル程度ニ達セサルモノ、共ノ能力著シク減退セル状態ヲ指稱スルモノナリトス。

犯罪性精神病患者は、心神耗弱すなわち限定責任能力に該当するかどうか問題とされる。

二、犯罪性精神病患者に対する裁判所の見解

裁判所の犯罪性精神病患者に対する処遇慣行は、通常、限定責任能力を認めない。すなわち、正常人と同等の責任能力ありと認定している。その理由として、裁判官は精神障害の認定について「是非善惡を判断する能力」を中心に判断し、「是非善惡の弁別に従って行動する能力」いいかえれば、犯罪行動を抑制するコントロール・ブレーキについては、殆ど注目していない。精神病患者は、知能はおおむね正常である。従って「是非善惡を判断する能力」を有している。故に、裁判官は当該被告人について「精神病患者である」という精神鑑定が下ると、「責任能力あり」と判断するのである。

この裁判所の見解は、次に述べる理由により現状ではおおむね妥当であろう。すなわち、

まず第一に、裁判官は、精神医学、異常心理学に對

しては、素人である。従って、法廷で被告人の性格の異常を把握することは、まずもって困難である。

次に、犯罪者は一般人に較べ犯罪行動を抑制するコントロール・ブレーキがきかないものとされている。従って、この点について着目すると、すべての犯罪者に対し限定責任能力を認め、刑を減輕しなければならぬということになる。

最後に、常習犯罪者の中には、犯罪性精神病患者が多数含まれている、といわれている。常習犯に対しては、その犯罪の危険性に着目して刑を加重しているのが現行法であり、世間一般の要望でもある。もし精神病患者なるが故に刑の減輕をはかるとすれば常習犯についてどの様に考えたらよいのか、未だ不明である。

三、犯罪性精神病患者に対する日本刑法学会の見解（保安処分）

刑法学会では、統一した見解が未だ示されていない。その理由は、思うに次に掲げる事項からであろう。

- ①精神病患者についての概念が曖昧であること。
- ②範囲が広く、正常者と異常者の境界がつきにくいこと。この事実とは、特に、保安処分の問題とからんで人権侵害の危険性が考慮されていること。
- ③精神病質の診断が、かなり困難であること。
- ④精神医学・異常心理学の現状では、治療が極めて困難であり、なおかつ、精神病患者専門の収容・治療施設のないこと。

四、法制審議会刑事法特別部会の見解（保安処分）

「A案」精神病質の犯罪者を特別に考慮し、制度は設けない。「B案」精神障害者に対する保安処分（治療処分）を拡張して、精神病質の犯罪者にもこれを適用する。「C案」主として精神病質の犯罪者を対象とする特別の保安処分として、矯正治療処分を設ける。「D案」重大な罪を犯した者のうち責任無能力でない精神病患者に対しては、通常の刑罰と矯正処分を併科。

五、結 語

犯罪性精神病患者についての認定が正確に評価されるようになるまでは、これに対する保安処分は、人権侵害におち入り易い危険性が予想される。保安処分に相当する犯罪性精神病患者を選別しうる方法を早急に研究すべき事が急務ではないかと考える。

（連絡先）神奈川県立栄養短大。電331-0989

日本応用心理学会第35回大会準備委員会

会 長	山 下 俊 郎	(児 童 心 理 学 研 究 室)
委員長	金 平 文 二	(教 育 心 理 学 研 究 室)
委 員	島 田 俊 秀	(心 理 学 研 究 室)
	加 藤 綾 子	(児 童 心 理 学 研 究 室)
	横 野 喜 久 子	(保 育 学 研 究 室)
	鈴 木 淑 子	(")
	大 滝 ミ ド リ	(児 童 心 理 学 研 究 室)
	片 柳 君 代	(教 育 心 理 学 研 究 室)
	時 由 貴 子	(心 理 学 研 究 室)

経営と人材を結ぶ



日本リクルートセンター

人材募集のためのPR業務

企業内教育業務

人事試験業務

採用試験の開発・コンサルティング
と
実施の代行

心理学の知見と技術にもとづく各種の
能力検査・性格検査・適性検査の研究
開発、さらに実施・職務適性診断まで、
専門スタッフがコンピューターを駆使
して行なっています。

現在、心理学専攻者が、18名勤務して
おります。

採用・就職のための
調査を情報提供業務

出版業務

本 社：東京都千代田区神田錦町1-1 神田橋第一ビル(101)
TEL(292) 5811 (大代)
支 社：大阪市東区平野町3-20 加藤ビル(541)
TEL(231) 9171 (代)
営業所：名古屋(450) / 福岡(812)

— 〈近日入荷予定・只今ご予約受付中〉 —

学者、研究家、実務家必携！

今日の斯界の最高の水準を示す！

「社会心理学ハンドブック」

全五巻改訂第二版

THE HANDBOOK OF SOCIAL PSYCHOLOGY

2nd ed. 5 vols. Edited by Gardner Lindzey and Elliot Alonson, Univ. of Texas. 1968: Fall ~ 1969: Spring (Pub. by Addison-Wesley)

全五巻セット ￥20,000

待望の「社会心理学ハンドブック」改訂第二版が、いよいよこの八月より刊行開始されます。本書は、十三年ぶりの全面的改訂によるもので、現代アメリカの第一線の学者、専門家が寄稿しており、斯界の最新の成果、最高の水準を示すものと目されています。最初の二巻は今秋入荷の予定ですので、お早目のご予約をお待ち申し上げます。

(株) 紀伊國屋書店 洋書部

本店 東京都新宿区角筈1丁目826番地

郵便番号 160-91 振替口座 東京125575

Tel. (03) 354-0131 (大代表)

渋谷店 東京都渋谷区大和田町1番地 渋谷東急ビル3階

郵便番号 150 Tel. (03) 463-3241

営業所 札幌・仙台・千葉・横浜・富山・名古屋・京都・

大阪・岡山・広島・福岡

(新校舎建築中)

21世紀を拓くコンピュータ技術 女性にも開かれた新しい職業プログラマ



学生実習専用

電子計算機 (NEC、三菱)
3台による本格的な教育

電子計算機部

ハードウェアコース
(開発・保守・設計)

ソフトウェアコース
(システム技術者・プログラマ)



電子工学部・サービス技術部

テレビ専門部 (カラーテレビ科舎)

鉄筋4階近代的学生寮150室完備

東京都大田区西蒲田 (国電蒲田駅西口3分)

電話 (732) 4771~5 学則 200円

学校
法人

日本電子工学院

NECビデオテープレコーダはその鮮明な画質、スローモーション、ストップ画面、長寿命ヘッドなど本格的なビデオテープとして、あらゆる用途にご利用下さい。

鮮明な画質

フェライトヘッド、広帯域FM-RF回路、高度なバランスをもった変復調回路の採用によりすぐれたS/N比で、極めて鮮明な画像が得られます。



東京家政大学

ビデオテープレコーダ

エレクトロニクスで未来を開く

NEC
日本電気

本社 / 東京都港区芝五丁目7番15号 TEL(452)1111(大代表)

お問合せは放送機事業部営業部営業部まで 郵便番号・108

田町事務所 / 港区芝五丁目33番7号 TEL(453)5511(大代表)

郵便番号・108



躍進する！

T.K.K 心理学実験器機

竹井の製品は、ありとあらゆる分野に活躍しております。

竹井機器工業株式会社

カタログ進呈

本社	東京都品川区旗の台1-6-18	電話 03(786)4111代~4番
新潟工場	新潟県中浦原郡小須戸町矢代田	電話 025038 131・617番
大阪支店	大阪市東区道修町1-11(加藤ビル内)	電話 06(231)5531・1741番
東北出張所	宮城県仙台市北4-9-4	電話 0222(34)8570番
九州出張所	福岡県福岡市奈良屋町9-10	電話 092(28)6617番

好評図書

家庭教育

山下俊郎 著

家庭教育の持つ特質として、家庭の人格形成的な機能を重視し、最近の心理学的な研究を基礎にその概説を試み、その上で家庭教育の具体的な方法について解説。最近注目をひく家庭教育を体系的に理解するため、また実際問題の相談相手に必読書。
A 5 上製函入 / 426頁 / 価1000円

園原太郎 / 蜂坂二夫 共著

子供の心理としつけ

B 6 上製
380円

田代不二男 著

新版 社会福祉学概説

A 5 上製
500円

社会福祉

A 5 上製
430円

新版 児童福祉概説

B 6 上製
380円

一番ヶ瀬康子 著

アメリカ社会福祉発達史

A 5 上製
880円

近刊

笹山京 / 江口英一 / 田中寿共著

生活保護制度——国際比較研究——

A 5 上製 / 240頁 / 予価800円

欧米諸国の公的扶助制度との比較の上に立って、わが国のその多くの問題点の核心を提示し、いかにあるべきかを解説。

★図書総目録呈★ / 東京都文京区大塚2丁目1番17号 / 振替東京130621 光生館

A・ゲゼルの名著!!

生月雅子 訳

狼にそだてられた子

B 6 一五〇頁
価 三五〇円

彼女は生まれて間もなくオオカミにさらわれ、母オオカミとともに実に七年間をホラ穴の中で過ごした後、シング牧師によって人間世界にひきもどされたのである。

この書は、数奇な少女カマラの一生を、シング牧師の日記を資料に、アメリカの著名な実験心理学者A・ゲゼル博士が科学的なメスをふるってまとめたもの。類書がほとんどないという貴重なもので、必読に価しよう。(朝日新聞評)

依田 新・岡 宏子 訳

乳幼児の発達と指導

A 5 五〇〇頁
価二、四〇〇円

山下俊郎 訳

乳幼児の心理学

(出生より五歳まで)

A 5 六四〇頁
価二、八〇〇円

周郷・山下・大羽・神山 訳

学童の心理学

(五歳より十歳まで)

A 5 六一〇頁
価二、八〇〇円

112 東京都文京区目白台3-1-21 家政教育社
電話(九四一)六二六五

現代教育心理学

A5上製/320頁/¥900.

岡山大学教授 森 重敏 編著
都立大学助教授 三浦 武

青年心理学

A5上製/216頁/¥760.

教授 金平文二 共著
東京家政大学 助教授 島田俊秀

おねがい

広大な心理学研究の分野も、いまや、極端な細分化をみせています。このような現象をまえにして、隣接の研究領域の理解を深めるためにも従来のスタイルをこえて、新しい角度から、基本的な内外の論文・文献・資料の編集をこころみる必要があるのではないかと考えます。みなさまのご意見・ご要望をぜひおきかせ下さい。

垣内出版株式会社

東京都新宿区神楽坂2-21 TEL (268) 5820 振替東京25966 郵便番号162

主要営業品目

木製、スチール製家具

学 校 用 備 品

室内装飾、設計・施工

田 中 製 作 所

社 長 田 中 信 一

東京都豊島区池袋6-1969

電 話 東 京 (982) 5168番 (代)

産業心理学講座 全6巻

甲南大学教授 永丘智郎 〈責任編集〉 **【完結 好評重版】**

いまや産業は、技術革新・開放経済等の厳しい現実のなかにある。本講座は、そこに働いている生きた血脈の流れている“人間”の労働と産業との結びつきをあらゆる角度から解明し、わが国で初めての産業心理学の集大成であり、心理学研究者・職場管理者・経営者の好指標である。権威30氏の共同力作。

- | | | | |
|-----|------------------------|-------------|--------|
| 第1巻 | 産業集団心理学 | 石毛長雄・武沢信一編 | 価1000円 |
| 第2巻 | 労働青年心理学 | 永丘智郎編 | 価1000円 |
| 第3巻 | 産業人事心理学 | 近藤貞次・松浦健児編 | 価1000円 |
| 第4巻 | 災害・リハビリテーション心理学 | 辻村泰男・三隅二不二編 | 価1000円 |
| 第5巻 | 産業福祉心理学 | 牛窪 浩・片山義弘編 | 価1000円 |
| 第6巻 | 販売・広告心理学 | 朝倉利景・小嶋外弘著 | 価1000円 |

改訂 幼児心理学 山下俊郎著 価1200円

相談心理学 沢田慶輔編 価1500円

社会心理学概論 近藤貞次監修 価800円

人間工学概論 真辺春蔵・長町三生編 価1000円

朝倉心理学講座・全8巻

- | | |
|------------------------|-------------------|
| ①現代心理学概論
岡本・永丘 編 | ⑤臨床心理学
竹内・松村 編 |
| ②児童心理学
松本金寿 編(本社品切) | ⑥産業心理学
永丘智郎 編 |
| ③青年心理学
松村・西平 編 | ⑦社会心理学
岡本・後藤 編 |
| ④教育心理学
黒田正典 編 | ⑧生活心理学
岡本重雄 編 |
- 各巻A 5判 260頁平均 定価 680円

人文科学
図書目録
進呈

朝倉書店

東京都新宿区新小川町2-10
電話(260)0141(代)振替東京8673

事務用品・印刷・印章・事務機械

とらや事務株式会社

本社	板橋区板橋3-24-9	TEL 963-2521 代
埼玉支店	埼玉県新座町大和田	TEL 0484(71)1447~8
事務機部	板橋区仲宿64	TEL 96 1-0557
法令センター	板橋区仲宿38	TEL 961-3716
印刷工場	板橋区仲宿39	TEL 961-1748
小売部		

新刊 教科書 書籍 雑誌

②美堂書店

本店
電話 917 6483

東京家政大学構内売店
電話 961 5226 内65

児童心理学講座

A5判・9本縦組 定価 各巻九八〇円

全10巻
別巻1

- 第一巻 成長と発達
- 第二巻 発達と学習
- 第三巻 言語機能の発達
- 第四巻 認知と思考
- 第五巻 知能と創造性
- 第六巻 情緒・欲求・動機
- 第七巻 社会的発達
- 第八巻 人格の発達
- 第九巻 社会生活とマス・コミュニケーション
- 第十巻 発達障害と教育

十一月第一回配本開始

監修 桂広介・園原太郎・波多野完治・山下俊郎・依田新

学習心理学ハンドブック

好評発売中!

定価二、八〇〇円

東京・文京
大塚三ノ三ノ七

金子書房

写真のご用命は!

古谷写真店

文京区大塚1-5-20
(教育大附属中入り口角)
東京家政大学内支店
TEL(941)8340・(983)5007

家政大学御用
出前・迅速

おそば
松屋

十条駅南口前
電(908)3888

日本応用心理学会第35回大会発表論文抄録

(非 売 品)

昭和43年9月10日 印刷

昭和43年9月20日 発行

編 者 日本応用心理学会第35回大会準備委員会
東京都板橋区加賀1丁目18番地1号

東京家政大学

発行者 山 下 俊 郎

印刷所 東京都千代田区岩本町3丁目10番4号
寿印刷株式会社
